

君の激情に恋をして

考える人

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

幼馴染である少女に、歪んだ恋をしてしまった少年の物語。それが悪だと知りながら、自分を消すことのできない少年がたどり着く場所  
は――。

原作沿いで物語は進みます。

# 目次

きっかけ	1
僕が景に惹かれるわけ	5
景から見た幼馴染	11
演技だから	14
仮面を被るもの	19
遠くの君	25
臭い	29
普通の感情	35
僕のいる意味	42
厄日	46
知らない感情	52
目を背けた幸せ	59
景のカムパネルラ	64
変わり始める二人の日常	69
腹の内	74
幼馴染の嘘	80
想いは交わらない	86
羅刹女編	
宣戦布告〜1人目〜	94
宣戦布告〜2人目〜	100
また今日も	107
意外な再会	113
ジョーカー	118

関わり始める異物	124
ぶつけてみせてよ	130
見えないフリ	138
告白	144
人でなし二人	150
本来の形	156
羅刹女 サイド甲①	164
羅刹女 サイド甲②	172
羅刹女 サイド甲③	178
悩める二人の羅刹女	187
百城千世子	199
羅刹女 サイド乙	205
それでも彼らはすれ違う	213
君の激情に恋をして	221
エピソード①	230
エピソード②	239

## きっかけ

初めてそう感じたのは小学生のころだった。

まだ幼かったとある日のこと。

僕は近所に住む、幼なじみの少女とケンカをした。

きっかけはもう覚えていない。

たしか小学生らしいくだらない理由だったと思う。

「もう知らない！光なんて大っ嫌い!!」

そう叫ぶ少女は、目に涙をため、射殺さんばかりの視線で僕をにらみつけていた。

普段はおとなしめな印象のほうが強かったため、その豹変ぶりにひどく驚いたのを覚えている。

でも、それ以上に、僕は別の感情に心を支配されていた。

上っ面なものではなく、本気で僕のことを嫌いだと語る表情。

怒りと悲しみの激情で、生まれつき整ったかわい顔を歪ませる。

周りにいた友人たちが、その表情とあふれ出るオーラに怯えていた。

そんな少女を僕は――

なんてきれいなんだと、そう思ってしまったんだ。

――

「光ー！ちよつと来てー！」

高校から帰り、帰宅部である僕は特にやることもなく、家でゴロゴロしている」と母親に呼び出される。

「なに？母さん」

「またおばあちゃんからいっぱい野菜が届いたの。いつもみたいにお

裾分けしてきて」

そう言う母の手には、田舎に住む祖母から送られてきた野菜が、袋一杯に詰められていた。

「わかった。行ってくるよ」

「よろしくねー」

母に見送られ、僕は野菜を持って家を出る。

目的地は徒歩一分というかなり近場で、小学生のころからよく見知った家。

目的の家につくとその家の家主が、家の前で一枚の紙を眺めながら、買い物袋を持ってボーっと突っ立っている。

「バカでも分かるように演じたのに」

「どうしたの？景」

「あ、光！」

僕の存在に気づいた幼なじみの彼女、夜風景は勢いよくこちらに振り向く。

「バカでも分かるよう涙を流したのに落とされたの！」

なんの話だろうか？

そう思っていると、景は持っていた紙をこちらに見せてくる。

『オーディション』『不合格』……ああ、審査落ちちゃったんだ」

「そうなの。ちゃんと演じたつもりだったのに……」

たしか少し前に、役者のオーディションを受けるとい話を、景がしていたことを思い出す。

5次審査くらいまではとん拍子で受かったみたいだが、何万人と受けるオーディションで最後まで残るのは、さすがに景といえども厳しかったらしい。

「もしかしてオーディションの内容って、悲しい演技とかだったたりした？」

僕の質問に、景は驚きの表情を見せる。

「どうしてわかったの？」

「何日か前から、『悲しみ』の感情がずっと残ってたから」

景はよく感情を引きずる。

いや、別の感情を忘れるといった方がいいのだろうか？

とにかく、景が映画を見て悲しい感情になったら、映画を見終わってもそれがずっと残る。

数日間その感情が残り続けることだつてざらにある。

オーディションがあつたということ、もしかしたらと思つたが、どうやら僕の推測は当たつていたようだ。

「ダメね。リセットしなくちゃ、この感情」

「ルイちゃんとレイちゃんにバレないようにね。お姉ちゃんの泣いてるところなんて見たくないだろうし」

「ん、気をつけるわ」

「あ、そうだ。これお裾分け」

本題を思い出した僕は、持っていた野菜を景に見せる。

「どいつても、ちようど買い物に行つてきたところだつたみたいだけど」

「ううん、嬉しいわ。いつもありがとう。おばさんにもありがとうつて伝えて」

「了解。じゃあね景、また明日学校で」

「もう帰るの？野菜持つてきてくれたんだし、ご飯食べていけば？」

「ありがたいお誘いだけど、帰つて用事があるからやめておくよ」

「そう……わかつたわ。また明日」  
「うん」

目的を果たし、僕は景と別れ帰路につく。

家に帰ると、僕はすぐにベッドへと倒れこむ。

そうして思い出すのは、先ほどの景の顔。

何日も前から、本物の悲しみの中にいた景。

審査に落ちたことで、多少なりともショックを受けていたあの表情

鼓動が速くなつていくのを感じる。

ダメだ、治まれ、これは抱いてはいけない感情だ。

僕は今日も、芽生えた気持ちに蓋をする。



## 僕が景に惹かれるわけ

決定的だったのは、小説家である景の父親が家を出ていった時だ。あの時の景の、燃え盛るような怒りを、どこまでも深い悲しみを、僕は決して忘れないだろう。

その表情を見て、僕は己を知ったのだから。

正直に言おう。

僕は夜風景が好きだ。

けれど、僕が景にこの気持ちを伝えることは未来永劫ありえない。だって、この恋心は間違ひなく歪んでいるから。

景の泣いている表情が好きだ。

泣いている姿はまるで一枚の絵画のように、存在しないはずの悲しみを僕に与える。

景の弱っている表情が好きだ。

悲しみに打ちひしがれている姿は、まるで今にも壊れてしまいそうで、消えてしまいそうで。

その不安定な姿がとてもきれいだと感じ、つい手を伸ばしてしまいそうになる。

景の怒りに駆られる表情が好きだ。

他の感情が寄り付かない純粹な怒りに、僕は目が離せなくなる。

その怒りを、僕だけに向けて欲しいと焦がれてしまう。

もちろん、不器用に笑う景のことも可愛いと思うし、景が楽しんでると僕も楽しくなる。

それでも、僕がもつとも心を惹かれるのは——負の感情だった。

ずっとなんとなく感じていたそれを、中学生の時にはつきりと自覚したんだ。

僕の持つこの感情は、恋心は、間違つたものなんだって。

—————

僕が高校に通うための最短ルート上には、景の家がある。

そのため、僕は毎朝景の家の前を通る。

当然そこには、ちようど景と鉢合わせるのではないかという期待もある。

とはいえ、運良く鉢合わせたとしても、景は走って学校に行ってしまうので、ほとんど話す余裕もないのだが。

今日はその期待が叶ったようで、ちようど家の前を通ると景が立っていた。

「おねーちゃんは役者さんにならないとダメ!!」

少し遠くからでも聞こえる叫び声。

景の妹であるレイちゃんのものだ。

どうやらなにか揉めているようで、しばらくすると、これまた景の弟であるルイくんまで泣き出す始末。

「朝からどうしたの？景」

「あ、おはよう光」

「おはよう。それで、ルイくんなんで泣いてるの。レイちゃんも」

「それが……私のこと怖いみたいで」

泣いているルイくんを必死にあやしながら話す景の言葉は、いまいち要領を得なかった。

ルイくんも一向に泣き止む気配を見せない。

どうやら、僕がいることにも気づいていないらしい。

ルイくん、一度泣き出すと止まらないからなあ。

そうこうしていると、景の家の前に一台の車が止まり、男の僕から見てもカッコいいと思う容姿の整った男の人が、中から姿を現す。

年は同じくらいか少し上ほど。

誰だろうか？景の知り合いだろうか？

「夜風景君、すまないが一緒に来てくれないか」

「あなたオーデイションにいた……」

「ウルトラ仮面だ!!」

その男の人を見て、先ほどまで泣いていたルイくんが一瞬で泣き止

み、興奮しながら詰め寄る。

ウルトラ仮面……たしかルイくとよくやるごっこ遊びで、そんな名前が出てきたような……

そう考えていると、いつの間にか周りが大騒ぎになっていた。

『本物のウルトラ仮面だ!!』

『アレ星アキラよ!!奥さん皆呼んできて!』

多くの子供と近所のおばさんたちがこちらを——というより、この男の人をめぐって向かってくる。

もしかして、この人すごい有名人なのだろうか?

「頼む…早く車に」

男の人は慌てて、景たち三人を車に乗せようとする。

誘拐とかではなさそうだけど、大丈夫かなコレ。

「ほら、君も早く!」

「え?」

なぜかなし崩的に、僕まで車に乗せられてしまった。

どうやら、この男の人は星アキラという俳優の人らしい。

昨日落ちたといっていたオーディションの最終審査で、受けるはずだった四人のうちの一人が辞退した。

そのため、景に代わりに出て欲しいということで、迎えにきたというのが事の顛末だそうだ。

こういうのって、役者本人が直々に迎えにきたりするんだな——なんて考えていると、助手席に座っていた僕と運転しているアキラさんの目が合う。

「そういえば、君は……君も夜風君の兄弟かな?」

「いえ、僕は——」

「違うよ!!光くんは友達いないおねーちゃんの一人だけの友達!あといつも食べ物くれる!」

僕の代わりに元気よく答えたのは、後部座席から身を乗り出したル

イクんだった。

「……まあそんな感じですよ」

「そうだったのか、巻き込んですまない。ただオーディションまで時間がない。申し訳ないが君もついてきて欲しい」

あ、降ろしてくれないんだ……

まあ確かに、もうしばらく走ってしまったため、今から戻るとかなりのタイムロスだろう。

僕はついていくことを了承し、オーディション会場へと向かうことになった。

オーディション会場につくと、すぐに審査が開始される。

お題は目の前に野犬がいるというもの。

最初こそ困惑していたものの、景の想像の産物である野犬を、周りの人間にまで認識させるその演技は圧巻だった。

皆が景の演技に引っ張られ、景の演技に注目し、目が離せない。もちろん僕もそうだ。

芝居のことなんてまったく知らない僕でも、景の演技が一番だと簡単にわかった。

景は必死に傍にいる家族——ルイくんレイちゃんを野犬から守ろうとする。

そしてついに、景は野犬を踏みつぶした。

家族を襲おうとした野犬に対し、明確な怒りを持って。

全身からとめどなくあふれる景の怒り、それを、僕はずっと見ていたと——

そこで僕は思考をとめる。

ダメだ、これ以上考えてはいけない——

今は素晴らしい演技を見せた景を称賛する。

そうだ、それだけでいい。

「ほら、ルイくんレイちゃん、おねーちゃんのところに行って来たら？  
すごかったよって」

「うん!!」

元気よく返事をして、二人は景の元へ駆け寄る。  
これでいい、二人が景を現実へと引き戻してくれるだろう。

「ねえ君、あの子——夜凧景君の友達だつて？」

嬉しそうにルイくんレイちゃん達とハイタッチを交わしている景を眺めていると、審査員の一人が僕に話しかけてくる。

「はい、そうですけど……」

「君も俳優とか興味ない？アキラ君と比べても見劣りしないし、年上の奥様方に受けそうだし」

……あれ、もしかして僕スカウトされてる？

こういうのって本当にあるんだ、びっくりした。

「えっと、僕は……」

「夜凧君も間違いなく合格だろう。君もスターズに入れば、彼女と一緒に活動できるよ」

その言葉に、ドクンと心臓がはねたのがわかる。

彼女と一緒に、なんて甘美な響きなのだろうか。

きつとこれから、景は役者として活躍し、いろんな役を人々に見せるようになる。

それを近くで見れるとしたら、なんて幸せなのだろうと思う。

ひいき目もあるかもしれないが、景は間違いなく有名になる。

どんどん大きな舞台に立ち、スターと呼ばれるような存在になるはずだ。

だからこそ、そんな人間の傍に、僕みたいなやつがいてはいけない。

「すいません……あまり興味がなくて」

「そうかい？残念だ、すごく素材はいいのに。あ、これ名刺ね。気が変わったらいつでも連絡してくれ」

そう言つて僕に名刺を手渡し、審査員の人は離れていく。

僕が抱く思いは、間違いだとわかっている。

こんなひどく醜い気持ちを抱いたまま、こうやって景の傍にいるこ

と自体、ダメなことだと理解している。

それでも、今だけだからと言い訳して、景から離れることができない。

ルイくんレイちゃんと一緒に、景が僕の方に向かってくる。

「光、どうだったかしら？私の演技」

こちらの気持ちを知らない景は、照れくさそうな笑顔を僕に向けて尋ねる。

「うん、かっこよかったよ。とても」

僕は後ろめたい気持ちを隠して、笑顔を貼り付ける。

何年も、何年も、繰り返し付けてきた偽の仮面。

きつと、これからも外すことはないのだろう。

## 景から見た幼馴染

「うん、わかった。先生に伝えておく」

『ありがとう。あと今日は夕方から——』

「バイトでしょ？大丈夫、その間ルイクんとレイちゃんの面倒は僕が見るから」

『ほんとにありがとう。またお礼はするわ』

「いいって、そんなの。仕事頑張ってね景」

『うん』

そう言って、景との通話が終了する。

景がオーディションを受け、残念ながら落選した次の日。

高校に到着早々、スマホの着信音が鳴り、相手を確認するとそれは知らない番号。

迷惑電話かとも思ったがとりあえず出てみると、声の主は景だった。

なんでも景曰く、オーディションには落ちたが、役者として？M撮影を行うことになったらしい。

ヒゲがどうこう、拉致されたがどうこうと、よくわからないことも言っていたが、無事役者としての一步を踏み出せるようで安心する。

きつとこれからも、仕事で学校を欠席するようなことは増えていくはずだ。

僕はこのまま高校へと通い、景は役者の道へと進む。

僕と景の道はここから別れ、交わることもなくなっていく。

景はスターへと駆け上がり、少しずつ会う時間も減っていくのだから——

けど、これでいい。

いいんだ、これで。

こうして僕は自分に言い訳をする。

締め付けるようなこの胸の痛みを、なかったことにして。

—————

私、夜風景にとって光は、間違いなく特別な存在だと言い切れる。たった一人の友達であるということもそうだし、いつだって光は傍にいてくれた。

父に捨てられたあの時も、母を亡くしたあの時も、光は離れることなく私を支えてくれた。

ルイとレイが生まれて、思わず笑ったその喜びを共有したのも、家族以外では光だけだった。

思えば当然のように光は私の隣にいて、多くの出来事と、それに伴う感情を共有してきた。

それこそ小学生のころから数えると、10年近くの仲になる。

光にはいつも何かをしてもらってばかりで、申し訳ないとは思っていても、どうしてもその優しさに甘えてしまう。

私からはほとんど何も返せていない。

あえて言うなら、私の作った料理をたまに振る舞うくらい。

光に対して恋愛感情はあるのか？と問われれば、あるかもしれないというのが正しい気がする。

私と光が恋人同士になって、イチヤイチャな恋人生活を送るなんてことは微塵も想像できないけれど、光が私の傍からいなくなるというのも想像できない。

もし光から『結婚しよう』と言われれば、ためらいなく受け入れてしまおうんじゃないかと思う。

じゃあ光の方は私のことをどう思っているのだろうか？

自分でいうのもなんだが、私は光以外に友達がいなし、人付き合いが得意とは言い難い。

いつのことだったか、ストレートに『私といて楽しいの？』と光に聞いたことがある。

『……楽しいよ。自分でもびっくりするくらい』

そう言った光は、なぜか悔しげに笑っていたのを覚えている。



言葉と表情があまりにもちぐはぐで、けれど、本当の光を見た気がしたから。

どうあれ、私たちはお互いが大切な相手だと考えているのは確か  
で。

きっとこれからも私の隣には、当然のように光がいるはず。

その時の私は、そう思っていた。

—————

スタジオ『大黒天』事務所

そこには天使がいた。

私が所属するスタジオ『大黒天』の映画監督、黒山さんに言われ  
テレビをつけると、同じ年くらいの少女が映画製作の記者会見を行っ  
ている。

テレビに映るその少女に、私も、ルイもレイも、一瞬で夢中になっ  
た。

「女優、百城千世子。今一番売れてる若手女優だな。お前たちの世代  
の代表格だ。夜風、こいつをどう思う？」

「一瞬で私たちを夢中にさせた、綺麗…なのに顔が視えない」

私の言葉に、黒山さんは満足げに笑う。

そう、こんなにも輝いているのに、百城さんは仮面を被っているよ  
うで。

そしてなぜか、その姿が光と重なった。

「私この人に会ってみたい」

## 演技だから

「演技の練習に付き合っただけだ」

授業の休み時間、隣の席に座る景が真剣な表情で僕に頼み込む。

景曰く、ある映画のオーディションに受かるため、特訓がしたいとのこと。

具体的には――

1. 役作りは正確に。

2. ただし共演者に手を上げない

という目標を掲げて。

2 番目はもはや役者どうこうの問題ではないと思うのだが、どうやら前科があるらしい。

一体どんな状況の撮影だったのだろうか？

「いいよ。景の家？」

「うん」

「わかった。帰りに寄るよ」

特に断る理由もないため、僕はその頼みを了承した。

そうして放課後。

「とりあえず、前回演じたシチュエーションと同じ設定でやってみようと思うの」

「たしか女の子が切り殺されるのを、黙ってみていることしかできない江戸時代の町人Aだったっけ？」

「そう」

学校で聞いた、共演者に手を出したという話はその時のことだったらしい。

女の子を斬り殺す役の人に、思わず蹴りかかったとのことだ。

ちよっと見てみたかった。

「じゃあ僕がその斬り殺す侍の役かな。……蹴らないでね」

「う、さすがに、大丈夫……だと思おうわ」

できればはつきりと断言して欲しい。

「じゃあ殺される子供の役は——ルイくん、お願い」

「えー、ルイ倒す方がいいー!」

「それだとちよつと現実味が足りなくなつちやうなあ。後でウルトラ仮面ごっこ一緒にやるから」

「しようがないなあ」

なんとか不満を言うルイくんを説得して、配役が決まる。

ちなみにレイちゃんやんはカチンコ役。

そのレイちゃんから、はい!と行ってデッキブラシを渡される。

どうやら刀の代わりらしい。

「じゃあいくよーよーいカチンコ!」

カチンコって口で言うんだ。

それはともかく、僕はルイくんを切るふりをすればいいのかな。

「え、えつと……でやあ〜」

僕はルイくんの数メートル手前で、ゆつくりデッキブラシを振り下ろす。

「うわああやられた〜」

ぽてんと、ルイくんが後ろに倒れる。

「……」

「……」

「……」

「ごめん、いつも通りじゃれてるだけにしか見えないわ」  
だらうね。

とはいえ、僕やルイくんに役者張りの演技力を求められても困る。

「その、もうちよつとそれっぽく見せられないかしら?」

「そう言われても……」

「私のやり方なんだけど、本気で怒ってる時のこと思い出したり——」  
本気で……そう言われると、誰かに本気で怒った覚えがあまりない。  
い。

自分以上に嫌いな人間なんて、この世に存在しないのだから。いつだって、怒りの対象は自分にしか向いていなかった。ずっと、こんな自分を否定したかった。

「斬り殺す武士の気持ちになりきったり」

なれないよ、無茶ぶりにもほどがある。

そもそも、ルイくんを傷つける気持ちになんてなれるわけがない。間違えて怪我でもさせてしまったら、きっと景は——景は？

「ほら、これは演技だから」

演技——ああ、そうだね、これは演技だ。

……なんだろう、頭がボーっとする。

俺はルイくんを殺そうとする役。

そう、役だ、何も後ろめたいことなんてない。

やめろ、こんなものが、僕の本心であるはずがない！

何を言っているんだ？これは演技だろ？俺は何一つためらうことなんてないじゃないか。

僕は……いや、俺は——

「これは演技だから」

私がそう言った瞬間、光をまとう雰囲気明らかに変わった。

その瞳は無機質で、ルイではなく私の方を見ている。

普段から物腰柔らかく、一緒にいて安心するような存在であるはずの光を、怖いと感じてしまう。

光は持っていたデッキブラシを床に置くと、ゆっくりとルイに向かって近づいていく。

ルイの目の前までくると、膝を床につけ、ルイと目線の高さが合う

位置までしゃがむ。

「……光くん？」

ルイも光の異変を感じ取ったようで、困惑するように名前を呼ぶが、光は何の反応も示さない。

光はルイの首元へ、ゆつくりと手を伸ばす。

ルイの細い首筋に、ピトリと光の手が触れる。

今私の目の前にいるのは、間違いなく光だ。

優しく、いつも私を気遣ってくれる幼なじみ。

なのに――

光の顔を見ても、初めて会った人間にしか見えない。

いや、初めて会ったは違う。

以前どこかでこの顔を見たことがある。

あれはたしか……

頭の中に浮かぶ違和感を頼りに、今までの光との記憶を探る。

そうだ、もつと幼いころに――

思考を巡らせる最中、視線を上げた光と目が合う。

どこか期待するようなその目に、私は吸い込まれそうになる。

『いいのか？お前の大切な家族に、俺は手をかけるぞ』

光は何も言っていない。

でも、私には確かにそう聞こえた。

「ダメ!!」

そこからは体が勝手に動いていた。

ルイに触れる光を突き飛ばし、勢い余って仰向けに倒れた光に対し、そのまま馬乗りになる。

「ルイに――!」

「……おねーちゃん?」

それは戸惑うようなレイの声。

その声で私は現実に引き戻される。

「ツーンめん!!」

私は慌てて立ち上がり、光の上から身を引く。

痛そうに背中をさすりながら立ち上がる光に、レイが近寄り話しかける。

「光くん大丈夫？もう、おねーちゃん！手を出しちゃダメじゃなかったの!？」

「アハハ、大丈夫大丈夫。景のことを責めないでやって。ほら、きつと僕の演技が迫真だったんだよ」

そう言いながら苦笑いを浮かべる光は、私のよく知る優しい光だった。

さっきのあれは、私が役に入り込みすぎた故だったのかしら？

いや、きつとそう。

だって――

光が、私の傷つくような事をするはずないのだから。

## 仮面を被るもの

「いやあ、やっぱかわいかったな千世子」

「そうだね。あと脇役の女の人が死に際、好きだった男に恨みつらみをこれでもかと吐き捨てて死んでいくシーンもよかったよね」

「ええ……そこ？いやまあ確かにびっくりはしたけど。やっぱ光は変わってんな」

「そうかな？」

今日は休日を利用して、高校の男友達と渋谷に出かけていた。

友人の希望もあり、映画を見ることになった僕たちが選んだ作品は、主演・百城千世子の話題作。

それは約2時間の映画で、話題になるだけあって十分満足のいくものだった。

映画を見終わった僕らは、近くのハンバーガーショップで昼食をとりながら、映画の感想を言い合う。

「特にラストシーンが圧巻だった。千世子の可愛さが際立ってて」

「うん、あのシーンは一番の盛り上がりなだけあってみんな熱かった。だからこそ、一人だけ綺麗でいる演技が、僕には違和感を覚えるものだったけどね」

「はあ？なんの話だ？」

「いや、ただ僕の見たかった演技じゃなかったってだけ」

「あんなに綺麗だったのに文句つけるとか、お前の理想高すぎるだろ」  
「……高いわけじゃないよ」

「ふーん……ゲ！まじかよ!？」

「どうしたの？」

友人がふとスマホをのぞいたかと思うと、おかしい声を出して、その顔を歪ませる。

なにかあったのだろうか？

「わりい、バイト先の店長から急に呼び出されちゃって……人が足りないんだと」

「そうなんだ。まあ一番の目的だった映画は見終わったし、ちょうどよかつたんじゃない？行ってきなよ」

「ほんと申し訳ねえ、また埋め合わせはする。じゃあ！」

そう言つて友人は慌てて席を立ち、バイト先へと向かう。

さて、これからどうしようか？

特に寄りたいたいところも、買いたいものもないし、少し早いけどこのまま帰ろ——

「ここ、いいですか？」

これからの予定を考えていた僕は、その声にふと顔を上げる。

友人の座っていた席に、座る許可を求めてきたのは女の人だった。

おそらく、僕とそう変わらない年齢だと思う。

思う——というのは、この女性が帽子をかぶり、サングラスをかけ、マスクをつけており、顔の情報がまったく入ってこないからだ。

なんだ、この怪しいを絵に描いたような人は。

しかも何が問題つて、僕の座っている二人席以外にも、周りに空席がいくらでもあるということだ。

つまりこの人は、あえて僕の正面に座ってきたということになる。

「いいですか？」

「あ、はい」

先ほどよりも強くなった口調に、僕はつい肯定してしまう。

「ありがとう」

「いえ……」

やばい、早く食べ終わって席を離れよう。

「ねえ、さつき百城千世子の話してたよね？」

目の前に座った女性はマスクを外すこともなく、僕へと語り掛けてくる。

「……そうですね」

「じゃあ『違和感』つて、どういう意味？」

しまった——この人千世子ファンなのか。

さつき友人と、千世子の話していたのを聞いて絡んできたのかな？



いや、でも悪口は言っていないはず、うん、大丈夫。

「別に変な意味じゃないですよ。違和感を覚えるくらい、綺麗すぎて惚れ惚れしたっただけで——」

「嘘つき」

「……」

「惚れ惚れしたなんて、そんなこと微塵も思っていないよね」

表情は相変わらず隠されており、声のトーンも変わらない。

そのせいで、女性がどのような感情を抱いているのか見当がつかない。

「本当のこと教えてよ。あなたが百城千世子という女優を見て感じた、心からの素直な気持ちを」

わからない。

感情が読めないため、その言葉が本気か判断できない。

普段、感情がせわしない景とばかり一緒にいるため、こういう相手にどう対応していいか迷ってしまう。

でも、わからない以上どうしようもない。

怒られることも覚悟で、僕は自分の感じたことを、嘘偽りなく伝えることに決めた。

「綺麗だと思ったのは本当ですよ。でも、素顔を隠して演じる役者に僕は興味がない。だから、何も感じなかったというのが、僕の素直な気持ちです」

「……じゃああなたも、仮面を外して演じるのが人間だと思おうの？」

「それは違う」

「え？」

「僕が言っているのは好みの話であって、正しい正しくないの問題じゃない。ましてや、人間かどうかなんて、仮面一つで決まるはずがない」

でないと、僕は僕を人間だと認められなくなってしまう。

「その仮面に譲れない意味があるなら、絶対に外すべきじゃない」

僕の仮面も、景の前では絶対に外さないと決めている。

それだけは絶対に譲れない。

例え、誰になんと言われようとも。

それが、自分自身であつても。

「……ふーん、好みとは違つてもちゃんと認めてくれるんだ。あと途中から敬語とれてたよ」

あ、しまった。

つい興奮して。

「その口調のまま話してよ。私たち、そんなに年も離れてないし」

「……わかった」

「名前は何ていうの？」

そのやま(しやう)  
「園山光」

「じゃあ光君の好きな俳優とか教えてよ」

すごい距離つめてくるなこの人。

しかし、好きな俳優か……正直そこまで映画とかドラマを見るわけじゃないからなあ。

まあでも、真っ先に思い浮かんだ顔はある。

「夜風景——今は無名だけど、きつとこの先有名になるよ」

僕は自信をもって、幼なじみの名を告げる。

「……」

この時、今まで一切わからなかった目の前の女性の感情が、一瞬だけ読み取れた。

とても怒っている。

その感情を向けられ、少し心地いいと思つてしまった自分を自己嫌悪する。

「どうしたの？」

「いや、なんでもないよ」

歪んでるうえに節操無しとか、最低にもほどがあるだろ。

いい加減にしろよ、僕。

「大丈夫ならいいけど——あ、ライン交換しようよ。また演技についての意見聞きたいし」

「？僕の感想なんて聞かなくても、語り合える千世子ファンなら周りにいくらでもいるんじゃないの？」

「光君みたいな視点の人からも聞きたいの。ほら、バーコード出して」  
かなり強引だが、僕は彼女の指示に従ってしまう。

彼女は僕の出したラインのバーコードをスマホで読み取る。

「じゃあ私、そろそろ撮影があるから行くね」

そう言っただけで彼女は立ちあがる。

撮影？なんの話だろうか？

その言葉に疑問を抱いていると、ピロンとスマホの音が鳴る。

おそらく、彼女からの友達申請だろうとスマホを覗く。

『百城千世子』

名前の欄に、はっきりとそう表示されていた。

「……………え？」

思わず顔を上げると、マスクとサングラスを外した彼女の姿があった。

それは、さっき見た映画の主演とまったく同じ顔をしていて――

「ばいばい」

手を振りながら、またマスクとサングラスをつけ、女優『百城千世子』はその場を去っていった。

—————

後日

「よ、夜風さん『デスアイランド』出るって本当？」

「うん」

「じゃあさじゃあさ、千世子と会った!? 生千世子と!？」

「…会ったわ」

映画『デスアイランド』の出演者オーディション結果が一般に公表され、合格者の一人である景は一躍学校の人気者となる。

休み時間中、質問攻めにあっていた景だったが、授業開始前になりようやくそれも落ち着く。

ちなみに、千世子の話をしていた時の景は少し怯えていた。

「……………ねえ景、千世子と会ったとき、もしかして怒らせるようなことし

た？」

「……エスパー？」

本気で驚いた表情で僕を見つめる景。

「やっぱり」

僕はあの日のことを一人納得した。

## 遠くの君

景が、映画デスアイランドの撮影へと出発してから半月以上経った。

ルイちゃんとレイちゃんも、景の所属する事務所に預けられているらしく、僕の出る幕はない。

これほどまで僕の生活において、夜凧家が関わらないのは久しぶりだ。

だが、思っていた以上に僕的心情は穏やかだった。

いつも通り学校に行って、いつも通り勉強して、いつも通り友人たちとつるんで。

何をしても、僕の心は揺さぶられない。

ちゃんと生きているはずなのに、生きている気がしなかった。

とはいえ、そんな日常の中にも、ほんのわずかな非日常は存在していた。

部屋でゆっくり過ごしていると、スマホの着信音が鳴る。

ラインのトーク画面一覧を開くと、一番上にあつたのは『百城千世子』の名前。

トーク画面を開くと――

『昨日のドラマ、どうだった？私の横顔、綺麗に見えてた？』

それは自分の演技に対し、意見を求める言葉。

あのよくテレビで目にする有名女優が、僕みたいな一般人に感想を求めているのだ。

連絡先を交換して以来、百城さんからは頻繁にこのような連絡がくる。

自分の演技を向上させるために、いろんな視点からの意見が欲しいとのことらしい。

しかし、僕はドラマや映画をそんなに見る方じゃない。

事前に百城さんが、自分の出演する番組の情報を送ってくれるのだ

が、よく見逃してしまおう。

ちなみに、昨日のドラマも見忘れた。

ごめん、見ていない——そうメッセージを送ろうとした時、新しくメッセージが送られてくる。

『たしか光君、夜風さんのファンだったよね？実は今、撮影で一緒なんだ』

うん、デスアイランドだね。

知ってる。

『ちゃんと感想くれれば、夜風さんのサインもらってあげてもいいよ』サインか……もらおうと思えば直接もらえるしなあ。

あ、でも、僕にあてたものではなく、一人のファンに送るつもりで書いたサインだと考えると、ちよつと欲しいかも。

それに、初めての映画作品出演時のサインなんて、ちよつとプレミア感あるし。

とはいえ、ドラマを見てないため感想を送ろうにも送れない。

というわけで、いくつか関連ワードを入れて検索し、ドラマの感想を書いてある適当なサイトをコピーしてそのまま送る。

検索してかなり下の方のサイトを選んだので、まあばれないはず。

ピロン

『これ、ドラマ感想サイトの文章そのままだよね？』

……なんでばれたんだろう。

もしかしてエゴサでもして、自分の批評をすべて把握しているのだろうか？

いや、僕みたいな一般人に意見を求める時点で、その可能性もあるかもしれない。

仕方ない、正直に白状して許してもらおう。

『ごめん、見てなかった。今度はちゃんと見て感想送る。サインは欲しいです』

少し図々しい気もするけど許して。

『次は水曜20時からのインタビュー映像。忘れないでね。罰としてサインは名字で書いてもらおうから』

水曜ね、ちゃんとメモしとこ。

別に名前はどっちでもいいけど。

『あ、私のサインもいるっ…』

……ここでないとか言える人間は、相当な猛者だと思う。

『うん、欲しい』

『既読がついてから変な間があったよ、今』

うぐっ。

『まあいいけど、ちょっと夜風さんに嫉妬しちゃうかも』

嫉妬って……百城さんには、今の景なんか比べ物にならない数のファンがいるだろうに。

ごくわずかな景のファンに嫉妬しなくても。

結局、撮影の休憩時間が終わったようで、連絡はそこで途絶える。

スマホの電源を切り、ベッドにあおむけで倒れながら目を閉じる。

景は元気にやっているのだろうか？

百城さんと上手くやっているといいけど。

……ああ、だめだな。

すぐに景のことが頭に浮かんでしまう。

景と会うことがない——それがいずれ訪れる未来だ。

ちゃんとなれなきや。

—————

デスアイランド撮影30日目 最終日

映画デスアイランドの全ての撮影が終了したその日の夜、撮影関係者たちによる打ち上げが盛大に行われていた。

豪華な食事を堪能した後、締めとして行われた海での花火。

それもほぼ終わりへと近づき、夜風景と百城千世子の二人は線香花火を楽しんでいる。

夜風のTシャツには、役者仲間たちのサインがこれでもかと思き込まれており、その中には千世子のサインもある。

「ありがとう、千世子ちゃん。サイン書いてくれて」

「気にしなくていいよ、友達なんだから」

「友達……そうよね、友達」

千世子の友達という言葉に、夜風は顔をほころばせる。

「嬉しそうだね?」

「うん、私こんな友達ができたの初めてだから」

「ふーん……あ、そうだ。夜風さんもサイン書いてくれない?私の知り合いに、夜風さんのファンがいるの」

「え!私のファン!」

「うん。アキラ君にも負けないくらいイケメンさんだよ」

自分のファンという聞きなれない言葉に驚くと同時に、夜風は興奮が抑えられない。

「書く!書くわ!何枚書けばいいかしら!」

「一枚でいいと思うよ。名前は園山君で——あ、花火終わっちゃった」言葉の途中で、千世子の持っていた花火が燃え尽きる。

「後で色紙持つて行くね」

そう言つて千世子は立ち上がり、終わった花火を捨ててに行く。

一人残された夜風は、まだかすかに燃えている花火をぼんやりと眺めていた。

「園山……光とおんなじ名字だわ」

光だけではない。

久しく会えていない幼なじみを思う気持ちは、夜風も同じだった。

「元気にしてるのかしら……」

小さな声でつぶやかれたその言葉は、波の音と共に消えていく。



臭い

無事、景がデスアイランドの撮影から帰ってきて、しばらくしたある日のこと。

景から一通のラインが届く。

内容は『明日一緒に演劇行かない?』というもの。

珍しいな、景からどこかに行こうって誘ってくるなんて。

まあ、前まではお金がなかったということもあるけど。

最近は何者としてのお金がいくらか入ってきて、生活に大分余裕があるみたいだ。

映画の協賛会社から、スマホをもらったと言って喜んでいたのも記憶に新しい。

了承の返事を景に送ると、さらに追加でラインが送られてくる。

『あと、映画の撮影でできた役者の友達も来るの』

役者の友達か……まあ僕の知らない人だろうな。

その友達がスターズの俳優なら、名前くらい聞いたことがあるかもしれないけど、オーディション組なら絶対に知らないはずだ。

そう結論付け、僕はそれ以上深く考えなかった。

そして次の日

劇場入り口前に集合した僕と景は、景の友達がくるのを待っていた。

景はあからさまにそわそわしており、まったく落ち着きを見せない。

「ちょっとは落ち着きなよ景」

「だ、だって!もう約束の時間を15秒も過ぎてるし——」

「誤差だよそんなの。そういえば、その友達ってなんて名前の人なの?前話してたオーディションで一緒だった人?」

「千世子ちゃん」

……え？

「千世子って……あの百城千世子？」

「うん」

……ええ。

仲良くなったとは言ったけど、まさか一緒に出かけるほどだったなんて。

どうしよう、少し気まずい。

別に隠すつもりはなかったけど、結果的に景と知り合いだということとを隠したまま、百城さんとはずっと連絡を取り合っていたわけだし。

「もしかして光、緊張してるの？やっぱり千世子ちゃんほどの有名人ともなると、光でも緊張するのね」

「うん……まあね」

多分、景が思っている緊張とは違うのだろうけど。

こういうことになる可能性を考えなかった自分の浅はかさを恨んでいると、一人の男の人が僕たちの方へ向かって近づいてくる。

「夜風君。久しぶり」

そう言っただマスクを下ろし、素顔を見せるその人に、僕は見覚えがあった。

「アキラくん!? 偶然ね!」

星アキラ——景のオーディションのとき、車に乗せてくれた人だ。

スターズに所属する有名な若手俳優で、たしかデスアイランドの撮影にも、景と一緒に参加していたと記憶している。

「アキラさん、お久しぶりです」

「あ、君はたしか光君……だったかな？」

オーディションの時に一度会っただけの僕の名前を、しっかりと覚えてくれていたらいい。

この人すごくいい人だ。

「はい、あの時はまともに自己紹介もできなくてすみませんでした。園山光です」

「星アキラです。そうか、夜風くんの友達って君だったのか」

「どういうこと?」

その疑問を口にしたのは景だった。

「それが——」

アキラさんの話によると、百城さんは急な仕事が入り、残念ながらこれなくなったらしい、残念ながら。

その百城さんの代打として、アキラさんが代わりに来たとのこと。

景はというと、これまたあからさまに落ち込んでいた。

「ほら行くよ景。百城さんが来れなかったのは残念だけど、元々演劇を見に来たんでしょ?」

「……そうね」

落ち込んでうずくまった景に、僕は手を伸ばし、その手を掴んだ景を引っ張って立ち上げる。

さあ行こう——そう思った矢先、アキラさんが僕の耳元で小さく語り掛ける。

「光君……もしお邪魔なら僕は帰るけど」

「……何の話ですか?」

「いや、その……君と夜風君の邪魔をする気はないという意味で——」

その言葉で、僕はアキラさんの言いたいことを理解する。

ああ、なんだ。

何を気にしているのかと思えば、そんなことを気にしていたのか。

「気にしないでください。僕と景はそういう関係じゃありませんから」

僕のその言葉に、アキラさんはどこか納得のいっていない様子だったが、それ以上何も言うことなく、三人で劇場の中へと入る。

席へと座り、まだ少し落ち込み気味だった景だが、舞台が始まった

瞬間——景の気持ちは一瞬で舞台に持っていかれた。

舞台上に出てきた一人の男、舞台役者『明神阿良也』。

彼の演技に、見てる観客は一瞬で魅了された。

本能的な心の芝居を演じる、景と同じタイプの役者。

僕の好きなタイプの役者だ。

喜び、怒り、悲しみ。

彼の一挙一動に注目し、彼の感情に観客が引つ張られていくのがわかる。

二時間ほどの劇が終わり、観客も劇の余韻に浸りながら、ちらほらと席を離れていく。

そんな中、しばらくたっても景は放心状態のままだった。

「私、あの人のサインも欲しい」

どうやら、明神阿良也の演技をよっぽど気に入ったらしい。

そこにミーハーな気持ちはなく、心からの要望を景は口にする。

でも実際にすごかった。

できるなら僕もサインが欲しい。

「チケットのお礼だ。サインは僕がなんとかしてみせるよ」

そう心強いことを言つてのけるのはアキラさんだった。

知り合いのスタッフに頼んで、記者しか入れない場所に入れてもらうとのこと。

さすが芸能人だ。

「じゃあ僕は外で待っていますね。景、できたら僕のサインも頼んでみて」

「光君、別に君もついてきていいんだよ？」

一人だけ外で待とうとする僕に、優しいアキラさんはそう言うてる、が——

「いえ、僕は役者側の人間じゃない。ただの一般人ですから」

そう、僕は景やアキラさんとは違う。

ならその領域は守らないといけない——いや、こんなのはただの言い訳だ。

僕は今、一刻も早く景から離れたいんだ。

「景も僕に気にせず行つてきなよ。飲み物でも買つて待つとくから」  
「……わかったわ。じゃあまた後でね」

そうして、景とアキラさんの二人とは一旦別れることになった。

劇場の出口へと向かう前に、人気のない裏口のような場所で、僕はそこにあつたベンチに腰掛ける。

すごい演劇だった。

明神阿良也の演技は特に素晴らしかった。

彼の感情に観客が引つ張られていく。

彼が泣くと悲しくて、彼が笑うと嬉しくなる。

当然、観客には景も含まれている。

特にヤバかったのが、親を殺された怒りと悲しみを演じていた時。

僕は隣にいる景の顔を見ないことに必死だった。

一度見てしまえば、目を離せなくなることは明白だったから。

「……くそ」

はやる鼓動を必死に抑えつけながら、行き場のない醜い感情を、僕は小さく吐き捨てることしかできなかった。

—————

舞台役者 明神阿良也

インタビュ―を終えた彼は上機嫌だった。

最初こそ、興味のないインタビュ―を受けさせられ不満げだったものの、そのインタビュ―会場で見つけたのは、彼好みの臭いがする役者。

共演するのはまだ先になるだろうが、また会うのが楽しみだ——そう阿良也に感じさせるほどの少女だった。

そんな上機嫌な阿良也は、稽古場へと向かう際中、関係者入り口近くのベンチで座る一人の少年を見つける。

少年は目を閉じ、自分を落ち着かせているような状態だった。

関係者ではない。

一般人が迷い込んだのだろうか？

そう思考したところで、阿良也はすぐに少年への興味をなくす。

阿良也にとって、その少年が誰であろうとどうでもよかつたからだ。

だが、その少年のすぐ隣を通り抜けた瞬間、阿良也は立ち止まる。

振り返ると、少年はすでに立ち上がり、阿良也とは反対方向に歩き出していた。

「今の男……すれ違った瞬間、二人分の臭いがした」

興味のなかつたはずの少年を、阿良也はしばらく見つめる。

不気味だな——座っていただけの少年は、明神阿良也にそう感じさせた。

## 普通の感情

『星アキラ熱愛か!?!』

景と演劇を見に行った数日後の夜。

テレビを見ながらご飯を食べていた僕は、食べていたものを思わず吹き出しそうになる。

大々的に報道されるアキラさんの隣には、景の姿がぼつちりと映されていた。

「これ……この前のだよ。僕のいない間、こんなことになってたんだ」

無名の景はともかく、アキラさんの方は大丈夫かな？

そう考えていると、スマホの着信音が鳴る。

それは景からの電話だった。

「どうしたの景？こんな時間に」

『違うから!』

何が？

昔からそうだが、景は言葉が足りなすぎる。

『熱愛なんてした覚えないわ!』

「……もしかして、ニュースのこと？ちゃんと可愛く映ってるよ」

『ありがとう! ってそうじゃなくて!』

「わかってるよ。僕も一緒にいたんだから」

昔からどこか抜けてもいるんだよな。

勘違いされたくない気持ちはわかるけど。

『そう、よかったわ。あ、そうそう——』

……? 用件はそれだけじゃないんだろうか？

『私って、表現の方法を忘れてるらしいの』

「表現の方法?」

『うん。掘り下げた感情を表現することができなくて、でも黒山さんはそれを忘れてるだけだって』

景が感情を表現できない——そんなわけがない。

その黒山さんとかいう人の言う通り、ただ忘れてるだけだ。  
だってあの日の君は――

「……感情表現つてさ、当たり前前だけど、誰かに伝えることが目的なわけでしょ？」

『うん』

「じゃあ大丈夫だよ。景にその力はある。小さいころから景を見てきた僕が保証する」

『……黒山さんも光も、言い方がすごくわかりにくい。もっとはつきり教えてくれればいいのに』

ダメだよ、ダメなんだ。

黒山さんにどういう意図があるのかはわからない。

けれど、僕が景に詳しく伝えれば伝えるほど、僕もそれを思い出すことになってしまう。

喜や楽にまつわる記憶だけ思い出せば何の問題もないのに、僕の思考は僕の制御を受け付けようとしらないんだ。

「ほら、きつと景には自分で答えを見つけて欲しいんじゃないかな？  
自分でたどり着いたことって、忘れないって言うし」

とっさに考えた言い訳としては、まずまずだと思う。

『そうなのかしら……わかった、自分で考えてみるわ。ありがとう、光』

「どういたしまして。次の仕事も頑張ってね」

やる気のこもった返事を聞いて、通話は終了する。

深く、深く、できる限り沈めたはずの感情が、伝えるつもりのない  
思いが、自分の意思を聞かず顔を出そうとする。

まるで今の景とは正反対だ。

この醜い感情はいつか消えてくれるのだろうか？

もしくは、一生付き合い続けなければならないのだろうか？

それとも――



まったく想像のできない未来に頭を悩ませていると、スマホに新しい着信が入った。

景との通話から2時間後

静まり返った深夜の公園。

僕がその公園にたどり着くと、そこには待ち合わせていた人物が先に到着していた。

「こんばんは、光君。久しぶりだね」

「久しぶり、百城さん」

先ほどあった着信は百城さんからで、渡したいものがあるのとのこと。

おそらく約束していたサインの件だろう。

急な誘いではあったが、ハードなスケジュールからなんとか暇を見つけてくれたと考えると、断るわけにもいかない。

こういう深夜にしか時間をとれないなんて、有名人は大変なんだなと改めて実感する。

「はいこれ、夜風さんのサイン」

そう言って百城さんは持っていたカバンの中から、一枚の色紙を取り出す。

渡された色紙には、景の名前と『園山くんへ』と書き込まれており、文字全体が少し震えていた。

もしかして書きながら緊張していたのだろうか？

そう思うと、なんだか微笑ましくなる。

「嬉しそうだね」

「うん、まあ……」

そこで会話が途切れる。

無言の時間がしばらく続き、その間、百城さんは僕の顔をずっと見

据えていた。

なぜそんなにじっと見てくるのか、理由がわからないものの、それを居心地悪いとは思わなかった。

むしろ……

「百城さん」

「何？」

「このあとまだ時間ある？」

僕と百城さんはブランコに腰掛け、まるで普通の友達のように会話を交わしていた。

「ふーん、そんなに舞台すごかったんだ」

「うん、特に一人凄い役者がいて——」

「私とどっちが上？」

「……いや、演技ってどっちが上とかそういうのじゃなくて、その、ほら」

「フフ、冗談」

「……百城さんの冗談って、ほんとわかりにくいよね」

なぜ百城さんを引き留めるようなマネをしてしまったのか。

理由は自分でもわからない。

でも、百城さんとのこの会話を、僕は楽しいと感じていた。

「私、夜風さんとの撮影でわかったの」

「何が？」

「私の芝居はもっと上手くなるって」

撮影から帰ってきてきた景が言っていた。

百城さんは自分よりもよっぽど上手かったと。

なのに、本人はもっと上手くなるつもりでいる。

「それはすごく楽しみだ」

僕は本心からの気持ちを口にして百城さんの方を向くと、百城さんは少し不思議そうな顔をしていた。

「なんだか今日の光君、すごく私に興味を持ってくれるよね。もつとラインみたいに、素っ気ない態度取られると思ってた」

ラインでの僕、そんなに素っ気なかっただろうか？

そんなつもりはなかったんだけど。

「もともと話したいとは思ってたけど、光君の方から話したいって言われるとは思わなかったもん」

それに関しては、僕もよくわかっていない。

「まあいいけど。じゃあそろそろ行くね。もう夜も遅いし」

「人通りの多いところまで送っていくよ」

「百城さんが立ち上がったのと同時に、僕も立ち上がろうとする——が、

「ううん、車待たせてるから大丈夫」

それはそうか。

考えてみれば当然のことだ。

人気の女優をこんなところまで、夜遅くに一人で来させるわけがない。

お互い別れの言葉を告げ、百城さんは公園を後にする。

僕は公園に一人残り、少し振り返って考える。

ああ、確かにさつきまでの僕は変だった。

あんなわざわざ引き留めるようなマネをして、あれじゃまるで、百城さんと離れたくなかったみたいだ。

もしかしたら、僕は浮かれていたのかもしれない。

なぜだろう？ やっぱり、直接あの百城千世子と会えるのが嬉しかったのだろうか？

前回と違い、しつかり百城さんの綺麗な顔を見ながら話せたからだろうか？

だとしたら、僕にもちゃんとそういう感情があるということだ。

間違っただけではなく、普通の人が、普通に抱く感情を。

だからといって醜いものが消えるわけじゃない。

それでも、僕が普通に誰かを愛し、普通に誰かを好きになる——

その可能性があるとわかっただけで、僕は嬉しかった。

—————

光と別れた千世子は、待機させていた車へと近づき、車の主に声をかける。

「待たせてごめんね、アキラ君」

「遅かったね千世子君。すぐ終わるといふ話だったから心配したよ」

「思ったより話が盛り上がっちゃって」

そう言って千世子は、星アキラが運転する車の助手席に座り込む。

「こんな深夜に……母さんにバレたら怒られるよ。役作りのためって話だったけど、一体どんな役なんだい？」

アキラの言葉を受けて、千世子はカバンの中からあるものを取り出す。

そのあるものを見て、アキラは思わず声を上げる。

「なっ!？」

それはまるで本物の包丁だった。

「自分の友人を好きになってしまった恋人を殺す女子高生の役。その感情が知りたくて、友達を利用したの」

「君がそんな役を演じるなんて……!」

天使と呼ばれる百城千世子。

そんな彼女が、イメージとかけ離れた役を演じることに、アキラは驚きを隠せない。

「勉強になったよ。憎くて、心の底から殺すと決心しても、急に優しくされると決心が揺らいじゃうの。ただ、ずっと殺意を向けてたのに気づかれなかったのは、役者としてちよつと複雑かな」

淡々と話す千世子に、アキラは彼女がどこまで本気なのかわからない。

それと同時に、アキラには気になることがあった。

「君がそんな役を演じるため、わざわざ会いに行った相手……少し興

味があるな」

その言葉に、千世子はしばらく考えるが、適切な言葉が思い浮かばない。

「……夜風さんふうに言うなら、顔が視えない人……かな」

千世子の回答は、アキラにとつてまったくピンとこないものであったが、千世子にもう話す気がなさそうだったため、それ以上の追及を諦める。

車の窓ガラス越しに外の景色を眺める千世子は、どこか上機嫌だとアキラには思えた。

## 僕のいる意味

「おねーちゃん、ちよつと!!どーゆーこと!?!こんな時間にどーゆーこと!?!」

「ルイも一緒に夜更かしする!夜更かし!!」

「シカクカンケーなの!?!シカクなの!?!ダメだよ!光君以外許さないよレイ!!」

「ルイも一緒に遊ぶ!!寝る時間エンチョーする!!『9じまでに寝るルール』をはきして下さい!!」

「これから役者さんのお勉強会をするの。良い子だからいつも通りねんねしてね」

場所は景の家。

まだ起きていたいと駄々をこねるルイくとレイちゃんを、景が必死に説得する。

そんな様子を僕とアキラさん、さらに舞台役者の明神阿良也さんが後ろから眺めている。

なぜこんなことになったのだろうか?

きつかけは3時間前。

景からかかってきた一本の電話だった。

『セクハラ男が家にくるの!助けて!!』

それを聞いたとき、僕ではなく警察に連絡すべきではないかと思っただが、そのセクハラ男というのが阿良也さんのことらしい。

一体何をされたのか聞いてみたが、かたくなに教えてくれなかった。

とにかく失礼なことを言われたらしい。

時刻は夜10時過ぎ。

僕たち四人は、景の作ったカレーを食べていた。

「そういえば堀君は、なんでここにいるんだっけ?」

景の作ったカレーがよっぽど気に入ったらしく、遠慮なく何杯もおかわりしていた阿良也さんが、ふと思いついたように疑問を口にする。

堀君？

「星です」

ああ、アキラさんのことか。

「ぜひ僕も阿良也さんから役作りについて伺いたくて」

そう、僕以外の三人は役作りのために集まったということらしい。

あれ？僕のいる意味が分からない。

「君は、えーと……」

阿良也さんの質問対象が僕へと向く。

「園山です」

「園山君はなんでここにいるの？」

「僕にもわからないです」

「ふーん？夜風カレーおかわり」

興味ないならなんで聞いたんだろう？

阿良也さんもそうだけど、役者っていうのはやっぱり変な人が多い

のかな？

アキラさんのようにまともな人のほうが少ないのかも。

「ねえ景、僕もう帰っていい？」

「ダメー！いて!!」

アキラさんもいるし、問題ないと思うんだけど。

役者じゃない僕がいても、邪魔になるだけじゃないのかな。

一人だけどこか場違い感を抱えながら、しばらく無言でカレーを食

べ続けていると、唐突に阿良也さんが口を開く。

「ところで夜風って、弟妹きょうだいのこと疎ましく思ったことある？」

その言葉に、場の空気が固まるのがわかる。

「……………え？」

「さっきのチビっ子達のことだよ。疎ましく思ったことない？」

……何を言っているんだ？この人は。

「3人暮らしてしょう？だってこの家、君達の臭いしかしい。まだ10代なのに、2人のせいで大人になることを強いられたんじゃない？」

やめろ、それ以上は何も言うな。

景に、あの日々のことを思い出させるな。

「夜風、よく思い出してよ」  
止めるんだ。

これ以上阿良也さんが何もしやべらないように。  
声を上げろ、立ち上がれ、止めるんだ。

「自分の感情に正直であることは、役者の条件だからね」  
なぜ止める必要がある？

これは役者にとって必要なことなんじゃないのか？  
違う！だからといって景を傷つけていい理由にならない！

動け！何してるんだ僕は！ここで動かなきゃ、なんでここに僕がいるのかわからないだろ！

「<sup>ふたり</sup>弟妹を恨んだ夜もあつたんじゃない？」  
なんでここにいるのか？

そんなもん決まっている、俺は——

「本当は弟妹なんていなければ良かったって——」

勢いよく立ち上がり、阿良也さんの胸ぐらを掴む。

さんざん頭に思い描いたその行動をとったのは——僕ではなく、アキラさんだった。

認めたくない、否定したい、もう少しマシな人間だと思いたい。  
そんな願いをあざ笑うかのごとく、ひどい現実が僕を打ちのめす。

アキラさんが、もつともな怒りを阿良也さんにぶつける。  
本来なら、景の悲しみを知っている僕がすべきだった行動。

なのに、僕は立ち上がることすらできなかつた。

「あつたかも知れない」



阿良也さんの問いに、景は静かに口を開く。

「お母さんが死んで、誰もいなくなつて、でもあの子達のために元気でいなくちゃつて思つて」

それは、まるで懺悔のようにも聞こえた。

「毎日、毎日、毎日、毎日、ずっと映画を観て楽しい気持ちを思い出そうとした——」

よく、覚えている。

かける言葉がわからなかった僕は、ただ黙つて景の隣に座つて、一緒に映画を観ていた。

でも、映画の内容なんてほとんど覚えていない。

覚えているのは、深い悲しみと、自分のことすら燃やし尽くしてしまいそうな怒りを含んだ君の横顔。

きっと景は、その感情<sup>怒り</sup>を忘れてしまっている。

いや、思い出そうとしないだけかもしれない。

けれど、僕の脳裏には焼き付いて消えることのない罪の記憶。

もつとも美しいものを見たという歓喜の記憶。

「現実のこと全部忘れて映画の世界に逃げたいつて、思っていたことが…あつたと思う」

そう話す景の表情は本当に辛そうで、目に涙もためている。

そんな景の横顔から、僕は目が離せない。

「…でも、そんな私をレイとレイ、それに光が救ってくれて——」

違うんだよ景、僕はそんなふうに言われる人間じゃない。

景にそんな思いをさせる原因は僕にもあるんだ。

だというのに、俺は後悔や自責の念を微塵も感じていない。

有り余る感情が、僕のすべてを塗りつぶしていく。

——景、君は本当に綺麗だ。

## 厄日

景の言葉から何かを得たらしい阿良也さんは、満足した様子で帰っていった。

僕、アキラさん、景の残った三人はまるでお通夜状態。

特に景はかなりショックを受けている。

それは先ほどの思いを引きずったものではなく、役者として力量の差を見せられたショックだった。

静まり返っていた部屋だったが、しばらくするとポツポツという音が鳴り始める。

「雨……」

この時僕は、阿良也さんが傘を持たずに出ていったことを思いだす。

「僕ちよつと阿良也さんに傘渡しに行ってくる」

ついさつき出ていったばかりだから、今すぐ追いかければ間に合うだろう。

「私も行くわ」

「大丈夫、景はゆっくりしてて」

自分も立ち上がるうとした景を手で制し、自分だけで行くことを伝える。

正直に言うと、今は景と二人になりたくなかった。

片手で傘をさし、もう一方の手で阿良也さんに渡す傘を持って外に出る。

ちよつと走ると、すぐに阿良也さんの背中が目に入った。

「阿良也さん！」

僕の声に気づいた阿良也さんは振り返る。

すでに阿良也さんはびしょびしょで、手遅れな気もしたが、持っていた傘を差し出す。

「この傘使ってください。僕が百均で買った安物なんで、特に返さなくても大丈夫です」

阿良也さんは傘を受け取るが、それをさそうとせず、僕のことをじつと見つめていた。

「あの……阿良也さん？どうかしました？」

「園山君……君の臭い、前に嗅いだのを覚えてるよ」

「……？どこかで会いましたっけ？」

「俺も最初は気づかなかった。でも、さつき確信したよ。君のような珍しい臭いは忘れないから」

何の話だろうか？

阿良也さんの言いたいことがまったく理解できない。

「君からは——」

二人分の臭いがする」

その言葉を耳にした時、身が凍った。

「会ったときは何も感じなかった。どこにでもいるような、記憶に残ることのない平凡な臭い。だから俺も気づけなかった。でも、俺が夜風に質問し始めた時、もう一つの臭いが生まれた」

なんだ？この人はどこまでわかってるんだ？

「最初こそ、新しく生まれた臭いは小さかったけど、質問を重ねていくにつれ強い臭いになっていった」

……やめろ。

「徐々に大きくなっていったその臭いは、初めの臭いと混じり合い、また一つになっていった」

……やめてくれ。

「その臭いは、平凡とはほど遠い。今まで嗅いだことのないほど、どす黒いなにかを抱えた強烈な臭い」

お願いだから、それ以上僕を暴かないでくれ！

「夜風に質問したとき、堀君からも出ていた怒りの臭いを、君からは微塵も感じなかった。それどころか、喜んですらいたよね？」

——ねえ、本当に夜風のこと大切なの？」

僕は持っていた傘を投げ捨て、阿良也さんの胸ぐらを掴む。

そして……そして？

僕はこれからどうするんだ？

なんで、景の時に僕はこうしなかったんだ？

阿良也さんの言っていることに、何一つ間違いはない。

なんだ……僕は結局、自分可愛さに怒っているだけじゃないか。

こんな僕に、他人を怒る資格なんてあるわけがない。

掴んでいた手を放し、僕はただそこに立ち尽くす。

「夜風のこと大切なら、君は夜風から離れた方がいいよ。君の抱えるそれは、いつか夜風を不幸にする」

不幸に、か。

そんなこと――

「わかってますよ。僕が一番、誰よりも、わかってる」

僕は小さな声で、負け惜しみのようにそうつぶやくことしかできない。

阿良也さんが去ってしばらくの間、何もせずただ、冷たい雨に打たれていた。

その後、景の家に戻ると、景が慌てた様子で近づいてくる。

「どうしたの光?!びしょ濡れだわ!」

「……え?あ」

思った以上に、阿良也さんに言われた言葉がきいたみたいで、僕はびしょ濡れになっていることにも気づいていなかった。

いや、気づいてなかったというより、気にならなかったというべきだろう。

「途中で傘落としちゃって……」

自分でも厳しい言い訳だと思う。

「とにかくすぐにお風呂沸かすから。このままじゃ風邪引くわ」

「別にいいよ。このまま帰って――」

「ダメ!ほら早く!!」

だめだ、まだどこか頭がボーっとしてる。  
張り上げる景の声が、少し遠くに感じる。

僕はなされるがままに、景にお風呂場へと押し込まれる。  
景の家のお風呂に入るのは久しぶりだ。

たしか中学生の時、一緒に入りたいてわがまま言い出したルイくん達と入って以来だっけ？

シャワーを浴び、湯船につかると、冷えていたからだだが温まってくのを感ずる。

反対に、頭はだんだんと冷えていく。

『服乾かしておいたから。ここにおいておくわ』  
浴室を隔てる扉の向こうから、景の声が聞こえてくる。

「ありがとう」

『いいの。普段から光には迷惑ばかりかけてるから』

迷惑だなんて……そんなこと微塵も思っていないのに。

「ふー」

大きく息を吐き、感情を無理矢理リセットさせる。

剥がれてしまった仮面を、もう一度しっかり付け直さなければ。

僕は園山光。

景は大切な友人で、景の嫌がること、景が悲しむようなこと、景を怒らせるようなことは絶対にしない。

不必要な自分は消してしまえ。

優しく、落ち着いてて、冷静で、なんの問題も起こさない優等生。

それが僕だ。

……うん、よし。

これでもういつも通り。

お風呂から上がったら、また優しい笑顔で景に……

冷静になった頭で、僕は改めて今の状況を顧みる。

……いや、まずくないこの状況？

なんで僕は当然のように、同級生女子の家の湯船につかってるんだ。

しかも好きな子の。

いくら弱ってたとはいえ、なんで何も疑問を感じなかったんだ僕は。

というか景も景だ。

少しは警戒心というか、そういうのを持ってほしい。

景が恋愛とかに疎いのはよく知ってるけど、僕をお風呂に入れることに、一切躊躇がないのはどうかと思う。

わざわざ服まで乾かしてくれて。

あれ？パンツつて——だめだ、考えるのをやめよう。

しっかりと温まってから、きちんと折りたたまれていた服を身にまとい、景やアキラさんのいる居間へと向かう。

きっと景は何とも思っていない。

だから僕も、普段と同じ態度で冷静に対応しよう。

いつも通り、いつも通り。

「景、お風呂ありが、と……」

お風呂場から居間へと繋がる扉を開いたとき、僕は思わず絶句する。

そこには、思いもよらない人物が座っていたから。

「あ、光。千世子ちゃんが来てくれたの。光も知ってるでしょ？デスアイランドで、私と一緒に撮影した女優の千世子ちゃん」

そう言っ僕に百城さんを紹介する景は、嬉しさと戸惑いが入り交じる複雑な表情をしていた。

緊張からか、声も少し震えている。

「……友達？」

「うん、光っていうの。役者以外では唯一の友達」

百城さんの疑問に、景は間髪入れず答える。

「へえ……そうなんだ」

じつくりと観察するように、百城さんは僕を見つめてくる。

なんだろう、何もしてないのにすごく後ろめたい気分になる。

「百城千世子っていいいます。初めまして、光君」

「……ハジメマシテ」  
にっこりと、完璧な表情で百城さんは僕に笑いかける。

今日は厄日だ。

## 知らない感情

「……と、お茶を飲む音がやけに大きく聞こえる。」

僕、景、百城さんの三人は一つのテーブルを囲んで座っていた。

ちなみに、アキラさんは僕がお風呂に入っている間に帰ってしまったらしい。

できればいて欲しかった。

「……景、僕そろそろ帰——」

帰る、そう口にしようとした瞬間、百城さんと目が合った。

『帰るな』

百城さんは何も口にしていない。

ただ綺麗な笑顔を僕に向けている。

にもかかわらず、僕は確かにそう聞こえた。

「ところで、夜風さんは光君と付き合ってるの？」

「付き合っていないよ（わ）」

「ふーん」

僕と景の声がもろ被りしてしまい、百城さんの声のトーンが一段低くなる。

なんだろう、この火に油を注いでいる感覚。

百城さんの感情はすごく読みづらいためわかりにくいけど、もしかして怒っているのだろうか？

「でもすごく仲良そうに見えるよ。長い付き合いなのかな？」

「まずい、一番聞かれたくない質問だ。」

そもそも、僕がこんなにも居心地の悪さを感じているのは、景と友達であることを黙っていたからで。

景のサインまで要求しておいて、黙っていたのはさすがに申し訳なかったと思っている。

「その、僕と景は——」

「私は夜風さんから聞きたいな」

お前は黙ってる——そう言われた気がした。



こうなったら少しでも穏便に済むよう、景が誤魔化してくれるのを期待するしかない。

仲良くなつたのは最近だとか、家が近いだけだとか。

僕は景に対して必死にアイコンタクトを送る。

景もそれに気づいたようで、わかつたわというふうに頷く。

事情を知らないはずの景だが、なんとか僕の意図をくみ取ってくれたらしい。

やはり長年の付き合いで、通じ合うものがあつたみたいだ。

「私と光は幼いころからすごく仲良しで、小中高とずっと一緒だったの。今日みたいに家にもよく来てるわ」

ダメだった。

何一つ伝わってなかった。

景は一体何のアイコンタクトだと思つたんだろう。

完全にただの仲が良いですよアピールだ。

「ふーん」

「ルイとレイ……あ、弟と妹なんだけど、その二人とも仲良しで、しよっちゆう遊んでもらつてるの」

「ふーん」

「千世子ちゃんと一緒に行けなかつた演劇、光も一緒だったの」

「ふーん」

「落ちちやつたけど、スターズのオーディションでは応援に来てくれて——」

やめてやめてやめて。

さつきから百城さん『ふーん』しか言っていない。

顔は景の方を向いているのに、目だけは流し目ですつと僕の方を見る。

どうしよう。

やっぱり黙つてたこと怒つてるのかな？

でも僕と百城さんが知り合いだったことは、百城さんも景に話す気なさそうだし、後でラインでもしてちゃんと謝罪しておこう。

とりあえず今回は隙を見て逃げる。

間違つて二人きりになんてなつてしまえば、目も当てられない。

「あ、そうだわ」

景が突然、何かを思い出したというように声を上げる。

「お風呂沸かしてたんだつた。ついでに入つてしまわないと」

「じゃあ夜風さん先に入つてきなよ」

え？

「千世子ちゃんはお客様なんだから、千世子ちゃんが先に……」

「いいよ、夜風さんが先で。私は光君と仲良くおしゃべりでもしてる

よ」

え？

「でも……わかつたわ」

お願いだからもうちよつと粘つて。

「光、千世子ちゃん綺麗だからつて手を出しちやダメだから！」

「出さないよ」

なんてこと言うんだ。

人の気も知らないで。

とんでもないセリフを吐いて、景はお風呂場へと行つてしまう。

そして、残つたのは僕と百城さんの二人だけ……

「……」

「……」

沈黙が辛い。

全然仲良くおしゃべりなんて雰囲気じゃない。

尋問されている気分だ。

「何か言いたいことある？」

「……言うタイミングがなくて」

「サインまで要求したのに？」

ぐうの音も出ない。

「ごめん……」

「普段からお風呂入ったりするくらい仲良いの？」

「いや、お風呂に入つてたのはほんと偶然で」

「その割には、慣れた感じでお風呂から出てきたよね」

行動が完全に裏目に出てる。

やっぱり今日は厄日だ。

「フッフ、こういう感情なのかなあ」

僕が返事に困っていると、百城さんは急に笑い出す。

そのまま立ち上がり、僕の隣まで移動して腰を下ろした。

「どうしたの？」

「……」

百城さんは僕の質問に答えない。

その代わり、百城さんはゆっくりと手を伸ばし、僕の頬に百城さんの小さい手が触れる。

僕と百城さんの視線が重なる。

一瞬、呼吸が止まったような錯覚が僕を襲う。

重なる視線を逸らせない、逸らそうとも思えない。

『あなたが見てるのは私じゃない。私はこんなにもあなたのことを見てるのに』

脈絡も何もない唐突な言葉。

どこかそれは加工されているようで、ドラマの中のセリフのようだった。

『私の隣にいてくれないのなら、いつそ殺してしまおうか。あ、でもそうすると、このぬくもりまで消えてしまう……それは寂しいなあ』  
僕に投げかけられた言葉なのに、誰か別の人間に向けられているような言葉。

でも、その怒りは間違いなく僕に向けられている。

殺されるのか……ああでも、それも――

「いってっー」

わずかに遠くなりかけていた意識が、痛みによって引き戻される。

最初は添えられていただけの百城さんの手が、僕の頬を引つ張るようにつねっていた。

「痛い痛い。何するの百城さん」

「私に嘘ついていた罰」

「さつき謝ったのに……」

「許してほしかったら、今度私の言うこと一つだけなんでも聞くこと」  
なんでもつて……またえらくアバウトな。

でも今回は僕に非があるし、それも仕方ないか。

「わかった。約束するよ」

「うん、約束ね」

そう言つて百城さんは、やっと僕の頬から手を離してくれた。

けっこう強くつねられていたのではないだろうか。

まだ少しヒリヒリする。

「さっきの演技、どうだった？」

とりあえず百城さんの怒りは収まったのか、いつもラインで話しているみたいに、演技の是非について僕に問う。

やっぱり、さっきのはドラマかなにかのセリフだったみたいだ。

本当のことを言うと、さっきの演技について、あまり感想を言いたくない。

でも以前、演技についてはちゃんと答えると約束してしまった。

だから、正直に答えよう。

「よかったよ、すごく。」

君になら、殺されてもいい——そう思えるほどに」

自分は今、どんな顔をしているのだろうか。

—————

「千世子ちゃん、次お風呂どうぞ……あれ、光は？」

夜風がお風呂から上がり、居間へ向かうと、そこにあったのは千世子の姿のみ。

光の姿はどこにもなかった。

「光君ならついさつき帰っちゃったよ」

「そうなの」

実際、もう夜も遅いので何も不思議なことはない。

むしろ自分の都合で呼び出して、こんな夜中まで引き留めてしまったことに、夜風は申し訳なさを感じる。

「やっぱり、光には迷惑かけてばかりだわ。千世子ちゃん、光とは何の話してたの?」

「……」

夜風が千世子に尋ねるも、千世子はどこか上の空といった状態だった

「千世子ちゃん?」

「あ、そうだね。小さいころの夜風さんの話とか聞いたよ」

「え、私の話?」

「うん、夜風さんは昔からまったく変わらないうって」

自分の知らないところで自分の話をされていたことに、夜風は少し恥ずかしさを覚える。

何かおかしなことを話してないだろうか——そんな心配をしていると、今度は千世子が夜風に尋ねる。

「ねえ、夜風さんが初めて私と会った時、顔が視えないって言ってたよね。光君相手でも、顔が視えないって思ったことある?」

その質問に夜風は少し考える。

小中高、昔のことを思い出してみるも、千世子に対し覚えた感情を、幼馴染に対し覚えた記憶はなかった。

「思ったことないわ」

だが、過去を振り返ったことで、夜風はあることを思い出す。

小学生の時の幼馴染と現在の幼馴染。

その二つを比べるとわかる明確な違い。

いや、違いなんでものではない。

夜風にとつてその二人は、もはや完全に別人だった。

変わり始めたのはいつ頃からだっただろうか?

そんな疑問が夜風の頭に浮かぶが、小学生のころと比べれば人が変わるのも当然かと、自己完結して納得する。

改めて夜風は千世子の方を見ると、やはりまた上の空だった。

「どうしたの千世子ちゃん。さつきからボーっとしてるわ」

「ごめんごめん。光君って、やっぱり不思議な人だなーって考えてて」

千世子のその言葉に、夜風はどこか違和感を覚える。

しかし、何に違和感を覚えたのかまではわからない。

ただ、楽しそうに幼馴染のことを話す千世子に対し、感じたことのない思いを夜風は抱いていた。

## 目を背けた幸せ

負の感情が好き——それは、もうどうあがいても否定できない事実だ。

だからといって、負の感情を見せられれば、誰かれかまわず好きになるわけじゃない。

ドラマや映画で、感情を爆発させる役者を観ていいと思うことはある。

学校で泣きじゃくる子を見て、かわいいなと思うこともある。

でも、それだけで好きになったりはしない。

僕が今まで、つい手を伸ばしてしまいそうになったのは景だけだ。

自分を見失いそうになるのは、景の生み出す激情だけだ。

離れたくないと思ったのは、怒りと悲しみに飲まれそうになる景の隣だけだ。

なのに——

『いつそ殺してしまおうか』

百城さんからそう言われたとき、演技だとわかっているにも関わらず、僕が剥がされそうになった。

景以外から向けられる感情で、あれほどの心地よさを感じたのは初めてだった。

おかしい、おかしい、おかしい。

一体僕はどうなってるんだ？

百城さんに、景ほどの強い激情があるとは思えない。

ならなんで……

わからない、自分のことがまるで。

あの日からしばらくたった今でも、僕の心は整理できないまま。

こんなことは、まだ自分の醜さを自覚できていなかった中学生のころ以来だ。

本当は気づいていたくせに、それを見てみぬふりしていた自分。

『君が向き合おうとしないその感情は、君が思うよりよっぽど美しい

ものだ』

あの男によって、半ば無理やり自覚させられるまで、悶々とした日々を送っていたあのころ――

「ああくそ」

百城さんのことを考えていたら、嫌なことまで思い出してしまった。

景の過去とは違い、心の底から忘れたいと願う記憶を。

ベッドで寝ころんでいた僕は、気を紛らわせるように上半身を起す。

とにかくあんなことがあった以上、もうあまり百城さんには会わないようにしないと。

そうそう会う機会もないだろうけど。

景みたいに、離れ難くなってしまうてからでは遅い。

――コンコン

それは、僕の部屋の窓がノックされる音。

もう夜も遅いし、家族も部屋の中にいる。

普通ならば警戒してしかるべきなのだろうが、こうやって僕の部屋を訪ねる人間に心当たりがあった。

小学生のころから使っている方法で、二人だけが知る合図のようなもの。

閉じていたカーテンを開くと、やはりそこには予想していた人物が立っていた。

「どうしたの景？こんな夜中に」

「…………ごめんなさい。今話せるかしらっ…」

そう言っ僕を見る幼馴染は、見るからに弱っていた。

「うん、大丈夫。外で話そうか」



親に散歩してくると言って外に出た僕は、景と共に夜の街を歩く。まだまだ暑さは残っており、夜でも半袖で十分な気温。

隣で歩く景は、家を出た時から一言もしゃべっていない。

「そういえば、景が僕の家に来たのって久しぶりじゃない？」

「……そうだったかしら？」

「高校入ってからほとんどなかったはずだよ。中学の時みたいに僕を頼ることも減ったし。立派なお姉ちゃんになったってことなのかな？」

「なにそれ」

「成長したってこと」

「それを言うなら光だってそうだわ。昔はガキ大将みたいな性格だったのに、今じゃ立派な優等生だもの。一人称も今とは違ったじゃない」

「そうだっけ？もう忘れたよ」

僕の問いかけには反応するものの、やはり心ここにあらずといった感じ。

一体景は何に悩んでいるのだろうか？

僕に話すか話すまいか、まだ迷っているようにも見える。

「ここは僕の方から突っ込んでみるべきか。」

「——お母さんのこと、思い出してる？」  
「!？」

「どうやら当たりだったようで、景の目が大きく見開かれる。」

「……光はなんでもわかってしまうのね」

「わかるよ。昔と同じ顔してたから」

景の母親が死んだとき、その時の景の表情はよく覚えてる。

忘れようとしても、焼き付いて消えない記憶だから。

「私、どうすればいいかわからないの。身近な人が死ぬのがわかって……でも、誰にも言うなって、役作りのためだから……」

しどろもどろで要領を得ない景の言葉。

考えがまとまっていなのがよくわかる。

「ねえ光、私は一体どうしたら——」

すぎるように僕を見つめる景。

戸惑いに揺れるその瞳はあまりにも美しく、僕の理性をこれでもかと揺さぶる。

顔を出そうとするそれを、必死に押し殺す。

「ごめん景。僕は役者のことはわからないから、アドバイスとかできそうにない」

「……そうよね、ごめんなさい。急にこんなこと話して」

「でも、支えるから」

「え？」

景は一度うつむけた顔をもう一度上げる。

「こんなふうに、役者じゃない僕にだから言えることもあるだろうし。愚痴でも悩みでも自慢でも、景に話したいことがあれば聞く。その上で、景がどんな選択をしたとしても、僕は景の味方になって支える」  
少しくさすぎるかもしれない。

でも、これは僕の嘘偽りのない本心だ。

「だから、景は自分の思うように行動したらいい。何が大切なのか、何が必要なことなのか。たとえその選択が間違ってたとしても、景の味方になってくれる人がいることだけは忘れないで」

「光……」

「僕にはこんなことしか言えないけど」

「ううん、すごく嬉しい」

景の表情は完全には晴れないものの、幾分かマシになったのを見て安堵する。

少しは力になれたみたいだ。

「結局、光の優しさに私は甘えてばかり……どうしてそこまで私にしてくれるの？」

「そうだね……強いて言うなら、当然だから……かな」

「当然？」

「うん、僕が景の力になるのは当然ってこと」

そう、当然だ。

せめて景の役に立てなければ、僕は景の隣にいる資格がないんだか

ら。

けれど、そもそも隣にいることすら本当は許されない。

役者じゃない時の景にとって、景を支える役目を担えるのは僕しかない。

だからこそ、今は僕がその役についている。

でも、もし景に僕以外の相談相手ができたなら、戻るべき居場所ができたなら――

その時、景の隣に僕はいなくなる。

僕の予感でしかないけど、きっとその日は近いと思ってる。

「一か月後の舞台、絶対見に行くから」

「うん、楽しみにしてて」

好きな女の子が、僕を大切な友達だと思って隣にいてくれる。

凶々しくていい、自己欺瞞でもかまわない。

罪から目を背け、考えと行動が矛盾しているのは百も承知している。

けれど、せめて今だけは、どうかこの幸せを許してほしい。

## 景のカムパネルラ

舞台「銀河鉄道の夜」公演初日

景の初舞台作品、それも主演。

当然すぐ見に行きたかったのだが、初日のチケットは一瞬で売り切れ。

そのため、初日の観賞は諦めていた。

ところが、阿良也さんから傘のお礼だといって、景を通して初日のチケットを融通してもらえた。

特に深く考えることもなく、阿良也さんに感謝しながら、チケットに示された席に座る。

しばらく席に座っていた僕は、すぐく見やすくていい席だと思いつつ、何かがおかしいことに気づき始める。

周りから聞こえてくるのは、おそらく舞台やドラマの専門的な言葉かなにか。

座っている人物はどこかで見たことあるような顔ばかりで、監督と呼ばれている人物もいる。

僕はもう一度、阿良也さんからもらったチケットを見直す。

……これ、もしかして関係者席のチケットでは？

え、一般人の僕が座っても問題ないのかな？

周りにはオーラのすごい人ばかりで、僕の間違い感がすごい。

ちよつと調べてみよう。

舞台、関係者席……

スマホで検索をかけていると、空いていた右隣の席に誰かが座る。

関係者席（こま）に座るってことは、この人も有名な人なのだろうか？

顔を上げ確認しようとしたところ、ちよつと隣の人もこつちを見ていたようで、お互い意図せず顔を見合わせる。

「!?」

相手の顔を見て、思わず立ち上がりそうになったのをなんとか抑える。

「わあ、すごい偶然」

僕とは対照的に、相手は落ち着いた様子で笑顔を顔に貼り付ける。

「こんにちは、光君」

「……こんにちは、百城さん」

ほんとにすごい偶然だよ。

こんなことある？

たまたま関係者席のチケット渡されて、たまたま百城さんの隣になるなんて。

「あら、友達？」

「うん、役作りを手伝ってもらったこともあるの」

役作りなんて手伝ったことあったっけ？

いやそれより、百城さんに声をかけた人物だ。

その人物は、ドラマにあまり詳しくない僕でもすぐにわかった。

星アリサ――

かつて天才女優と呼ばれた超がつくほどの有名人。

現在は百城さんも所属する芸能事務所『スターズ』の社長で、景のオーディションの時にも見かけた。

あの時は遠くから見ただけだったが、そのアリサさんが今はすぐそこにいる。

「どこかの事務所に所属してるのかしら？あなたの顔に見覚えがあるわ」

「いえ、所属していませんけど……」

「そう、なら勘違いね」

その言葉を最後に、アリサさんは僕への興味をなくす。

年の功でもあるのだろうか？

話すだけで緊張してしまう。

「光君はやっぱ夜風さん目当て？」

「うん」

「私が舞台に立つことになっても、見に来てくれる？」

「……うん」

もしかして――いや、もしかしなくても百城さんって、景のこと相

当意識してるんじゃないだろうか。

以前にも景と比べるような発言をしてたし。

まだ新人のレッテルがつくにもかかわらず、若手トップ女優に意識されるなんて、景の役者としての実力は相当なんだなと感心する。

「千世子、アキラみたいなスキヤンダルはごめんよ」

「大丈夫だよ、アリサさん」

……さすがに邪推しすぎでは？

—————

舞台が始まる直前、演出家である巖裕次郎が緊急入院したというニュースが流れた。

そのことに客席がざわつくも、舞台は時間通り開始される。

混乱する客席の心を、一瞬で舞台に引き戻して見せた明神阿良也の演技。

彼以外にも、素晴らしい演技を見せる劇団天球。

まだ序盤も序盤ではあるが、演出家不在を感じさせない演劇が行われていた。

そうして、舞台は第二幕。

阿良也演じるジョバンニは銀河鉄道へと乗り込み、夜風演じるカムパネルラもついに登場する。

待ちわびた幼馴染の出番に、光は心を躍らせる。

隣に座る千世子も全く同じ気持ちだった。

舞台上でスモークが焚かれる。

徐々に、徐々に晴れていくその煙の中から、カム夜パネルラ風が現れる。夜風のことを知っていた者は、現れた夜風の姿を見て一人残らず息をのむ。

もはや人格から別人と化していることが分かるほど、その立ち振る舞いは異常なものだった。

死者であることを自覚した少年の美しさ。

笑顔の裏に、どこか孤独な寂しさを感じさせる儂げな表情。

友と一緒に帰る、それがすでに叶わないことを少年は知っている。

「あはっ、素敵」

夜風の姿を見た千世子は、心からの言葉を口にする。

「ねえ光君、夜風さんすごくきれ——」

千世子は隣に座る光の顔を見て、話そうとしたことをすべて忘れてしまう。

いつもの優しい笑みではなく、本能のままに浮かべた獰猛な笑顔。まるでたった今この世に生を受けたような歓喜の表情。

その笑顔と醸し出すオーラに、千世子は恐怖すら感じさせられる。

百城千世子は初めて園山光という少年の顔を視た。

舞台は順調に進み、特に大きな問題もなく最終幕が終わる。カーテンコールが始まると、役者たちに送られる惜しみない称賛の拍手。

それほどまでに素晴らしい舞台であったことの証明。

この時、星アリサは思い出していた。

自分の二つ左に座る少年、この少年を一体どこで見かけたのか。

思い出したきっかけは、夜風が舞台上に登場したときに見せた少年の笑顔。

かつて夜風景が受けていたスターズの最終オーディション。

そのオーディションの時、強く印象に残った人物が夜風の他にもう一人いた。

それは最終審査に残った他の三人ではなく、夜風の付き添いで来ていたただの一般人。

ほんの一瞬、アリサ以外は誰も気づかないほど刹那の出来事だった

が、その少年は信じられないオーラを放った。かつてスターズを捨てた男、王賀美陸を彷彿させるほどのオーラを。

そして今日、アリサは確信した。

この光という少年は、仮面なんてものではない。

人工的な別人格で覆い隠すように、禍々しいオーラを秘めた人格を持ち合わせている。

アリサは立ち上がり、まだ芝居の余韻に浸っている光の前に移動する。

「役者は幸せになれない。けれど……あなたのような子は、役者になった方が幸せなのかも知れないわね」

そう言っただけでアリサは名刺を取り出し、光へと手渡す。

「えつと……？」

名刺を渡された光は、いまいち状況を理解できていない。

「もし役者に興味があつたら……もしくは、普段の日常を生きづらいつと感じたら、そこに書いてある番号に連絡しなさい」

それだけ告げると、アリサはきびすを返し劇場を後にしようとする。

「アリサさんに直接スカウトされるなんて、私と一緒にだね」

「行くわよ千世子」

「はい、じゃあまたね光君。今度は全部見せてね」

千世子は手を振って光に別れを告げると、そのままアリサについて劇場を後にする。

舞台終了からそれなりに時間が経過し、ほとんどの客が帰ってしまったなか、今だ光は席から動こうとしない。

アリサから渡された名刺を、手に持ってただじつと見つめていた。



## 変わり始める二人の日常

その日は、いつもと変わらない休日。

特別な予定は何もなく、僕は机に向かって勉強に精を出していた。うちの学校は進学校でもないため、2年生の受験に対する雰囲気はまだまだ緩い。

こうして休日に勉強している生徒は、僕を含めてごくわずかだろう。

僕だって勉強がしたくてしてるわけじゃない。

今すぐ景を誘って遊びにでも行きたいというのが本音だ。

そういえば、遼馬と朝陽は今日一緒に遊ぶって言ってたっけ？

どうせまた進展はしないだろうけど。

……ダメだな、少し集中力が無くなってきた。

僕は一旦ペンを置き、椅子にもたれかかって伸びをする。

「あ」

もう一度机に目を向けると、自分で置いた一枚の名刺が目に入る。

「星アリス……」

名刺に書かれている名前を、特に意味もなくつぶやく。

前にもスターズの別の人に名刺をもらったが、僕は役者になるつもりはない。

ただ星アリスの口にした言葉は、まるで僕のすべてを見透かしたような発言だった。

景の演技を見て、つい俺を出してしまった僕を恨む。

もっと気をつけないと。

阿良也さんもそうだったけど、役者の人はただでさえ勘がいいのに。

景の演じる役がまだカムパネルラでよかった。

もしジョバンニだったらと思うとゾツとする。

今後景が、強い怒りや悲しみを持つ役を演じることになれば、僕という存在が飲み込まれてしまうかもしれない。

「……消えるのは僕か、それとも俺か」

自分の感情を制御する。

それができるのは一体いつになるのだろう。

景から離れるだけで、単純に解決できる問題なのか。

——ダメだ、また思考が重苦しい方に行ってしまった。

すぐネガティブになるこの癖もどうかしないと。

さして、気を取り直してもうひと勉強だ。

そう気分を切り替えようとした時、家のインターホンが鳴った。

僕以外にちょうど出れる家族がおらず、僕が玄関に向かう。

玄関の扉を開けると、少し背が低く、可愛い印象の女性が立っていた。

母の知り合いかとも思ったが、すぐにそれは違うとわかる。

「初めまして、スタジオ大黒天の柵です。園山光くん……で合ってるかな？夜風景ちゃんの友達のこと」

いつも通りの日常、いつも通りの日々が崩れ始める合図だった

—————

数時間前

『銀河鉄道の夜』

ひと月の公演を無事やり終えた夜風は、次の仕事に向けて意欲満々だった。

しかし、黒山から告げられたのは衝撃の一言——

「オファーは全部断ったよ。お前にもう芝居はさせらんねえ」

「…何言ってる——」

「夜風、もう気づいてんだろ。自分の中の違和感に」

夜風は必死に反論しようとするも、上手く言い返すことができない。

黒山の発言に、心当たりのようなものがあつたためだ。

『あなたがあなたでなくなる前兆よ』

夜風が思い出すのは、星アリサに言われたあの言葉。

形容しがたい不安が、夜風の心のうちに広がる。

「私は役者なの！芝居をしてないと私は——」

「自分の定義を増やせ。それが芝居を続ける条件だ」

「はっ」

自分の定義を増やす——その言葉の意味を理解できない夜風に、黒山は続けて告げる。

「学校で役者じゃねえ普通の友達を作って来い。それまで役者業は休止」

「友達なら光がいるわ！」

「その光くんとやら以外でだ。ちなみに、そいつに手伝ってもらうのも禁止な」

そんなの余裕よ！——半ばキレ気味に、勢いよく啖呵を切って出ていった夜風。

その後ろ姿を不安そうに眺めながら、スタジオ大黒天自称美人制作の柵は黒山に尋ねる。

「なんで光くんじゃダメなんですか？あのけいちゃんが頻繁に名前を出すくらいなのに」

黒山の意図は柵も理解している。

しかし、光という友人ではダメな理由がわからない。

「……夜風のやつ、公演が始まる前に言ってたんだよ。『光は私の隣にいてくれるの。いつだって、絶対に』ってな」

「良い話じゃないですか。友達通り越して、まるで恋人同士みたい」というより、夜風本人や夜風家の人間に話を聞く限り、恋人関係でないほうが柵にとってむしろ不思議だった。

「だからダメなんだよ。いつだって隣にいる……そいつは言い換えれば、帰る場所にはなり得ないってことだ。それにあれは……もはや依

存にも近い」

一切ふぎけた雰囲気はなく、深刻そうにつぶやく黒山の姿が事態の重さを物語っている。

思わず柊は息をのんだ。

「……依存ですか？」

「ああ」

柊の聞き返すような質問に短く答えると、黒山は黙って考え込む。しばらく沈黙が続いたが、考えがまとまった黒山は柊のほうを向いた。

「柊、ちょっと頼まれてくれるか？」

「なんですか？」

「光くんとやらに会いに行ってくれ」

—————

#### 次の日

「友達ってどうやって作るんだっけ」

学校の屋上で黄昏れるようにつぶやく夜風は、絶賛友達作りに難航していた。

まったく余裕などではなかった。

「私……普通」が分からないんだ。役者なのに」

役者の人たちと友達になれたのは、同じ目的を持っていた自分を理解してくれていたから。

普通の友達作りを通して、今さらながらそのことに夜風は気づく。

「光とはどうやって友達になったんだっただかしら？」

夜風にとって光は、いつの間にか友達になっていたという印象が強い。

そのため、いざぎっかけを思い出そうとしても、なかなか思い出すことができない。

「たしか、光とは小学生のときにケンカして、気づいたら仲良くなつて

たのよね」

もはやケンカの理由も覚えていないが、かなり大ゲンカだったことを夜風は記憶している。

「私は本気で怒っていたのに、怒った私を見て光が笑って、それでさらに怒って」

あんな大ゲンカをしたのは、それが最初で最後。

むしろ、それ以来ケンカすらしたことがないかもしれない。

幼馴染との記憶を思い出していくうちに、夜風はある一つの結論にたどり着く。

「もしかして……」

「ケンカすれば友達ができるのかしら？」

その結論は完全に斜め後ろ。

普通とは何か？夜風には分からない。

思考が迷子になってしまった夜風。

そんな夜風に一人の少年が声をかける。

「よ……夜風さん!!」

声をかけてきた少年に、夜風は見覚えがなかった。

「…はい、はじめまして」

「いや、同じクラスの吉岡です」

夜風に顔すら覚えられていなかったクラスメイトの少年。

この少年こそが、夜風にきっかけを与えることになる。

## 腹の内

吉岡という少年と出会い、夜風は映像研究部に入部することとなった。

当面の目的は、学祭に向けて映画を撮ること。

そうすることで、お芝居も友達もできて一石二鳥。

そんなことを考えていた夜風だが、ある問題に直面する。

「単純にスタッフ不足なのよ、吉岡君」

そう、人不足だ。

映画を撮るためには、まるで人数が足りていない。

二人いる他の映像研究部部員にも手伝ってもらおうとしたが、すでに一度断られていた。

そのため、思うように撮影は進んでいない。

「夜風さんは誰か手伝ってくれそうな知り合いとかいない？ 園山くんとか、けっこう仲良さげだけど」

「ごめんなさい、光の手助けは禁止されてて……あつ！」

黒山の言葉があったため、はなから幼馴染の協力は諦めていた夜風だが、閃いたようにあることを思いつく。

「そうだわ、黒山さんに禁止されたのは友達作りの協力。けど映画作りの協力なら何の問題もないはずよー」

そう言いながら、夜風は慌ててスマホを取り出し、光に電話をかける。

しばらくのコール音の後、電話がつながった。

『どうしたの景？』

「私、学校祭に向けて映画を作ることになったの」

『へえ、そうなんだ』

「でも人が足りてないの。だから光にも手伝って欲しくて」

うん、いいよ——そう言っただけのもののように、笑いながら（電話越しのため顔は見えないが）光は受け入れてくれる。

それが夜風の期待していた返事だった。

しかし、

『手伝いたいのはやまやまなんだけど、クラスの出し物のほう手伝うことになってて。だからそっちは手伝えそうにないんだ。ごめん』  
「……あ、そうなの」

夜風からすると予想外の返事に、ほんの少しの間だが受け入れることができず、返す言葉に間が空いてしまう。

「うん、わかったわ。無理言っでごめんなさい」

自分でも自覚できるほど気落ちしながら、夜風は通話を終了する。考えてみれば当然のことだった。

夜風にとってこういう時、頼れるのは光だけ。

しかしこの学校で光に頼る人間はたくさんいるし、光が頼る人間もたくさんいる。

普通に友達がたくさんいる光にとって、自分はそのうちの一人ではないのかもしれない。

そんな当たり前のことに今さら気づき、夜風はさらに気落ちする。  
「だめだったの？」

「うん……」

「じゃ、じゃあやっぱりあの二人に頼んでみよう！」

「二人って、映画部の？」

「一回断られてるけど、俺に任せて」

落ち込む夜風を励ますように吉岡は言う。

「俺たちが本気で頼めば、少しは話を聞いてくれるかもしれない」

夜風と吉岡は期待をもって、目的の人物がいるであろう映研の部室へと向かった。

「フツーに無理、ありえない」

あえなく一蹴される。

ソファアで寝ころぶ映研の幽霊部員『朝陽ひな』は、まるで興味がないといった様子で、夜風と吉岡のことを見もせず雑誌を眺め続け

る。

取り付く島もなかった。

「お願い朝陽さん。私達、本当に困ってるの。少しだけでいいので手伝ってくれないかしら」

それでも、新しくできた友達と映画を作りたい一心で必死に食い下がる夜風。

そんな夜風を、朝陽は冷たい目で見つめる。

「…はあ」

ソファから立ち上がった朝陽は、その冷たい目のまま夜風の前に立つ。

「夜風さあ、吉岡の名前覚えてた？私の名前は？」

その言葉を聞いたとき、夜風の表情が固まる。

思い当たる記憶が、夜風にはいくらでもあった。

「——ほらね。そういうのフツーに分かるから。うちらのこと、全然興味なかったんでしょ。そんな奴が突然学祭とか部活とか：フツーに虫が良過ぎるよね？」

「…：これからは朝陽さんのことも、皆のことも知りたいと思ってる。

ごめんなさい」

「…はあ」

夜風からの謝罪の言葉を聞いても、朝陽の口から漏れたのはため息。

「スターズの天使とかさあ、あんたとか星アキラとか。いいよね芸能人って。皆、美男美女で生まれつきフツーに人生イージーモード。園山だつてそう。芸能人ばりに顔が良くて頭も良くて、皆に愛想振る舞ってるけど、実際には私たちになんて何の興味もない。あんた達、皆うちらのこと見下してんでしょ。そういうの分かるから」

言いたいことをすべて言い切り、朝陽は夜風の隣を通って教室を出ようとする。

そんな朝陽の手を、夜風はがっしりと掴んで歩みを止めさせた。

「…何よ」

「私…お芝居に出会うまでずっと、家族のことしか考えてなかったん



だと思おう——」

始めは、小さくて弱々しい声だった。

「だから朝陽さんの言う通り、自分でも虫が良いって思う。ごめんなさい」

その声は少しずつ大きくなり、強さも宿っていく。

最後の言葉は、目を見据え、叫ぶように告げられた。

「でもっ、私の友達のこと、光のこと勝手に決めつけて悪く言うのは違うでしょ！」

夜風が感情的になったのを初めて見た朝陽と吉岡は、わずかばかり動揺する。

しばらく沈黙が続いたが、勢い余った夜風は走って部室を出ていってしまふ。

吉岡もそれを追いかける。

部室に一人残された朝陽は、小さな声でつぶやいた。

「…なんだよ。あいつフツーにキレんじゃん」

朝陽が教室に戻ると、教室にはほとんど人がおらず、少年がたった一人だけ。

少年はカバンに教科書などを片付けていた。

その少年を見て、朝陽はつい顔をしかめてしまふ。

少年の名は園山光。

つい先ほど、悪口ともとれる悪態をついてしまった相手だった。

かといって当然その悪口を聞かれたわけでもないの、普通の態度で接すればいいのだが、朝陽にはどこか後ろめたさがあった。

そのため、話しかけることなく教室を出ていこうとする。

「あれ、どうしたの朝陽？教室に用があったんじゃないの？」

しかし、教室を回れ右しようとしていたところを、タイミング悪く光に見つかり声をかけられる。

さすがに声までかけられて無視するのはどうかと考え、そのまま教室に入る。

「別に……園山こそ何してんの？」

「帰るところだよ。うちのクラスは大きな出し物も特にないし。帰宅部には学校祭の準備期間って暇だから」

「ふうん……」

朝陽にとつて、園山光とは微妙な関係である。

ただのクラスメイト——で終われば簡単だったが、自分の思い人である花井遼馬となぜか仲が良い。

遼馬と話しているときに、ちよくちよく光の話が出てくるほどに。

超がつくほど真面目な光、不良のレッテルが貼られる遼馬。

なぜそんな二人の仲が良いのか、その理由を朝陽は知らない。

「遼馬となにかあった？」

しばらく黙っていると、光による突然の問いかけが飛んでくる。

それも思い人の名を口にして。

「は？何もないけど」

「となると……景？」

「……なんでそこで夜風の名前が出てくんの？」

「だって最近の朝陽、景のこと見てずっとイライラしてるから」

「っ……」

朝陽は光のこういう所が苦手だった。

光という人間は、とにかく人の悪意のようなものに敏感で、まるで心を見透かされているような気分になる。

先ほどの悪口も、実は気づかれているんじゃないかと錯覚してしまう。

「昔の景と今の景……朝陽にはどっちも同じに見える？」

「……知らないし、そんなの。園山みたいに夜風のことばっか気にしてるわけじゃないから。そうやって私にずけずけ言うのも、夜風以外の人間にどう思われようが興味ないからでしょ」

とにかく教室から、光から離れたかった朝陽は、負け惜しみのような言葉を吐いて教室を出ていく。

そんな朝陽の姿を見て、光はうつすらと笑っていた。

「相変わらず、するどいなあ」

小さくつぶやいた光は、かばんを持って教室を後にする。

そのまま、どこにもよることなく帰宅した。

## 幼馴染の嘘

夜風と朝陽——つい先日まで険悪だった二人。

そんな二人が、吉岡も含め、中庭にて映画撮影を行っていた。

二人の仲が改善したきっかけは、夜風が本気の思いを朝陽に伝えたことだった。

「夜風さん、芝居ちゃんをやつてよ。さつきからニヤニヤしてるけど」「えっ、ニヤニヤ!?なんでかしら、ごめん!」

友達と共に撮影できること、ついに明日の学際で映画が上映できること。

それらのことが、夜風には嬉しくて仕方なかった。

数日前までとはまるで違う周囲の環境に、夜風は笑ってしまうのを抑えることができない。

あとは、ここに光がいれば文句なしだったのに。

そんな考えが夜風の頭に浮かび、楽しい気分がわずかながら落ち込む。

「というか、これフツーに間に合うの?本番明日なのに」

「うん。この調子なら今夜徹夜で編集したら間に合いそうだよ」

朝陽の不満げな疑問に、吉岡が笑って答えた。

「ふーん……そういえば、なんで園山には声かけないわけ?夜風が頼めばあいつ喜んで手伝うでしょ」

「あ、光はクラスの手伝いがあるから——」

「なにそれ?うちのクラス、手伝うような出し物なにもないじゃん」

「……え?」

唐突に頭を殴られる。

そんな衝撃を夜風は受けた。

「それに昨日、園山自分で言ってたし。学祭の準備期間は暇だって」  
「……」

「なんで?嘘?どうして?」

もし朝陽の言うことが本当なら、光はわざわざ嘘をついてまで、自

分の頼みを断ったということになる。

ありえない、そんなことをあの優しい光がするはずない。

焦りとも、怒りともつかない感情が夜風の中で渦巻く。

まるで、当然のようになると思っていた地面が崩れていくような感覚だった。

自分のいる場所が、ひどくあやふやになる。

「いや、夜風も同じクラスなのになんで知らな……夜風？」

すでに朝陽の声は夜風に届いていない。

ほとんど無意識に、自分の隣に目を向ける夜風。

そこに、優しい笑顔を向けてくれる幼馴染はいない。

そのことを、夜風はひどく恐ろしく思えた。

—————

三人が中庭で行っている映画撮影を、屋上から見つめる二人の少年。

一人は夜風の幼馴染である園山光。

もう一人は、朝陽の思い人である花井遼馬。

優等生と不良、まるで対照的な二人が並んでフェンスにもたれかかっている。

「いいの？お前はあそこに交ざらなくて」

「いいんだよ。あそこに交ざる資格なんて、僕にはないんだから」

遼馬の質問に、どこか微笑ましげな表情で三人を見つめながら光は答える。

だがその答えは、ひどく寂しいものだった。

「なんだよ資格って？俺と違ってお前みたいな優等生なら、あいつらだって大歓迎だろ」

「……たしか遼馬、よく言ってるよね」

世の中には3種類の人間がいる。

がんばってる奴、がんばりたい奴、がんばれない奴。

それが遼馬のよく口にして言っている言葉だった。

「でも、きつと世の中にはもう1種類の人間がいると僕は思ってる」  
「へえ、どんな奴だ？」

「……がんばっちゃいけない奴」

興味深そうに聞く遼馬に、光は少し間をおいて告げる。

「そいつががんばってしまふことで、がんばってる奴、がんばりたい奴の足を引っ張ってしまう。正しいことが何かはわかっている。でも、その正しいことが認められない。そんな最低で最悪な奴だよ」

自分には手の届かない無縁のもの。

焦がれても、抗っても、たどり着けない居場所。

そう勝手に決めつけ、諦めてしまっている。

三人を見つめる光を見て、遼馬は自然とそう感じた。

—————

何か理由があるに違いない。

きつとそうだと信じている。

でも、もしなんの理由もなかったら？

ただ単に愛想を尽かされただけなら？

光は自分のことが嫌いになった？

そんな悪い想像ばかりが、夜風の思考を支配していく。

夜風は知らなかった。

光という存在がないことで、こんなにも不安定な気持ちになってしまったことを。

だからだろうか、撮影が終わった日の夜。

夜風はほぼ無意識に光の家を訪れる。

何を話すのかも決めていないが、ただ話さなければならぬと感じていた。

いつも通り、玄関から入るのではなく、光の部屋の窓をノックする夜風。

すぐにカーテンが開かれ、光の姿が目に入る。

どうしたの景——そう言って、これまたいつも通りの言葉を、いつも通りの笑顔で光は夜風に投げかける。

その笑顔が、今日の夜風には怖かった。

自分に嘘をついていることは確かなのに、まるで普段と変わらないその表情が。

何も変わらないと思えるその優しさが。

「……」

言いたいこと、聞きたいことはいくらでもある。

なのに、その言葉が上手く口から出ていかない。

「きよ、今日はいい天気ね！」

「……月が隠れるくらいには曇ってるけど。まあでも、明日はちゃんと晴れるらしいよ」

「明日といえば！光が手伝ってくれなかった映画も上映するの！」

とても自然に会話を誘導できた。

本気でそう思っている夜風に、光は思わず苦笑する。

「入りなよ。話したいことあるんでしょ？」

促されるままに、夜風は靴を脱いで窓から光の部屋へと入る。

前は何度も訪れていたが、最近はめったに訪れていなかった光の部屋。

以前とほとんど変わることなく、きれいに整えられた簡素な部屋で、夜風はどこか懐かしさを覚える。

「お茶淹れてくるから、ベッドにでも座ってて」

「そんな悪いわ。私が勝手に来たのに」

「気にしなくていいよ。ちょうど僕も、景に話したいことがあったから」

そう言って、光は部屋を出ていく。

残された夜風はただボーっと座っていた。

その時、ベッドの上に置かれていた光のスマホが夜風の目に映る。

覗き見るつもりはなかったのだが、ちょうどメッセーリアアプリの通知が入り、真っ暗だった画面が表示される。

それだけならば、特に夜風も気にすることはなかっただろう。

だが、メッセージの送り主の名を見た時、思わずスマホを拾い上げてしまう。

百城千世子——名前の欄には、確かにそう書かれていた。

『また前の公園で会えない？』

当然スマホにはロックがかかっているため、これ以前に送られたメッセージは見る事ができない。

しかしそのメッセージだけで、ある程度のことは推察できる。

まだ上手く状況を理解できていないためか、夜風の心は穏やかだった。

だからこそ、冷静に考えることができた。

夜風の知る限り、千世子と光が会ったのは夜風の家が最初。

二人きりにしたのは、夜風が風呂に入っていたときのみ。

親密になるほどの時間があつたとは思えない。

それでも、二人は連絡先を交換し、自分の知らないところで、以前にも公園で会っていたということになる。

夜風が思い出すのは、楽しそうに光のことを話していた千世子の姿。

あの時はわからなかった気持ちの正体が、今の夜風にはしっかりと理解できた。

不愉快、からの怒り。

だがその抱いた感情を、どう処理すればいいのか、何にぶつけければいいのか。

それが夜風にはわからなかった。

お茶を淹れ、光が部屋に戻ったとき、そこには夜風の姿はなかった。

「……………景？」

脱いだ靴も無くなっており、帰ってしまったことは想像できる。



しかし、話があると言ったにもかかわらず、急に帰った理由がわからない。

光は一通り部屋を見渡すと、先ほどとは明らかに位置が異なっているものを見つける。

それはベッドの上に放置しておいた自分のスマホ。

拾い上げ、ロックを解除して中を確認する。

勝手にいじられた形跡もないし、メッセージを送られたというわけでもない。

もちろん光も、景がそんなことをするのは微塵も思っていない。

ただ新しい通知が、同じ人物から数件きていただけ。

「——はは」

その笑いは、つい溢れ出てしまったもの。

送られてきた通知を見て、光は察しよくすべてを理解してしまう。

「やっぱり……ダメだなあ」

後悔するような表情を浮かべる光だが、どこか耐えきれない喜びのようなものも、たしかに含まれていた。

すれ違い、間違っただまま二人は、杉北祭当日を迎える。

想いは交わらない

「誰と仲良くしてしようと私には関係ないし、別にいいけど。誰と会っていようと私には関係ないし、別にいいけど」

「夜風、なにイライラしてんの？」

杉北祭当日、映画上映に向けて夜風、吉岡、朝陽の三人は部室で最後の準備を行っていた。

そんな中、わかりやすく不機嫌な夜風に、どうせ園山絡みだろうと朝陽は見当をつける。

「誰も光にイライラなんてしてないわー！」

「やつぱり」

聞いてもいないのに、ご丁寧に名前まで言ってしまう夜風。

昨日、夜風は光の家から思わず逃げるように帰ってしまった。

理由は夜風自身もよくわかっていない。

ただ、今は光の話を聞きたくない——そんな感情が夜風を支配していた。

その日はなるべく考えないようにして就寝し、目を覚ますと次は言いたいような怒りがわいてきた。

そうして今に至る。

「フツーにイライラしてんじゃん」

不満オーラをまき散らす夜風に、朝陽は半ば呆れ気味に対応する。

一方で、吉岡は窓の外を見ており、会話に一切交ざろうとしない。

それどころか全く動こうとせず、準備する手も止まっていた。

「ちよつと吉岡！あんたなにさぼってるわけ!？」

「……なんだろう、あれ」

「はー」

朝陽が怒声を飛ばすも、窓の外から目を話さない吉岡。

気になって夜風と朝陽も窓の外を見る。

「……なにこれ」

そこには、おびただしい数の人がいた。

校門入り口前で、まるで杉北祭が始まるのを待機するような人々。そのすべてが本当に杉北祭目的なら、明らかに一高校で収容できるキャパシティを超えている。

「もしかして、これ全部夜風目当てなんじゃ……」

朝陽の言葉に夜風と吉岡は、肯定することも否定することもできない。

ただ三人とも、嫌な予感がすることだけは確かだった。

「映研の上映会は中止。そうすれば夜風目的のファンも引き返すでしょう」

その嫌な予感は現実のものとなる。

無慈悲な言葉が、教師の口から発せられた。

—————

小さいころ、まだ景の母親が生きていたころ、景と一緒に初めて『ローマの休日』という映画を見た。

景が特にお気に入り映画だ。

ごっこ遊びに付き合ったこともある。

もうずいぶん昔のことで、映画の内容もうろ覚えだが、ある思いを強く抱いたことだけはしっかりと覚えていて。

——お互い好きなのに、なんで離れ離れにならないといけないんだ。

そんな思いをかかえたまま、しばらくの間ずっとモヤモヤしていた。

大人に答えを求めたこともあるが、納得できる答えは得られなかった。

あれから時が経ち、ほんの少しだけ大人になった今なら、その答えが少しだけわかった気がする。

大人たちの言っていたことも、なんとなく理解できる。

彼らは離れたかったんじゃない、離れなければいけないかったんだ。

それに初めて気づいたとき、なぜか泣きそうになった。

太陽は完全に沈み、杉北際も後夜祭に突入している。

盛大なキャンプファイヤー……とはいかないものの、小さな火を囲み、フォークダンスを踊る仲のよさげな男女の姿。

そんな甘い光景を屋上から眺めながら、僕は遼馬と二人である準備を進めていた。

「よし、準備できたぞ。いつでもいけるぜ」

「じゃあ、始めようか」

遼馬から準備完了の言葉を受け、僕は用意したプロジェクターのレンズカバーを外す。

映写する場所は校舎の壁、内容はもちろん景たちの撮影した映画。

唐突に映画が流れ出したことにより、中庭に集まっていた生徒たちはみな困惑する。

映し出されたのは、景のきれいな横顔。

そして『隣の席の君』というタイトルテロップ。

生徒たちのざわめきがどんどん小さくなり、映画に釘付けになっていく。

「ごめん遼馬。こんなこと手伝わせちゃって」

「お前に言われなくても、俺一人でどうせ勝手にやってた。それより、お前のほうが良かったのかよ？ 学校一の優等生様がこんなこととして、推薦とかぱあになるんじゃないやねえの？」

「いいんだ。もともと一般で受験するつもりだから。僕の志望大学、推薦のほうが高難易度高いんだよね」

停学は覚悟しないとダメかな——遼馬と話しながらそう考えていると、バンと大きな音をたてて屋上の扉が開かれる。

そこには、景が立っていた。

息を切らし、汗をかいており、大慌てで来たことがうかがえる。

「え……花井君？それに光も、どうして」

僕たちのほうへ近づくと景は、いまいち状況を飲み込めておらず、わかりやすく疑問符を頭に浮かべている。

「景こそどうしたの？そんなに慌てて」

「だって！部室にいたら、私達の撮影した映画が流れてきて……」

「ああ、これは遼馬が——」

やってくれた——そう言おうとした時、遼馬にがっしりと肩をつかまれる。

「二人でやったんだ。光、お前も共犯だからな」

「……ずるいなあ」

果たして、それは単純な責任分散による自己保身か、それとも不器用すぎる優しさか。

「つかやべ、カギかけ忘れた。しゃあねえ締めてくるか。まあ、しばらくは教師の足止めしといてやるよ」

そう言って、僕と景に気を遣ったのか、遼馬はこの場から離れようとする。

そんな遼馬に、夜風が声をかける。

「よくわからないけど……花井君ありがとう。私たちのためにがんばってくれて」

夜風の言葉に、遼馬は一瞬だけ立ち止まるも、軽く手を上げてそのまま去っていく。

こうして、僕と景は二人つきりになる。

「……」

「……」

景は何か言いたそうにしているが、切り出すことができないといった様子だ。

「ここは僕から切り出すか。」

「ごめん景、嘘までついて手伝いを断って」

「え？」

「実は、ちよつと前に柗さんがうちに来たんだ」

「柗って、雪ちゃん？」

「うん」

景の所属するスタジオのスタッフである柗さん。

彼女がうちを訪ねたのは、僕に釘をさすためだ。

景の帰る場所を作るために、できる限り手を貸さないで欲しい。

そう伝えられたとき、僕はためらうことなく了承した。

それは、景から離れるという僕の目的にも合致していたから。

僕は柗さんから伝えられたことを、そのまま景に伝える。

すると、景は突然力が抜けたように膝を抱えて座り込む。

「はあ~~~~」

大きく一度息を吐くと、またゆっくりと立ち上がる。

「私、光に嫌われちゃったのかと思ったわ」

「ありえないよ。僕が景を嫌うなんて、絶対に」

逆はありえても。

「やっぱりそうよね！光が私を嫌うなんてありえないもの」

すっかり元気になり、いつもの調子を取り戻す景。

あまりにも単純な景に、ついつい苦笑する。

『え…!?ちよ…吉岡隠し撮りキモイ!』

二人で笑いあっていると、映画に流れる朝陽の音が響き渡る。

僕と景はフェンスに腕をかけ、景の映る映画を眺める。

場面は、景と朝陽たちが仲良く昼食を食べているシーン。

景も朝陽もいい笑顔で、とても楽しそうにしている。

一週間前までの景では考えられない光景だ。

「あそこにいる私は、お芝居と出会わなかった私なの。役者じゃない

普通の高校生。そういうもう一つの普通が、私にもあるんだなって気づいたの」

そう話す景の表情は、とても穏やかだった。

「きつと私達は何にだってなれるんだわ。だって、私がお芝居と出会ったのも偶然だったから。でも——」

そこで言葉を切り、景は僕の方を向く。

「役者でも、普通の高校生でも、たとえどんな私であっても、隣には光がいて欲しい。そう思ったの」

優しい笑顔を浮かべ、真つすぐ僕の目を見て景は告げる。

ああ、もう……ほんとに。

きつとなんの含みもなく、景は純粹にそう言ってるだけ。

だからこそ、なおさらたちが悪い。

やめてくれ、そんなこと言われたら、もう我慢しなくていいんじゃないか——なんて思考が生まれてしまう。

「景」

「なに？」

「好きだよ」

「——え？」

後夜祭のフォークダンスで告白したら、二人は永遠に結ばれる。

そんなどこにでもあるような、面白おかしく伝えられる噂話がこの学校にもある。

もし僕がまともな人間なら、ありえないとわかっていながら飛びついていたらかもしれない。

告白をOKされて歓喜し、振られてショックを受ける。

遼馬から不器用に励まされ、クラスメイトにいじられる。

そんな未来があったのかもしれない。

でも、その噂話は甘いものでもなんでもなく、もはや呪いだ。

僕にとっても、告白された相手にとっても。

「……なんてね」

「え？」

「冗談だよ。プロの役者を騙せるなんて、僕の演技力も捨てたもの

じゃないのかも」

僕は努めて、本気じゃなかったというていを装う。

「なっ……ひどい！本気にしたじゃない！」

「ごめんごめん。でも景だって似たようなこと言ったくせに」

「……うんなんのこと？」

やっぱり無自覚か。

わかつてはいたけど。

『コラ映研!!開けなさい!!自分たちが何したか分かってんだろぅな!!』

ドンドンと、扉をたたく音が屋上に鳴り響く。

どうやら遼馬の足止めもここまでらしい。

「どうしよう光。私達怒られてしまうわ」

怯えるように顔をすぼめる景。

怒られるということ、今まで完全に忘れていたみたいだ。

「まあ、どうしようもないんじゃない。素直に怒られよう、一緒に」

「……うんー」

僕と景は覚悟を決め、扉の方へと向かっていく。

今回、景と離れてみて気づいたことがある。

僕が離れることで、景から生まれた焦り、不安、苛立ち。

しかもそのすべての感情が、余すことなく僕に向けられている。

その事実が、俺はどうしようもなく嬉しかった。

だからわかったんだ。

僕と景が離れるには、ただ距離をとるだけじゃだめだって。

今の景との関係を、仲のいい幼馴染という立場を、修復不可能になるまで徹底的に壊してしまう。

それくらいしないと僕は結局のところ、景から離れることができないって。

長年続けてきた初恋を、これ以上ないという最悪な形で終わらせ



る。

歪んだ僕には、ぴったりの結末だ。

ごめんね、景。

でも、君を傷つけるのはそれで最後にするから。

長年抱え続けた俺の罪も、きつと清算する。

役者じゃない友達を僕以外に作り、景は自分の定義を増やした。  
もう——僕という存在は必要ない。

## 羅刹女編

### 宣戦布告（1人目）

目の前には、羅刹女の衣装舞台に身を包む幼馴染の姿。

本職の人間に施されたメイクにより、本人の面影を残しながらも、身にまとう雰囲気と相まって、美しくも恐ろしい羅刹女が体現されていた。

もう間もなく舞台が開演するという中、僕はその幼馴染と正面から向き合っている。

周りでは舞台の関係者が慌ただしく準備しており、なんの関係もない一般人である僕だけが異質な存在だった。

幼馴染の少女も、僕がここにいることを不思議そうに見つめている。

そんな彼女に、僕はいつも通りの笑顔で語り掛ける。

「」

僕の発したある言葉により、わずかばかりの逡巡の後、幼馴染の少女は激しい怒りを露わにする。

積もりに積もったものが弾け、爆発したようなとめどない怒り。

勢いよく振り上げられた手が、僕の左頬に当たる——直前で止まる。

止まったのは、今まで積み上げてきた信頼故のものか。

「なんで止めたの？もしかして、まだ僕のことを信じたいか思っている？」

その言葉で、幼馴染の怒りはさらに増す。

呼吸が荒くなり、殺してやるとでも言うような鋭い視線が僕に突き刺さる。

僕と俺、もうその境目がわからない。  
怒りと悲しみ、これ以上ない負の感情。

そんな誰もが忌避する激情を向けられたにもかかわらず、僕の中に  
あるのは——歓喜のみだった。

—————

数か月前

場所は夜の公園。

『~~~~~♪』

耳の片側につないだイヤホンから流れる音楽。

音楽の良し悪しはわからないけど、個人的にはいい曲だと思う。

でも、僕の目当ては音楽ではなく、その音楽に合わせてはしゃぐ少  
女のMV。

スマホに映し出されるそれは、女優・夜風景の知名度が、世界的に  
広がるきっかけとなったMVだ。

思うがまま、感じるがまま、踊っているようにも見える自由な動き。  
見てるこつちまで動き出したくなってくる。

「素敵だよね」

イヤホンのもう片側を付けた少女が、僕にそう告げる。

「見せたかったものってこれ？これなら僕も何度か見たことあるよ、  
百城さん」

「正確にはこれも、かな」

動画が終わり曲が止まると、僕は付けていたイヤホンを外し、持ち  
主である百城さんに手渡す。

「というか、わざわざ百城さんまで聞く意味あった？」

「私も聞きたかったんだよ」

「その割には曲に集中してなかったけど。何度も僕のほうをチラチラ  
見てたし」

「あ、ばれてたんだ」

一切悪びれることなく、百城さんは笑って言ったのける。

「光くんの顔が見たかったの。夜風さんを見てる時の、光くんの表情を」

「……」

反応しづらいんだけど。

「……百城さんは相変わらずだよな」

「それを言うなら、光くんだって相変わらずじゃん。ずっと私と会うのを断ってたのに、『夜風さんに関して見せたいものがある』って言うたら簡単に会ってくれたし」

まるで人をちよろいやつみたいに。

否定できないのが悔しい。

「ほんと、わざとやってるんじゃないかって思うくらい」

目をうつすらと細める百城さんは、笑っているのに、まるで睨んでいるようだった。

僕は慌てて話を元に戻す。

「それで、見せたいものって？動画以外にもあるの？」

僕の言葉を聞き、百城さんはスマホで時間を確認すると、そろそろかなとつぶやいてスマホをしまう。

「じゃあちよつとこっちききて」

「え？」

百城さんが突然、僕の服を引っ張りながら歩き出す。

不思議に思ったが僕は抵抗せず、誘導されるがままについていく。

「しぼらくここに隠れててね」

「え？」

連れていかれたのは、公園にある遊具のうちのひとつ。

その遊具はトンネル型のもので、かくれんぼには最適な遊具。

とはいえ当然、高校生の僕が隠れるには狭く感じる大きさなのだが、その中に無理やり押し込まれる。

「百城さん？」

「静かに、もう見えてるから」

「一体何が——」

「こんばんは千世子ちゃん！」

僕の言葉が、より大きな声にかき消される。

その声は、百城さんのものではなかった。

ずいぶん聞きなれた声であり、もはや声だけでその人物の顔まで鮮明に浮かぶ。

景!?なんでここに!?

「っ、け——!」

「誰かいるのかしら?」

あまりの衝撃に声を漏らしてしまうと、景が敏感にそれを聞き取る。

まずいまずいまずい!……いや、むしろバレてしまった方がいいのか?!

よく考えたら、それほどまでバレてまずい理由はない気がする。

おそらく景も、百城さんに呼び出されてここに来たのだろう。

ならここはすぐに姿を現して、僕も同じだと説明すれば——

「きつと猫だよ」

しまった、百城さんに先手を打たれた。

こうなってしまうと姿を現しにくい。

百城さんは一体何を考えているんだ。

「猫?」

「ほら、鳴き声も聞こえる」

「……?聞こえないわ」

「聞こえるよ。目を閉じて、耳を澄ましてみて」

僕は遊具の間隙から、慎重に百城さんと景のいる場所を覗く。

景が目を閉じるのを確認すると、百城さんは僕の方をじっと見つめる。

やれと?猫の真似を。

……ぐっ、こうなったら仕方ない。

僕は意を決して口を開く。

「にゃ、にゃくん」

なにこれ恥ずかしい。

ダメだ、やってみたものの、これじゃ絶対にバレる。

僕と同じように、景だって僕の声を長年聴き続けてきたのに。

「ほんとだ。猫だわ」

……なんだろう、この複雑な気持ち。

すごく納得がいかない。

二人はブランコに腰を掛けると、改めて会話を始める。

しばらくの間は、景がひたすら一方的に話しているだけだった。

息継ぎする間もなく、百城さんとの思い出から、自分の近況について話し続ける。

景は久しぶりに百城さんと会ったためか、かなり楽しそうだ。

でも百城さん、景の口から僕の名前が出るたびに、笑顔を深めるのは止めて欲しい。

感情が読めないから、何を考えているのかわからなくて怖い。

「――友達とよく行くから、私カラオケ上達した気がするわ!」

「……」

「……う？千世子ちゃん?」

景の言葉に、百城さんは何の反応も示さない。

さすがの景も、それを不審に思う。

「もしかして、まだ聞いていない?」

「え」

「ダブルキャスト。私と夜風さんで同じ役を演じて、皆に見比べてもらう舞台。夜風さんこれはね、あなたじゃない。私が主人公だって証明するための舞台になる」

まるでそれは宣戦布告。

いや、実際にそうなんだろう。

ブランコから立ち上がり、振り返って景を見つめる百城さんは、とても好戦的な笑みだった。

景の上を歩き続けたい。

自分が主人公でありたい、あり続けなければいけない。

そんな強い感情が、ひしひしと伝わってくる。

こんなにも思いがわかりやすい百城さんの姿は初めて見る。

「ねえ、夜風さんは興味ない？私とあなた、どっちの芝居が上か」

「うん、私も知りたい」

百城さんの思いに、景も迷うことなく賛同する。

そこには芝居に対する、俳優のプライドとも言える何かがあった。

「演目は『羅刹女』。新しい百城千世子を見せてあげる。覚悟してね、夜風さん」

不敵に笑う百城さん。

怖い、でもそれ以上に楽しみが上回るといった笑顔を見せる景。

二人の役者が自分をぶつけ合う。

そんな光景を、僕はただ圧倒されながら見ていた。

景と百城さん、二人の会話が終了したのはそれから少しして。

景が別れの言葉を告げ、帰路につこうとしている。

やれやれ、やっとこの狭い所から抜け出せる。

そう少し気を抜いた、その時だった。

「あ、そうだ。最後にこれだけ言っておくね」

「何？」

「私、光くんのこと好きになっちゃった」

いつもと変わらない表情で、いつもと変わらない声の抑揚で、どんなでもない爆弾を、最後の最後に百城さんは落とした。

## 宣戦布告く2人目く

「もう出てきて大丈夫だよ」

百城さんの声と共に、僕は遊具から姿を現す。

そこにいたのは百城さんだけで、景の姿はどこにもなかった。

——光くんのこと好きになっちゃった

あの爆弾発言の直後、僕は目を閉じて耳を塞いだため、景がどんな反応を示したのかわからない。

どんな反応であれ、景の生み出す感情が、僕をぐちゃぐちゃにかき乱すのは間違いない。

だから景の姿を見たくなかったし、景の声を聞きたくなかった。

「なんで、あんなこと言ったの?」

僕は言葉に怒気を含ませて百城さんに尋ねる。

実際、少し怒っている。

「僕のこと好きになったなんて、くだらない嘘ついて」

「ごめんね。ああ言えば夜風さんが、本気で私のことを敵として見てくれると思ったの」

僕の嘘という言葉を否定することなく、百城さんは謝罪の言葉を口にする。

「……景への宣戦布告を、僕に見せたかったの?」  
「うん」

短く返事をした百城さんは、公園のベンチへと腰を掛ける。

隣に座るよう僕に促してきたので、人一人分のスペースを空けて僕も腰を下ろす。

「夜風さんの動画を初めて見た時——私ね、悔しかったよ」

ポツリとそうつぶやく百城さんの表情は、本気で悔しそうに、そして弱々しかった。

貼りつけた仮面ではなく、年相応の少女である百城千世子の顔。



——ああ、そんな顔もするんだ。

僕は思わず魅入ってしまう。

「私は夜風さんとは違う、それはよく分かってる。でも、違うからこそ私は、生涯彼女の上を歩き続けたい。そのためだったら悪魔とだって組むし、友達も利用する」

……なるほど、景にあんなことを言ったのはそのためか。

僕はつい先ほどまで湧いていたはずの怒りが、百城さんの話を聞いて、すでに消えてしまっていることに気づく。

「軽蔑した?」

「してないよ」

するわけがない。

だって、百城さんの行動は景を傷つける目的で行われたものじゃない。

まぶしすぎるくらい立派な志のもとに行われた行動なんだ。

ただ本能的な欲望のままに、景を傷つけようとする僕が軽蔑していいはずがないし、そもそも怒りを抱く資格すらあるはずがない。

「やっぱり、光くんはちゃんと認めてくれるんだ」

「……」

「それにね、あなたのことが気になってるのは本当だから」

突然僕の方を振り向き、告げられた百城さんの言葉に僕はドキリとさせられる。

挑発的な笑みを浮かべる百城さんは、あまりにも綺麗だった。

「夜風さんの舞台を見た時、光くんが初めて見せたあの表情——」

いつの間にか、人一人分空けていたはずのスペースが詰められており、ほぼ密着するほどの近さに百城さんがいる。

立ち上がるなりなんなりして距離を離せばいいのに、僕は縛り付けられたかのように動くことができない。

「あの魅力的な表情が、夜風さんじゃなくて、私に向いていたらどんなによかったか」

僕の両頬が、百城さんの両手によって掴まれる。

固定された僕の視線には、百城さんの表情しか映らない。

「どうすればもう一度あの顔が見れるのか。どうすれば私にその表情を向けてくれるのか。最近では夜風さんのこと以外だと、そのことばかり考えるの」

……何を言っているんだ？

魅力的？あのとときの表情が？

あれは僕のどす黒い本心が、抗えない自身の本性が、全て表に出てしまった顔だ。

この世のなによりも醜いもののはずだ。

それを百城さんは見たいと言っているのか？

「私は今日ね、最初から二人の人間に宣戦布告するつもりだったの。もちろん一人は夜風さん。そしてもう一人は――」

光くん、あなた」

突き刺すような視線からは、様々なものが入り交じった思いを感じる。

嫌ではない、むしろ心地いい。

「夜風さんの一番のファンである光くんにも、新しい百城千世子を見せてあげる。光くんを私のファンにして見せる。これが、あなたに対する宣戦布告」

百城さんからの宣戦布告を受けて、僕は何も言うことができなかつた。

この数時間で起きたことが、あまりにも僕の許容量を大幅にオーバーしていたからだ。

油断すれば、意識が持っていかれてしまっそうで。

当の百城さんは満足そうにしている。

とにかく、今すぐにも僕は帰ってしまいたかった。

もう何も考えたくない。

ベンチから立ち上がり、別れを告げて立ち去ろうとする僕に、百城さんは『最後に一つだけ』と言って引き留めてくる。

「約束のこと覚えてる？」

「約束？」

本気でなんのことかわからなかった僕は、疲れた頭で必死に思い出そうとする。

「ほら、夜風さんの家でした約束」

「あ、もしかして……なんでも言うこと聞くてやつ？」

百城さんの出したヒントで、約束についてしつかり思い出す。

景と知り合いだったことを黙っていた、その代償のような形で交わした約束のことを。

「そう、私が聞いてほしいお願いなんだけど——今伝えてもいい？」

「……まあいいけど」

わずかな恐怖心を抱きながら、そのお願いごとに僕は耳を傾ける。聞かなければ良かったと、後悔することも知らずに。

「光くんのことを教えて欲しいの」

心臓の、跳ねる音がした。

「……どういう意味？ちよつとよくわからないんだけど」

嘘だ、ほんとはもう察しがついてる。

百城さんが僕の異常性に気づき始めていることも。

その異常性に興味を持っていることも。

「うん、今の光くんならきつとそう言うと思った。だから、ここから先は私のひとりごと」

そう前置きをして、百城さんは座っていたベンチから立ち上がる。

「初めてあなたと話したとき、あなたの顔が本物じゃない気がした。ちよつど私も顔が視えないなんて言われたばかりで、どこか同じ匂いを感じて興味を持った」

一歩、距離を詰める。

「前にこの公園で会ったとき感じたのは、何か引つかかるような違和感」

一步、距離を詰める。

「夜風さんの家で会ったとき、わずかにその違和感の片鱗が見えた気がした」

また一步、距離を詰める。

「そしてあの日の舞台、今まで見ていた光くんとは別人のようで、それでもなお魅力的だった」

さらに一步、距離を詰める。

「でも、きつと私ができるのがここまで」

そう言つて百城さんは、それ以上距離を詰めることなくその場で立ち止まる。

僕と百城さんの距離は、あと一步分というところまで迫っていた。

「ここから先は、光くんの口から聞かないと絶対にわからない」

僕と百城さんにはそれなりの身長差がある。

そのためここまで百城さんとの距離が近い場合、百城さんが顔を上げない限り、その表情をしっかりと確認することができない。

「あなたがその仮面の奥に隠している物を——私は知りたい」

——無理だ、できるわけがない。

これは誰にも見せたくない。

誰にも知られたくない。

ましてや、深く関わっている人にはなおさら。

「嫌だつて顔してる。わかつてたよ、おそらくそんな顔されるだろうなって。でも、これは役者とか関係なく、純粹に私が知りたくてじゃないんだ。だから——」

百城さんはまた一步動く。

しかし、それは距離を詰める一步ではなく、遠ざかる一步。

「私に、自分の全てをさらけ出してもかまわないと思えたとき、そのときは光くんから私に会いに来て」

思えば、僕が避けていたからというのものもあるが、百城さんと会うときはいつも偶然だったり呼び出されたりで、僕から会いに行ったことがない。

「明日でも、数年後でも、いつになつてもいい。私はその日を待ってる

から」

宣戦布告とはまた違った意味を持つその宣言に、やはり僕は何も返すことができない。

景は百城さんの言葉にしつかりと答えた。

だというのに、僕は何一つ真実を告げず、ただ口を閉ぎすだけ。

そんな自分が恥ずかしくて、ひどく情けなかった。

――――

くほんの少し前

――光くんのこと好きになっちゃった

千世子はそんな自分の発言に対する、夜凧の反応を待つ。

尋ねたことはないし、付き合っていることも否定していた。

しかし、夜凧は多少なりとも園山光という人間に好意があると、千世子は考えていた。

怒るのか、戸惑うのか。

なんにせよ、これで自分のことを敵として見るのは間違いない。

内心でごめんなさいと謝りながら、目の前の少女の次の言動に期待する。

しかし夜凧の反応は、千世子の予想したどれでもなかった。

「そうだったのね」

その表情には、怒りの感情など微塵も存在しない。

戸惑いや、焦りすらも。

なのに、千世子はその顔を見て怖いという感情を抱く。

誰も見惚れるような、とてもキレイな表情で、夜風は笑っていた。

## また今日も

公園での衝撃的な出来事から、しばらくが経った。

世間ではハリウッドスターが来日し、日本の舞台に出演するという  
ことで騒がしくなっている。

一方、僕の周りは驚くほどいつも通りだった。

特に危惧していた景の様子だが、いつもの様子となんの変化もなく、まるであの日のことは幻だったかのように普段通りの生活を送っていた。

てつきりまた、動揺した景が下手な探りを入れてくるのではないかと想像し、いくつかの誤魔化しパターンを考えていた僕は、肩透かしを食らった気分になる。

あと、少し自意識過剰みたいで恥ずかしかった。

朝会えばいつも通り挨拶を交し、授業の休憩時間中は他愛もない会話を楽しみ、放課後はたまにルイくんたちの遊び相手をする。

僕と景の関係は、文化祭の時から何も変わらない。

この関係を壊すなどと決意しながら、優しくも正しくない現状に甘え、具体的な案はなかなか思いつかず、景を傷つける方法を考える自分に嫌悪する日々。

やはり高校卒業と同時に、黙って景の前から姿を消すことこそ最善ではないのかと、思考が二転三転し続ける。

そんな中途半端な日々を送る中、夜凧家から電話がかかってくる。

電話の主は景ではなく、レイちゃんだった。

『お姉ちゃんが山から帰ってこないのー!』

レイちゃんの声はひどく慌てている。

遭難——まず普通ならその考えが頭をよぎり、心配のひとつでもするのだろう。

だが、僕はまったく焦る気になれない。

むしろ、いつもと同じように行われる景の突飛な行動に、どこか安心感のようなものを抱いてしまっていた。

「まったく、相変わらずだな景は」

先程までうだうだ考えていたことが全て消え、自然と笑みがこぼれてしまう。

改めて僕は、自分の単純さを自覚する。

—————

スタジオ大黒天自称美人制作の柊雪は、現在夜凧家を訪れていた。きっかけは、夜凧景の弟妹から助けを求める連絡がかかってきたこと。

「まさかそれでほんとに山登りに行った上、そのまま山頂に泊まって帰ってこないとか、けいちゃん破天荒すぎる。しかも制服で」

状況をレイから伝え聞いた柊は、驚愕しつつも、景ならありえるかどうかで納得する。

「私が山登りなんて口にしたから……」

「いや、多分けいちゃんなら遅かれ早かれ結局登ったような気がするし、気にしなくてもいいんじゃないかな」

自らの言葉がきっかけで、姉が奇怪な行動に走ったことを落ち込むレイちゃんに対し、柊は慰めるように接する。

「それで、今は偶然出会った演出家の人と行動してるんだっけ？」

「うん、さっきお姉ちゃんから電話があってそう言った。だから心配しないでって」

「じゃあ着替えとか必要なもの持って行ってあげたほうがいいかな。うへえ、私登山とかしたことないんだけどなあ」

「あ、それなら大丈夫。荷物は光くんが届けてくれるから」

レイの口から出てきたある人物の名前。

その名前に覚えのあった柊は反応を示す。



「光くんって、園山光くん？」

「うん、さつき電話したからそろそろ来てくれると思う」

そう言うと同時に、夜凧家のインターホンが鳴る。

真っ先にルイが元氣よく返事をして玄関を開けると、ちょうど二人の話の話題だった人物、園山光が立っていた。

「おはようルイくん、レイちゃん」

ルイに促されるまま部屋に入り、優しげな表情でルイとレイに言葉をかける光。

ふと部屋の中に夜凧家以外の人間がいることに気づいた光は、一瞬訝しげな表情を浮かべる。

だが、すぐに思い出したかのように『あっ』と声を出すと、ルイやレイと同じように言葉を投げかけた。

「おはようございます。たしか、柊さん……でしたよね？」

「え？……あーはい、そうです。柊です！」

入ってきた光を見て、『相変わらずイケメンだなく、カメラ映えしそ  
うだなく、役者やつてくれたりしないかな』などとボーっと考えて  
いた柊は、慌てて返事を返す。

「というか園山くん、私の名前覚えててくれたんだ」

「忘れないですよ。急に家に訪ねてきて、景に協力しないでくれなん  
て言われたんですから」

「あはは……あの時はヒゲがご迷惑を」

ほんの少し前の会合を思い出しながら、二人は笑い合う。

そんなふうにあいさつしながら、ルイとレイも含めた四人は荷物の準備  
を進めていく。

「あ、私とルイでお姉ちゃんの服準備してくるから、光くんは少し待つ  
てて」

「わかった」

「私も手伝おうか？」

「ううん、二人で大丈夫」

そう言っただけで柊の手助けを断り、ルイとレイは居間から出ていく。

居間には、柊と光だけが残されていた。

柊と光、二人は初対面ではないものの、前は業務内容のようなものを口にしただけで、ほとんど初対面と変わらない。

しかしながら、コミュニケーション能力は二人とも高く、特に会話に困るようなことはなかった。

数分後――

「雪さんのオススメ、すごく面白そうですね。今度見てみます」

「うん、絶対に光くんも気に入ると思うよ」

ごく短時間で名前呼びになり、お気に入りの映画を紹介する仲になった二人。

第三者から見てもわかるであろうほど、二人の仲は打ち解けている。

ふとその時、柊はずっと気になっていたあることを思い出す。

ちようど二人きりの今だからこそ、そこそこ打ち解けた今だからこそ聞けること。

それは、夜風景と園山光の関係性だった。

絵に描いたような美男美女。

しかも幼なじみ。

ちよくちよく思わせぶりな態度をとる景。

気にならないはずがない。

普段事務所で景が他人の話をするとき、その八割が光の話であり、直接聞いたわけではないが、景が光という人物にかなり好意を抱いているのはわかる。

では逆はどうか？

景の話や、実際に見た印象からこの少年を少女漫画で例えるならば、ヒロインに甲斐甲斐しく世話を焼く優しいイケメン幼なじみポジションといったところ。

どうやら付き合っていないみたいだが、これで光から景への好意がないなんて嘘だろうと、柊は自分の中で結論づける。

「あー……光くんてき、景ちゃんとは幼なじみなんだよね。いつから一緒なの？」

「小学校の時からですね。家も近かったので同じ学区だったんです」「なるほど……」

ここで柊は思考する。

これは遠回しに聞いても、なんだかんだでかわされるな、と。

光のわずかな返しから、今までの人生経験をもとに判断する。

ならば、ストレートに聞くぐらいがちょうどいい、そう考えた柊は神妙な顔を浮かべて光に尋ねた。

「その、光くんはさ……景ちゃんのことどう思ってるの？」

大切な友人、大事な幼なじみ、もしくはただの腐れ縁とでも言うのか。

柊の予想していた返事はこのあたりだった。

「好きです」

だからこそ、その答えに呆気に取られる。

「……え？」

「好きですよ、景のこと」

「え、えっと……それは友達として？」

「いえ、異性としてです」

「お、おお……」

予想を遥かに超えたストレートな返しに、柊はなぜか自分が恥ずかしくなってくるのを感じる。

「あ、景には言わないでくださいね」

そこで初めて、少し照れくさそうに笑う光を見た柊は『この子あざといなー、年上からモテそう』などといった感想を抱く。

「もちろん、誰にも言わないから安心して。そうだよね、やっぱり想いを伝える時は自分で伝えたいよね」

「……はい」

少年少女の甘酸っぱい青春に、成就してほしいと期待する柊。

ほんの少しテンションも上がった。

一方で、そんな柁の態度と反比例するかのようには、光の内心は冷えていく。

想いを伝えるという未来など、訪れることは決してない——と。しかし、自分を偽り続けた結果として身についた技術が、柁にそれを悟らせない。

少年はまた今日も嘘をつく。

相手にも自分にも。

誰も救われない嘘を。

## 意外な再会

「ふう……」

空気が薄くなっていくのを感じながら、僕は呼吸を整える。

景に荷物を届けるため、山を登り始めてから数時間。

頂上まではあと少しといったところ。

時間は昼前でありながら、高地かつ時期が冬ということもあり、気温は凍えるように冷たい。

僕が通ってきた登山コースはそれなりに険しく、成人男性でもそれなりに苦勞するほど。

にもかかわらず、装備ゼロという暴挙に加え、制服という登山家に怒られても文句を言えない状態で登頂した景には、もはや笑うしかない。

しばらく歩くと、頂上付近だと思われる場所にたどり着く。

レイちゃんの話だと、演出家の人のテントに泊まっているとのこと。

とりあえず、そのテントを探すために歩き回る。

それはすぐに見つかった。

成人女性二人くらいなら、余裕をもつてくつろげるであろう大ききのテントが、何もない中でわかりやすくポツンとたてられている。

しかしながら辺りに景の姿はなく、テントの中に人の気配もない。どこに行つたんだろう？

とりあえず荷物だけ置いて周囲を探してみようかと考えていたその時、背後でジャリという音が聞こえる。

「私に何か用ですか？ それとも、あの女子高生のほうでしょうか？」  
それは女の人の声だった。

景のものではない。

だとするならば、演出家の人だと考えるのが妥当だろう。

ただ僕には、この声にどこか聞き覚えがあった。

はつきりとは思いつけない。しかし胸の奥で引っかかるよな違和

感が広がる。

覚えているのに、まるで思い出したくないような、そんな違和感。僕は恐る恐る、ゆっくりと振り返る。

そうしてその女性の顔を見た時、僕は違和感の正体を全て理解した。

登山装備に身を包み、メガネをかけ、髪はボサボサで自分の見た目を気にしていないといった印象の女性。

僕はその女性を知っている。

直接会ったこともあれば、会話をしたこともある。

なのになぜ僕は、本能的に思い出すのを拒否したのか。

女性に対して嫌悪感があるわけではない。

もつと間接的な理由。

その女性を思い出すということは、僕の許されない罪の記憶を掘りおこすことになるからだ。

「……！」

女性の方も、僕の顔を見て驚いた表情を浮かべる。

「もしかして……園山光？」

「……はい、久しぶりですね——花子さん」

数年ぶりに会う知り合いに、僕はなんとも言えない複雑な気持ちで言葉を返した。

山野上花子——

画家であり、彫刻家であり、小説家といった様々な分野で才能を発揮する女性。

美人過ぎる芸術家として、一時もてはやされたこともある有名人だ。

彼女と初めて会った——というより、彼女を初めて見かけたのは、僕が中学生の時だった。

それは、ある男に会いに行った時のことだ。

玄関先で僕と男が話している中、男の背後から花子さんは現れた。見た目は今とほとんど変わらず、何の話をしているのだろうと、不

思議そうにコチラを見つめていた。

そんな花子さんを男は、君には関係のないことだよと言って部屋の奥に押し戻す。

今思えば、会話の内容を聞かれないための行動だったのだろう。

そんなふうに、僕が何度かその男と会う中で、花子さんの姿も何度か確認していた。

だが、実際に花子さんと話すような機会はまったくなかった。

初めてまともに会話を交わしたのは、最後に会った時だ。

今日こそはという強い意気込みと共に男の元へと向かったあの日。

男はそれを察したかのように僕の前から姿を消した。

男の部屋には、深い失望と怒りにのみまれ、崩れ落ちたように座る花

子さんの姿だけがあつた。

同じ男に裏切られた者同士。

僕と花子さんは、このとき初めてお互いを認識した――

「まだ……景さんと交流を続けていたんですね」

数年ぶりに再会した花子さんは、どこか憐れみを含んだ表情で僕に語り掛ける。

花子さんは、僕の秘密を知っている数少ない人物だ。

負の感情に囚われて抜け出せない僕を知っている。

あの男に裏切られた日からしばらくの間、僕と花子さんは交流を持つようになった。

交流と言っても、偶に会って話したいことを話すだけ。

誰かに話すことで、少しでも楽になりたかったんだと思う。

どう考えてもまともじゃない歪な関係。

そんな関係が長く続くわけもなく、しばらくすると会うことも無くなった。

その関係を終わらせることで僕と花子さんは前に進めたのか、それとも目を逸らしたただけなのか。

きつと後者だ。

だからこそ僕は、花子さんの言葉にこう返答する。

「当然ですよ。人間そう簡単には変わらない、変わりたくとも変わらない。僕も花子さんも……そうでしょ？」

「……ええ、そうですね」

僕の言葉を肯定した花子さんの姿は、最後に見た時と変わらず、心の内側に激しい炎を宿していた。

—————

時刻は昼過ぎ。

そろそろ昼食の時間かと、森で演技の練習を行っていた夜風はテントへと戻る。

そのテントの傍で、演出家である山野上花子が何をするでもなく、ただ立ち尽くしていたのを見て夜風は不思議に思う。

「どうしたの？ 花子さん」

「ああ、景さん。いえ、なんでもありませんよ」

「そう？ ならいいのだけれど」

夜風もそれほど気になっただけではないため、特に追及することもなく話は終わる。

そのまま昼食の準備に取り掛かろうとテントの中を覗いた景は、今朝まではなかった荷物があることに気づく。

中を覗いてみると自身の着替えなど、キャンプに必要であろう品がそろえられていた。

「それ、さつき園山光という人物が景さんのために届けてくれたんですよ」



「光が!？」

夜風が疑問を口にするよりも早く、花子が事の経緯を伝える。

それを聞いた夜風は興奮するように声を張り上げた。

そのわかりやすく大げさな反応に、花子は思わず目を見開く。

「……ええ、そう名乗ってましたよ」

「もう帰っちゃったの？」

「なんでも用事があるとかいって」

「そうなの……また光に迷惑かけてしまったわ」

そう言いながらも、夜風の表情はどこか嬉しそうだった。

「……容姿の整った子でしたね。わざわざこんな所まで荷物を持ってきてくれるくらいです。恋人なんですか？」

花子は光と夜風の関係性をなんとなく察している。

二人が恋人関係でないことも。

それでもあえて、花子は探るように尋ねる。

「ううん、違うわ。でも——」

一度言葉を切り、夜風は花子と目を合わせてはつきりと答えた。

「恋人以上に大切な相手よ。お互いそう思っているわ」

## ジョーカー

『ああ、腹が立つ。腹が立つ』

山ごもりを経て、あの王賀美陸と対等の演技を繰り広げる夜風景。羽田空港内にて多くのメディアが集まる中、堂々と楽しそうに演技を続ける二人にみな眼が離せない。

オーラとしか言えないような存在感が、その場を支配していた。そうして二人の読み合わせは終わり、舞台「羅刹女」に対する人々の期待は跳ね上がる。

そんな光景を見て、夜風達サイド甲の演出家である山野上花子は、隣にいる芸能プロデューサーであり、舞台「羅刹女」の仕掛け人である天知心一に尋ねた。

「番宣とは抜け目ないですね。そういう計画だったんですか？」  
「まさか、そんなリスキーな真似しません」

真顔でそう答える天知に対し、サイド甲の猪八戒役である烏山武光は疑いのまなざしを向ける。

結局のところ、天知の都合の良いように物事が回っていたからだ。とはいえ、今回の件が天知にとってギリギリだったのも確かだった。

駄目元で呼んだ百城千世子に明神阿良也。

夜風が羽田空港にくるように残した置き手紙ならぬ置き色紙。

なにより、完全に賭けであった夜風の成長。

本当にギリギリではあったが、全てが上手くかみ合い、プロデューサーの職と信頼を失わずに済んだ。

そしてなにより、最悪のジョーカーを切らなくて済んだことに安堵する。

天知がそのジョーカーを手札に加えることができたのは少し前。

時は杉北祭当日までさかのぼる――

校舎の壁に上映される映研自作映画である『隣の席の君』。

多くの生徒が映画に釘付けになる中、天知も映画監督である黒山とその映画を見ていた。

拙い撮影と録音、起伏もテーマも希薄な内容。

それでも魅入ってしまうほどの女優・夜風景の力。

益々欲しい——そんな気持ち天知の中で大きくなっていく中、ふとあることに気づく。

それは映画に一瞬だけ映った夜風の表情。

まるで誰かに怒っているような、縋っているような、だだをこねているような。

あれは演技か、それとも——

今まで夜風のことを調べてきた天知であったが、あのような表情は一度たりとも目にするにはなかった。

夜風がその感情をぶつけている相手は、少なくとも映画には映っていない。

もし演技じゃないのならば、その相手を何らかの形で利用できるかもしれない。

己が好いた女を好かせるために。

天知はすぐにプロデューサーとしての権力を行使し、夜風があのような感情を向けた相手を探し出した。

そしてそれはすぐに見つかった。

夜風景にとつて、数少ない一般の友人であり、小学生のころからの幼馴染である少年。

その少年に対し、天知は自ら会いに行く。

夜風が誰にも見せない表情を見せるその少年は、一体どんな人物なのか——わずかながらの期待をもって。

だが、その少年と会った天知は落胆する。

確かに顔はいい。かなり整っている部類と言っていいたいだろう。芸

能人と比べても遜色ないどころか、星アキラにも並ぶクラス。

しかし、あまりにもスターとしてのオーラがない。

経歴も尖ったところはなく、平凡そのもの。

プロデューズする側からすれば、売り方にかなり悩むような存在。

仮に芸能界デビューしたところで、少し顔がいいと話題になったのち、すぐに忘れ去られるだろう。

そんなかなり失礼なことを考えながらも、天知は笑顔で少年に話しかける。

「初めまして、園山光くんですね？」

「……………どちら様でしょう？」

わかりやすく戸惑った表情を見せ、怪しむ素振りでも天知を見つめる

少年——園山光。

まるでお手本のように平凡なりアクションを見せる光に、天知は疑問を覚える。

なぜこんな平凡な少年が、夜風景にとって特別な存在足りうるのか。

とことん理解できない天知であったが、利用する分にはこれほどやりやすい相手はいない。

そう考えて、自身の名を告げながら名刺を渡す。

「芸能プロデューサーの天知心一といいます。簡単に言うと、色々な才能を導くという…ふわふわしたことを生業としている者です」

「天知……………」

光は名刺を読みながらその名を復唱し、少しばかり考えた後、思い出したように声を出す。

「ああ、確か景が自分のことを不幸呼ばわりした嫌なやつって言うってたあの……………」

「ええ、残念ながらあの件で少し嫌われてしまったみたいで。ちゃんと本人の意思をくんでその記事は差し替えたんですが」

「こんなこと言うのもなんですけど、弟や妹と一緒に高いご飯でもおごれば、簡単に機嫌を直してくれると思いますよ。けっこう現金なところあるんで」

「確かに、初めて会ったとき、夜風さんの前で札束をばらまいたら驚いて倒れてましたね」

「ハハハ、札束って。そんなことしたんですか？」

「フフフ、こんな額、あなたならすぐに小銭と思えるようになる——と、いうことを知ってもらうための演出だったんですが」

とてもいい表情で笑いあう二人。

牽制するように会話を続ける中で、先に切り込んだのは光だった。

「それで、芸能プロデューサーであるあなたが、僕に何を望むんですか？」

顔は笑顔のまま。

光の瞳が真っすぐに天知へと向けられる。

穏やかな会話から一転、核心へと切り込むセリフを投げた光の瞳に

は——熱が一切こもっていなかった。

喜びも、驚きも、嫌悪も、感情と呼べるものが何一つ読み取れない表情。

天知が幼馴染の嫌っている存在であると知った後も、まったくぶれることのない態度。

むしろ最初に声をかけたときよりも、感情が消えていると言っている。

それは、天知が光に対して初めて感じた強烈な異常性だった。

今までプロデューサーとして多くの人間を取り扱ってきた天知には、たいていの人間は上手く扱えるという自信がある。

もちろん、王賀美や黒山のように扱いの難しい人間もいる。

だがそれでも、最終的には上手く人も場も回していくことができると考えている。

そんな天知だが、園山光の扱いについては慎重にならざるを得なかった。

初対面の後も何度か交流を重ね、意外にも天知に対して協力的な態度を見せた光。

普段ならそのまま利用するところなのだが、何か引掛かった天知は光の扱いを保留する。

ひとたび光という手札を使用した時、夜風景を使ったビジネスチャンスが大成功する可能性と共に、なにか決定的に取り返しのつかない事態を招く可能性を感じ取ったからだ。

その可能性を感じ取れたのは、天知のプロデューサーとしてのすぐれた嗅覚故とあっていいだろう。

黒山墨字は天知が嫌う生粋のアーティストだ。だが彼には目的があり、その目的のために行動している。

王賀美陸は傍若無人の唯我独尊。だが彼は固く強い意思で俳優としての己を貫いている。

二人にはしつかりとした行動理念があり、その行動理念に沿えば何ら問題はない。

だが園山光は違う。彼はアーティストでなければ、指針とするべき行動理念が脆い。

本能とそれをおさえつける理性が絶妙なバランスで成り立っている彼は、自身で長く必死に積み上げてきたものを、簡単に一瞬で無にしてしまう危険性ははらんでいる。

だからこそ、天知が光を使うことがあるとすれば最悪の一手手前から。

それがプロデューサーとして合理的な判断だった。

しかし忘れてはいけないのは、その判断はプロデューサーという立場だからこそできたこと。

そんな天知の嫌うアーティストという存在は、平気で危険性のはらんだ爆弾を使ってしまう。

より良いもののために――

——時は戻り、羽田空港内にて。

多くの野次馬と同じように、二人の読み合わせを眺めていた少年は携帯に通知が入ったことを確認する。

相手は天知心一。内容は『申し訳ありません。せっかく待機していただいていたのに、無駄になってしまったみたいで。もちろんここまでの交通費等、呼び出したことへのお金は支払います』とのこと。

少年は落胆の色を見せることなく返信する。

『大丈夫です。気にしてませんよ。それに、対価なら二人の劇を見れたことで十分です』

そう送った後、スマホをポケットの中へとしまい、王賀美にお姫様抱っこされている夜風へとその目を向ける。

王賀美の行動に対し、降ろしてと言わんばかりに迷惑そうな表情を浮かべる幼なじみ。

その様子を少年はただ微笑ましげに見つめていた。

「あれじゃあ、景の個性的なTシャツがお茶の間に流れちゃうな。センスが悪いつて有名になるかも……まあ景は絶対に認めないだろうけど」

それだけつぶやくと、少年はその場を後にする。

役者や脚本家、映画監督にプロデューサー。

様々な分野の人間が、様々な思いを抱えて舞台「羅刹女」へと関わっていく中、異物とも言える1人の一般人が、少しずつ舞台に関わり始める。

それが吉と出るか凶と出るか。

まだ誰にも予想することはできなかった。

## 関わり始める異物

舞台「羅刹女」は本番まで2ヶ月を切ろうとしていた。

羅刹女は活劇であり殺陣たてを要する。

全体は殺陣師の指導の下、立ち稽古を始めていた。

そんな中で、サイド甲の主演である夜風は――

「…はあ」

怒りで燃え盛る羅刹女を上手く表現できず、役作りの壁にぶつかっていた。

「いつそ結婚してしまおうかと思ったのだけど、相手がいなくて…ごめんなさい」

床に倒れ、わかりやすく落ち込みながら夜風はつぶやく。

それを聞いた猪八戒役の武光は、ある疑問を覚えた。

「ん？ でも確か夜風、仲のいい幼馴染がいるんじゃないか？

デスアイランドの撮影の時もよく口にしていた」

「光は……………」

もちろん、夜風も光を牛魔王に見立てて羅刹女を演じてみたことはある。

最初はピツタリだと思った。牛魔王が妾のところへ行くというシチュエーションも、心当たりがあったため簡単に想像できた。

むしろこれ以上というはまり役は無いように思えた、が――

予想と反して、燃え盛るような怒りの炎が夜風の中で生まれることはなかった。

「なんでかしら……………」

役作りとは別の悩みが増え、必死に解決策を考えていたその時、部屋の入り口からノックする音が夜風の耳に入る。

「あの一、休憩中すいません。けいちゃん、ちよつといいかな？」

倒れていた夜風に声をかけたのは、夜風の所属するスタジオ大黒天で働く柊だった。



「黒山さんが私を？」

「うん、どうしても連れて来いって。ごめんね」

柊が夜風に声をかけた理由は、夜風にサイド乙の稽古を見せるためだった。

そのため、柊は夜風だけを連れてサイド乙の稽古場へと向かおうとしたのだが――

「私もぜひそちらの稽古を見学してみたかったので」

「敵情視察ってやつですね。ワクワクだ」

なぜかサイド甲の出演者全員がついてくることになり、大所帯での移動となっていた。

予定外ではあったものの、生・王賀美陸を拝めたまあいっか――などと柊が考えている間に、サイド乙の稽古場の扉の前へとたどり着く。

そしてその扉の前には、一人の少年が待機するように立っている。その少年も夜風同様、柊が稽古を見せるために呼び出した人物だった。

「あ、こんにちは光くん。ごめんね、呼び出したのに案内もできなくて。迷わずにこれた？」

「こんにちは雪さん。はい、特に問題なく。雪さんがあらかじめ細かい道順を送ってくれていたのよ」

さも当たり前のように親し気な会話を交わす柊と少年――園山光。その光景を見た夜風はただただ戸惑っていた。

なぜなら光は役者でもなんでもなく、本来この場にいるような人物ではないからだ。

「光!? どうしてこんなところにいるの!？」

「やあ景、雪さんから稽古を見に来ないかって誘われたんだ」

光は普段通りの笑顔を浮かべて答える。

その答えを聞いた夜風はすぐに質問の矛先を柗へと変えた。

「どうして光まで呼んだの？」

「いや、それに関してはほんと私もわからないんだけど、墨字さんが

『二人そろってた方が都合がいい』って言うから」

「……………」

柗の答えに夜風はますます疑問を深める。

「光はなんで呼ばれたか知ってるの？」

「ううん、僕もさっぱり。なんならその黒山さんと会うのもこれが初めてだし」

「あ、そういえばそうだったね。いつも私が墨字さんのメッセンジャーみたいな形で連絡とってるから」

「わりと急なことが多いですよ。今回もいきなりでしたし」

「ごめんね、ヒゲが迷惑かけて」

笑いながら楽しそうに自分の知らない話題で盛り上がる柗と光。

それを見た夜風はなんとも言えない感情が湧き上がる。

「……………ねえ光、いつのまに雪ちゃんとそんなに仲良くなったの？」

夜風は光にジト目を向けながら尋ねるが、それに対して慌てたように反応したのは柗の方だった。

「あ、まずっ、けいちゃん違うの。これはそういうのじゃなくて…………けいちゃん繋がりみたいなので…………ねっ！ 光くん！」

「…………」

「あれ…………？ 光くん？」

「あつ、すいません。ちよっとボーっとしちゃって」

夜風を見つめながらどこか上の空だった光は、申し訳なきように謝罪する。

「ほら、景が一時期役者の仕事を休んだ時とか、山に荷物を持っていった時の準備とか、そういうので何回か話す機会があったんだよ。それよりいいの？ 稽古を見に来たんでしょ？」

少し露骨な話題逸らしてはあったものの、夜風は光との会話を打ち切り、稽古場の方へと意識を向ける。

もともと夜風は扉の前へとたどり着いた時点で、扉の中からわずかに聞こえてくる声に、意識の大半を既に持っていかれていた。

知っている人物の声のはずなのに、それにしても低く潰れたような声に戸惑いを隠せない。

「どうした景」

「あつ、うん」

夜風は王賀美に促されるようにして扉を開ける。そこには――

『羅刹女よ！ 寂しいな！ 悔しいな！ あんた、なぜ今一人で戦っているんだ!?!』

『黙れ猿!?!』

孫悟空役の明神阿良也と、天使の面影など一切なくなつた百城千世子の姿があつた。

顔立ちや雰囲気だけでなく、声まで変わった千世子のその姿は、それが本人であることすら疑つてしまうほど。

夜風が役作りに悩んでいるその間、千世子は明らかにその数歩先を行っていた。

「待て百城」

サイド乙の演出である黒山によって演技が止められ、千世子に対して演技指導が入る。

「お前の敵は誰だ？」

指導する中で黒山が千世子にそう尋ねた時、千世子はゆっくりと振り返り、夜風の顔を見つめた。

もはやそれは睨みつけると言つても過言ではなく、妬み、愛情、憎しみ、それら全てを混ぜ合わせた感情ほのおを夜風にぶつけていた。

ぞくりと、全身に冷たさが襲うほどの恐怖を夜風は身に受ける。

すごい――素直にそう思うと同時に、友達からそのような眼を向けられることに悲しみを感じていた。

「ご、ごめんね、けいちゃん。でも、けいちゃんのためにもなると思うから」

千世子にとつても夜風にとつても必要なことだとは理解しつつ、夜

凧の心情を理解できた柊は申し訳なさそうに謝罪する。

優しさを履き違えるな——正しくも厳しい黒山の言葉を柊が思い出していたその時、

ゾワリと、思わず凍りついてしまうような寒気を、柊は背中に感じた。

そしてそれを感じたのは柊だけではなかったようで、全員がその場で声と動きを止めていた。

「な、なに？」

恐る恐るといった様子で、柊は寒気を感じた方を振り向く。

そこにいたのは、不機嫌な表情を浮かべて佇む王賀美だった。

それを見た柊は納得する。

さっきの、恐怖を感じるほどのオーラは、王賀美から出たものだったのだと。

なにか千世子の演技に思うところがあつたのだろう——柊やこの場にいた何人かはそう結論付ける。

わずかな中断の後、何事もなかったかのように稽古は再開された。

荒々しいオーラ、王賀美のものに似ているがどこか違う。

しかしどこか懐かしい——それが夜凧の感じた素直な思いだった。

「……光？」

いつの間にかその場から消えていた幼馴染の名を、夜凧は無意識に口に出していた。

「あいつ……俺を変わり身にしやがった」

あれだけのオーラを放ちつつ、自らモブを演じようとする気にくわない奴。

それが王賀美の、園山光という少年に対する初対面での評価だった。

「なるほど。あれが光くんとやらか。夜風や百城が興味もつのもわかるな」

名前だけは何度も耳にしたことのある少年。

それを初めて直接見た黒山の感想は、想像以上にヤバい奴。

夜風景を初めて見つけた時に勝るとも劣らないほどの衝撃だった。

「もう……ダメだな」

自身がやらかしたことを自覚する少年は、スマホで一人の少女にメッセージを送る。

『今夜、僕から会いに行く』

まるで恋人に送るような甘い言葉だが、少年の思いは真逆のもの。

メッセージを送った少女との関係を完全に断ち切るためのものであった。

ぶつけてみせてよ

『ハンクにきつ』

そう表示されたメッセージの下には、百城さんから送られてきた位置情報がのつていた。

その位置情報を頼りにたどり着いたのは、見るからに富裕層が住んでそうな超高層マンション。

「うわあ、すごいな」

僕は驚きのあまり思わず声を出してしまうが、生まれも育ちも生粋の庶民なのだから仕方ない。

マンションの中へと入り、オートロックの玄関を通ってエレベーターへと乗り込む。

百城さんの住んでいる階のボタンを押し、長いようで短い移動が始まる。

日はすっかり落ち、エレベーターから見える街の明かりがまぶしく輝いていた。

思えば、偶然のような出会いをしてから、たった数ヶ月で信じられないほど親密な仲になったと思う。

連絡先を交換して、ドラマの感想を送って、深夜の公園で会って、隣の席と一緒に演劇を見て。

もし百城さんのファンに知られば、殺されてもおかしくないような経験をしてきた気がする。

最初は戸惑いの方が大きかったし、振り回されるようなこともあった。それでも、

楽しかった——それが、僕の嘘偽りない素直な感想だった。

その関係を、今から終わらせに行く。

目的の階へとたどり着き、エレベーターの扉が開かれる。

これから芸能人の部屋を訪れるという事実には、どこかフワフワした

感情と、信じられないくらい冷静な感情が同居していた。

部屋の前まで移動すると、ガチャリと鍵の外れる音が鳴り、扉が開かれて百城さんが姿を現す。

「こんばんは、光くん」

「こんばんは、百城さん」

のどがつぶれているせいか、百城さんの声は低く掠<sup>かす</sup>れている。

「さ、入って」

百城さんに促されるまま、僕は部屋の中へと入り、着ていたコートを脱ぐ。

「貸して、コート掛けといてあげる」

「別に大丈夫だよ。持っておくから」

「いいから」

有無を言わさぬ百城さんの圧力に、簡単に屈した僕は素直にコートを手渡す。

その接触の際、僕はあることに気づいた。

それはいつも付けていた香水の匂いが、百城さんからしなかったこと。

まあ口に出したら気持ち悪がられそうだし言わないけど。

「そこ座ってて」

百城さんの指示通り、僕はソファに腰を下ろす。

隣の部屋からガサゴソと何かが動く音が聞こえているが、あえて聞こえないふりをする。

きつと以前、百城さんが話していた虫たちに違いない。

コートを掛け終えた百城さんは対面のソファに腰を下ろしたため、僕と百城さんは向かい合って座る形になる。

初めて画面の向こう側でその姿を見たときから、何一つ変わらない宝石のように綺麗な顔。

でも、今はその腹の中に禍々<sup>まがまが</sup>しい炎を宿しているのが、嫌でもよくわかる。

その炎に対して、もはや言い訳のしようがないほどに、僕は惹<sup>ひ</sup>かれていた。

正直、景以外の女性にこの感情を抱いたのが今でも信じられない。今日の百城さんが演じる羅刹女を見て、もうダメだと悟った。

だからこそ、僕はこうして百城さんに会いに来たんだ。

おそらくここが、ギリギリ引き返すことのできる境界線だから。

「それで、光くんから会いに来てくれたってことは……そういうことでいいんだよね？」

「うん」

「今日の演技を見て、決心してくれたの？」

「うん」

前に公園で会った時に交わした約束——僕の全てを百城さんに伝えること。

もちろん、最初は話す気なんてなかった。

こんな醜いもの、見せるはずがなかった。

けど、百城さんの羅刹女を見て思い直した。

このままダラダラと関係が続けてしまい、今の僕と景のようになってしまいうくらいなら、全てをさらけ出して、関係を断ち切ってしまうと。

「話すよ。僕が仮面の奥に隠す、その全てを」

どうか軽蔑<sup>けいべつ</sup>して欲しい。

どうか呆れて欲しい。

どうか興味を無くして欲しい。

それがお互いのためなのだから。

「最初にそれを感じたのは、小学生の時だった——」

僕は全てを話す。

どうすることもできない僕の醜い内面を。

僕がどれだけひどい人間であるかということ——



全てを話し終えた僕は、一度深く呼吸をする。

二人を除いて、両親にすら話したことのない内容を口にしたんだ。心臓の鼓動が早くなっているのがわかる。

一方で全てを聞き終えた百城さんは、悲し気な表情を浮かべていた。

「……………」

想像とは違うその表情に、僕は困惑する。

「光くんは、夜風さんのことが好き？」

……………もう今さら、隠すようなことはないか。

「好きだよ。小学生のころから、ずっと」

たとえ歪んでいたとしても、好きという気持ちだけは、どうしてももなく本物だ。

「いいなあ。そんなふうに思われるなんて」

「……………」

「なんでこんなにも光くんのが気になるのか……………なんとなくわかってはいたけど、今はつきりと理解できた」

そう言うと、百城さんは顔を上げて、僕の眼を真っすぐ見つめる。

「私は、光くんみたいな人に好きになって欲しかった」

「……………」

信じられないセリフだった。

でも、ふざけている様子は一切ない。百城さんは本気だ。

「偶像には一切興味を持たずに、本物だけを心の底から愛するあなたのような人に……………」

まるで泣いているような悲痛の叫び。

そんな印象を僕は抱く。

「夜風さんは天才だけど、私はそうじゃない。私は人より少し器用な

だけ。女優だって憧れてた人におだてられて始めただけ。この世界に選ばれた主人公じゃない。分かっている。でも——

やっぱり負けるのは悔しいんだよ。悔しい……！」

百城さんの内側に宿る炎が、内面にとどまらず外側にまで燃え広がる。

怒りと悔しさに歪んだ表情には、天使の面影など一切存在しない。それでも、今まで見たどんな表情よりも美しいと感じてしまう。

「負けてないよ」

ほとんど、無意識に出た言葉だった。

「百城さんの感情は、景に負けてない。景のことをずっと見てきた僕が保証する」

心の底から感じた本気の言葉を百城さんにぶつける。

もしかしたら余計なお世話だったのかもしれない。でも、それでも……口に出して言いたかったんだ。

この時の僕は、百城さんとの関係を断ち切るなんてこと完全に忘れてしまっていた。

「励ましてくれてるの?」

「本気だよ」

「そっか……ごめんね」

「なんで百城さんが謝るの?」

「だって、せつかく光くんが秘密を打ち明けてくれたのに、今の私は光くんを励ます言葉を持ってない。それどころか、私の方が励まされちゃったから」

ああなんだ、そんなことか。

別に気にしなくていいのに。

僕は救いを求めるために話したわけじゃない。

「僕が百城さんにこの話をしたのは——」

「私との関係を絶つため?」

「っ……!」

僕の話そうとしていた言葉を、まるで見透かしたように百城さんは

告げる。

思わず言葉に詰まった僕を、面白そうに百城さんが見つめていた。「やっぱり。そうだと思った」

そう言いながら百城さんは立ち上がり、僕の方へと歩き出す。

「光くんの話し方、まるで自分を嫌ってくれーって言ってるみたいだったもん」

「……百城さん?」

僕の前まで近づくと、座っている僕へ倒れるように覆いかぶさってくる。

「ちよっ!」

その一連の流れがあまりにも自然だったため、とっさに反応することができなかった。

百城さんは僕の両ひざを足で挟み込むように腰を下ろし、僕の首を巻き込むように両腕を回してくる。

まるで恋人同士のようなシチュエーションだが、僕の中にあるのは恐怖だった。

「な、なににして……」

「逃がさないから」

獲物を狙うような目とは、きつとこんな目のことを言うのだろう。

「前に言ったよね。光くんを私のファンにしてみせるって」

前回公園で会った時、確かにそんなことを言っていた。

「その気持ちは、光くんの全部を知った今でも変わってない」

「なんで……」

「楽しかった——それだけの理由じゃダメ?」

「あ——」

同じ気持ちだったんだ。

百城さんも、僕と同じように楽しいと感じていた。

「あなたと会えるのが楽しみだった。あなたから演技の感想が送られてくるたびに一喜一憂した。夜凧さんとの関係を知った時はすごく腹が立った。あなたと関わっている時の私は、まるで恋する乙女のような気分になれるの」

「……僕は、そんなふうに思われていい人間じゃない」

「あなたがどう思ってたようと思わない。私はその感情を持つ相手は、あなただけだから」

「でも僕は、その感情すら利用して踏みにじるかもしれない——そんな人間なんだ」

「やってみせてよ。踏みにじる行為は、あなたにとっての愛情表現なんですよ？　ぶつけてみせてよ。若手トップ女優の百城千世子が、全部受け止めてみせるから」

僕の戸惑いごと貫くような輝く瞳。

あまりにも強くてたくましいその言葉に、僕は以前のように何も言うことができなかった。

「舞台、ちゃんと見に来てね。最高の演技で、夜凧さんに勝ってみせるから」

最後にそれだけ言うと、やっと百城さんは僕の傍から離れる。

だというのに、ごちやごちやになりすぎた僕の感情は、百城さんが離れても落ち着かない。

僕が何を感じているのか。一体何を望んでいるのか。

自分のことはずなのに、まるでわからない。

それどころか、どこか他人事のように感じている僕がいた。

想像以上の長い滞在になってしまった百城さんの部屋を出て、エレベーターに乗り込む。

スマホを確認してみると、母親からの不在着信がいくつか来ていた。

帰るのが遅くなることは元々伝えていたので、不思議に思い母親に電話する。

「どうしたの？ 母さん」

『あ、やっと携帯見たの？ ずっと電話してたのに』

「ごめんごめん、それよりどうかしたの？」

『ああそうそう、さっきまで景ちゃん来てたわよ』

「景が？」

『ええ』

何か用があったのだろうか？

少なくとも約束とかはしてなかったはずだ。

『光と話したいっていうから、光の部屋で待っててもらったんだけど。ちよっと前に急に帰っちゃったのよね』

「……わかった。後で景に連絡してみるよ」

そう言っただけは通話を終わらせる。

ちようどエレベーターも1階に着いたところで、開いた扉から外へと向かう。

季節はすっかり冬で、マンションの外に出ると、吐息が白くはつきりに見える。

なんとなく、本当になんともなく思っていた。

根拠なんてないし、可能性としてもかなり低かった。

でも、僕の勘は正しかったのだと、目の前の光景が告げている。

「やっぱり、ここにいたのね。光」

誰よりも大切な幼馴染が、笑顔で僕を見つめていた。

## 見えないフリ

千世子ちゃんの羅刹女を見た私は焦っていた。

このままじゃ絶対に勝てないと思ったから。

千世子ちゃんは私を心の底から敵だと信じてまで、私に勝とうとしている。

千世子ちゃんに勝つには、私も見つけないといけない。

自分の中から、千世子ちゃん以上の怒りの感情を：！！

——と、意気込んでみたけれど、人生で怒った瞬間を思い出そうとして気づいた。

私は何かに怒ったことがあんまりないことを。ヒゲ以外。

だから、自分の外から探すか、もしくは想像で補うしかない。

それで考えた時、真っ先に思い浮かんだのが光だった。

私が羅刹女で、光が牛魔王、そして千世子ちゃんが妾。

きっとそれが、現状的にも1番考えやすい関係で、羅刹女の怒りに最も近いはず。

そしてなにより——

“私、光くんのこと好きになっちゃった”

以前公園で千世子ちゃんに会った時に言われた言葉を思い出す。

あの時の私は、一切の怒りを覚えなかった。

その理由も今ならなんとなくわかる。

光は絶対に私の傍から離れない。いつだって私の味方でいてくれて、いつだって私を支えてくれる。

例え千世子ちゃんが光のことを好きになっただとしても、光は変わらず私と一緒にいてくれる。

そう無意識に考えていたからだど、今になってやっとわかった。

なら、その考えを消してしまえばいい——

私は意識を集中させる。

光が私の傍からいなくなり、千世子ちゃん、もしくは私の知らない誰かほかの女性に優しくしている光の姿を。家庭を築いて、手の届かない所に行ってしまう光景を。

『ああ、腹が立つ。腹が立つ』

想像すると同時に、自分でも信じられないほどの怒りが胸の内から湧き出し——止まった。

怒りが爆発しそうになったその瞬間、優しく笑顔を浮かべる光の姿を思い出す。

姿を思い出すだけで全ての怒りや悩みが消え、自然に心と体が温かくなっていくこの感情が、恋と呼べるものなのかどうかはわからない。

けれど、この気持ちを利用して羅刹女を演じるということは——

激しい怒り、妬み、恨みの感情を光に対してぶつけるということ。

「……………いや」

無意識に言葉に出てしまうほど、私はそれを拒否してしまっていた。

千世子ちゃんに怒りの感情をぶつけられた時はとても悲しかった。

友達に向ける眼じやないと思った。

それでも、私は役者で、千世子ちゃんも役者。

芝居のことを最優先に考えるのが、千世子ちゃんへの礼儀でもある。

けど、光は違う。

光は友達として、10年近くも私の傍にいてくれた。優しくしてくれた。助けてくれた。一緒に笑ってくれた。悲しんでくれた。味方になって支えると、言ってくれた。

そんな光に対して、怒りをぶつけるなんてことしたくない。

とは言っても、この感情以外で強い怒りが湧くとも思えない。

「……………光に会いたい」

光に会って話すことができれば、相談すれば、何か解決できるん

じゃないかと考えた私は、光の家へと向かった。

コンコンと、いつものように光の部屋の窓をノックする。

小さいころから続けてきた二人の取り決め。

でも、光は出てこない。

どうやら部屋にいないようで、スマホで連絡をとろうとしたけど、電源を切っているのか繋がらなかった。

どうしようかと光の部屋の前で立ち往生していると、玄関の方から声をかけられる。

「あら、もしかして景ちゃん？ ずいぶんと久しぶりね〜」

声をかけてきたのは光の母親——昔よくお世話になったおばさんだった。

「もしかして光に用事？ ごめんね、今ちよつと出かけてて。あ、もしよかったら光の部屋で待ってて！ さすがにそろそろ帰ってくると思うから」

「でも……」

「いいからいいからー！」

おばさんに押されるがままに、私は家の中へと案内されていく。

「お茶いれてくるから、ベッドに座って待ってて」

光の部屋へとほとんど強引に連れて行かれた私は、そう言って出ていったおばさんの言う通りに、ベッドに座って光の帰りを待つ。

杉北祭の前日に来たときと同じで、昔からほとんど変わらない部屋の様子にどこか懐かしさを覚える。

特にやることもなく、部屋の中を見回していると、本棚の一部分に目が留まる。



参考書や問題集といった光らしい本が多く並ぶ中で、明らかに形の違う物が本棚に入れられている。

それは1枚の色紙だった。

私は立ち上がり、本棚の前に移動する。

勝手に見るのが良くない事なのはわかってる。

でも、どうしても確認せずにはいられなかった。

何か勘のようなものが働いたのかもしれない。

そしてその勘は的中した。

色紙自体は特に何の変哲もないよくある色紙。

その色紙には『園山くんへ』と書き込まれていた——  
私の字で。

『私の知り合いに、夜風さんのファンがいるの』

『アキラ君にも負けないくらいイケメンさんだよ』

思い出すのは、デスアイランド撮影最終日に千世子ちゃんと交わした会話。

——どうして、千世子ちゃんの知り合いのために書いたサインがここにあるの？

そんなの、わかりきってる。

本当は分からないフリをしていただけかもしれない。

光と千世子ちゃん——二人が出会ったのは、私の家が初めてじゃない。

それよりもずっと前、少なくともデスアイランドの撮影が始まるよりも早く。

二人は既に知り合っていた。

なのに、二人はまるで初対面であるかのように私の前で振る舞った。

光も、千世子ちゃんも、お互いが知り合いであることを私に一切話してくれなかった。

なんで？ どうして？

二人の隠していた事実を知ると同時に、今まで納得のいかなかった

出来事や疑問に思っていたことが鮮明になっていく。

まるでわざと考えないようにしていたんじゃないかと思うくらい、点と点が次々と繋がっていく。

『……ねえ景、千世子と会ったとき、もしかして怒らせるようなことした？』

『もしかして光、緊張してるの？ やっぱ千世子ちゃんほどの有名な人ともなると、光でも緊張するのね』

『うん……まあね』

『どうしたの千世子ちゃん。さっきからボーっとしてるわ』

『ごめんごめん。光君って、やっぱり不思議な人だなーって考えてて』

『また前の公園で会えない？』

『光くんのこと好きになっちゃった』

1度や2度じゃない。二人は頻繁に連絡を取り合い、何度も直接会っている。

それも千世子ちゃんが好意を抱くほど親密に。

「……フ」

自分でも信じられないくらい、低く冷たい笑いがこぼれた。

おばさんに一言あいさつをして光の家を出た私は、ある場所を目指す。

それは一度も訪れたことはなかったが、以前本人から教えてもらった場所。

日はすっかり落ち、吐く息が白くなるほど冷たい街の中を私は歩く。

そんな肌寒さが、熱を帯びた私の体と頭を冷やしてくれていた。

そうしてたどり着いたのは、超高層マンションの前。  
そこで私は目的の人物が現れるのを待つ。

なんとなく、本当になんとなく思っただけ。

根拠なんてないし、実際に現れる可能性も低く、待ちぼうけになる可能性の方が高かった。

でも、私の勘は正しかったのだと、目の前の光景が告げている。

「やっぱり、ここにいたのね。光」

誰よりも大切な幼馴染が、私がここにいることに全く驚く様子を見せず、いつものように優しい笑顔で私を見つめていた。

「やっぱり、いるんじゃないかと思ったんだ。景」

## 告白

そう言えば、夏ごろにもこんなふうにも2人で歩いたなど、隣で歩く景を見ながら僕は考えていた。

あの時とは違い、景の表情に憂いはない。それどころか、どこかスツキリとした様子が見て取れる。

なぜ景が百城さんのマンションの前にいたのか？

なぜ僕がそこにいるとわかったのか？

わざわざここまで来た目的は？

僕の方から聞きたいことはいくらでもあった。

でも、僕は景の言葉を待つことにした。

僕も景も、何も話さない。

けどお互いの家まではまだ距離がある。

このまま無言で終わることはないはずだ——僕がそう考えた通り、景はゆつくりと口を開く。その動きが、僕にはまるでスローモーションのように思えた。

「千世子ちゃんとは、いつから知り合いだったの？」

隣で歩く景は、前を向いたまま僕に問いかける。

「多分だけど、景と百城さんが初めて会ったのと同じ時期だと思う。街で偶然会ったのが最初」

「もう……隠す気はないのね」

「なんとなく、全部気づいてるんじゃないかと思って」

「……そう」

そこで一度会話が途切れる。

景の表情に変化はなく、うつすらと微笑んだままだった。

「特に隠すつもりはなかったんだけど、成り行きでそうなったんだ。だから、隠していたことに深い理由はないよ」

「……光は、千世子ちゃんのことどう思ってるの？」

その質問に僕は答えを迷う。

僕自身、まだ明確な答えを持っていなかったから。

だから素直にその気持ちを答えた。

「ごめん、僕自身もよくわからないんだ」

「でも、千世子ちゃんは光のこと好きって言ってたわ」

それ言っつていいの？ 公園でのことだろうから僕も知ってるけど。

「私、役作りに迷ってたの。千世子ちゃんに負けなくらい、強い怒りの感情が見つからなくて」

「……う？」

僕はその言葉に疑問を覚える。

だって、そんなはずはないんだから。

景のお母さんの葬式の日、あの男が現れた時の君は――

――そこまで考えて思い至った。景は忘れたふりをしているんだと。

「この前、『私の隣には光がいて欲しい』って言ったじゃない？」

「うん、杉北祭の時だよ」

「それで思ったの。光が私の隣からいなくなったら、私の味方じゃなくなってしまうたら……強い怒りを覚えるんじゃないかって。でも、光に対してそんな思いを持つのは嫌だった」

「……………別に、お芝居のためなんだから僕は気にしたりしないよ」

嘘だ

「私が嫌なの。光にはずっと助けてもらってばかりなのに、憎しみなんて持ちたくない」

「……………」

「なのに、光と千世子ちゃんの関係を知って、自分でも信じられないくらい腹が立った」

それは、嫉妬からくる怒りなのだろうか。

だとしたら、それほど嬉しいことはない。

僕も、俺も。

「……怖かったの。光と会った時、その気持ちを光にぶつけちゃうんじゃないかと思ったから」

「でも、そうはならなかった」

「うん。光が私の隣からいなくなる想像の怒りより、光が傍にいる喜びの方が上だった。だから、今はすごく安心してる」

そう言った景の表情は、とてもきれいだっただ。

そのきれいな表情が、僕への思いからきていると思うと本当に嬉しかった。

でも、その思いは嘘の積み重ねで形成されたものだという事実にもう目を逸らすことはできない。

この歪な関係を、このまま続けることはできないんだ。

「景はさ……僕が本当に百城さんと付き合うとか、景の傍からいなくなるとは思わなかったの？」

「……………何言ってるの？」

本気で意味がわからないといった表情で僕を見つめる景。

「光が言ったんじゃない。『僕は景の味方になって支える』って。光は絶対に私の傍からいなくなるらないし、ずっと私の味方でいてくれる――

——そうでしょ？」

景は一切ためらうことなくそう言い切った。

僕から目を逸らさず、自身の発言に対する疑いは微塵もない。

それこそが、歪であることの証あかしなんだろう。

『ごめんね、変なお願いしちゃって。墨字さんが依存気味だとか変なこと言うから』

雪さんが以前、僕の家に来て言っていたことが、今はすごく理解でききる。

僕の偽り続けた中途半端な態度が、景にそんな歪な感情を抱かせてしまった。

歪とはいえ、それは確かに相手を思ってたの感情なのかもしれない。でも僕は間違いなく、その感情に最悪の形で応え、いつか裏切り、最後に利用して取り返しをつかないことをしてしまう。

全て僕がいたことで始まったんだ。

僕が景を好きになってしまったから、景に近づいてしまったから、

思いを隠し続けてしまったから、僕という存在が生まれてしまったから。

全部、僕のせいだ——

どこかまだ迷いのあつた僕の心が決まる。  
もう、終わりにしなきゃいけない。

「景……」

僕は歩いていた足を止め、半歩ほど前にいる景を見つめた。  
それを不思議に思った景も足を止め、振り返り僕と向き合う。

「……光？ どうしたの？」

「好きだよ。景」

「っ!？」

僕の突然の告白によつて、景はめつたに見せない驚きの表情を見せる。

けれど、その表情はすぐ何かに気づいたといったもの変わった。

「あつ！ また冗談なんでしょ!! さすがに二回目は——」

「本気だよ」

景の言葉を遮つて、僕は真剣に景を見つめる。

「冗談なんかじゃないよ。ずっと、小さいころから景のことが好きだった。今度はあの時みたいに誤魔化さない。僕は景が好きだ」

ずっと言いたくて、胸が張り裂けそうになって、つい口からこぼれてしまふようで、それでも必死に仕舞い込んできた言葉を、我慢することなく思うがままつむぐ。

好きだ、大好きだ、どうしようもなく——君が好きだ。

「……………」

僕の思いは短い言葉にのせて全てぶつけた。

後は景の返事を待つだけだ。

待ちながら僕は思う。どうか拒絶してくれと。

もし景が僕の告白を受け入れなければ、まだ踏みとどまれるから。

「……光には傍にいて欲しい——でも、正直に言うと、それが恋愛感情なのかはよくわからないの」

景は僕と見つめ合っていた視線を外し、顔をうつむける。

しかしそれは、ほんのわずかな間だけ。

「けど——」

またすぐ力強い言葉と共に顔を上げ、喜びを隠しきれない笑顔で僕を見つめた。

「光からの告白、すごく嬉しい！ 今もまだドキドキしてるもの」

「それは……僕の告白を受け入れてくれるってことでいいの？」

「うん！」

はつきりと告げられた了承の言葉。この瞬間から僕と景は、僕がずっと望んでいた関係になれた。

なのにおかしい——僕の心がまるで遠くに行ってしまうような気がした。すごく、頭がボーっとする。

何も考えていないはずなのに、自然と言葉がこぼれだす。

「じゃあ僕たちはこれから恋人同士だね」

「そうね。そうなるのよね……でも、恋人同士って何をすればいいのかしらっ…」

「今まで通りの僕らでいいんだよ」

「今まで通り？」

「うん、今まで通り」

もう、今までと同じではいられない。

「僕はいつだって景を支えるし」

僕が景から離れても、景を支える人間は大勢いる。

「僕はずっと景の味方」

だから、俺は喜んで景の敵になる。

「それでいいんだよ」

それでいい。



僕はもう必要ない。

## 人でなし二人

『映画を観ることによって忘れたあいつへの憎しみを、映画を観ることによって思い出す』

『この家はとても良い。あいつの思い出ばかりだから』

千世子さんの演技を見て以来、景さんは役作りに悩んでいた。

羅刹女は私の作品にも関わらず、実際に私の羅刹女のように感じたのは千世子さんの方であり、私は苛立ちを隠せなかった。

壁に当たっていたサイド甲に光明が差したのは、私が景さんの家を訪れた時のこと。

実の父親への憎しみを思い出すことによって、景さんは羅刹女を演じると決めた。

必死に忘れたはずの忌まわしい記憶を使う——それは並大抵の覚悟ではないはず。

しかしそれ故に、効果は大きかった。

景さんの芝居はその日を境に一変。

王賀美さんは歓喜し、しかしその修羅のような芝居に戸惑いを見せる者もあった。

それを見て私は確信する——景さんは絶対に負けないと。

その上で、舞台をより良いものにするために、景さんには限界を超えてもらうつもりでいる。

そのための“仕掛け”を用意するために、今日はある人間を呼び出した。

場所は喫茶店。最初はBarに呼び出そうとしていたが、相手が未成年だったことを思い出し喫茶店に変えた。

約束した喫茶店に先に到着し、席に座って呼び出した相手を待つ。そう長い時間待つこともなく、相手は約束の時間前に喫茶店へとたどり着き、店の中へと入ってくる。

きよろきよろと店内を見渡し、私を見つけた少年はゆっくり近づくと、私の目の前の席に座った。

「お久しぶりです。光さん」

「ええ、お久しぶりです。花子さん」

仕掛けを用意するにあたって、一番重要なピースである彼――

園山光が微笑むような表情でこちらを見つめる。

芸能人顔負けの整ったその表情は、言葉にするなら完璧だった。

一切威圧感を与えることなく、相手から一番よく見られる角度で、それでいて嫌味がない。

この笑顔だけでコロッといつてしまう人間は多いだろう。

昔から変わることなく――いや、昔以上に磨き上げられている。

大切な相手の傍にいるために、何年も自身を偽り続けたが故に身に着けた力。

大したものだと、私は感心してしまう。

「花子さん？　どうかしました？」

「……いえ、なんでもありません」

少しまじまじと見過ぎてしまったらしい。

「そういえば、少し意外でした。まだ僕の番号、登録したままだったんですね。てっきり消したものだと思ってましたよ」

「……あの時は彼に裏切られ、やはり私は一人なのだと思います。……ただ、そんな中で唯一とも言える繋がりでしたから。傷のなめ合いだとわかっていても、切れなかったんです。切ってしまうえば、もう戻れなくなると」

「でも、日が経つにつれてその繋がりも消えていったじゃないですか」  
「無駄だと気づいたからです。私はすっかり怒りに呪われ、描けば描くほど現実への怒りが燃え盛る。戻れなくなる――そう思っていたのは間違いで、もうとつくに戻れなくなっていることに気づいてしまいましたから」

創る以外の人生を知らないから、私の人生は創り続けるしかない。どれだけ怒りに飲まれても、どれだけ自分の作品が嫌いでも、人でなしと言われようとも。

「今回、光さん呼び出したのは——」

「景を怒らせるためですか？」

「っ!？」

まるで私の思考を読んだかのように、光さんは私の言いたいことを先に口にする。

「だと思いました」

思い人を傷つけるような提案であることを理解していながら、光さんの柔らかく微笑む表情は変わらない。

最低だと罵られることも想定していた私にとって、その反応は少し拍子抜けでもあった。

「景から聞いたんです。芝居のために、父あの男の記憶を使うと」

「……………」

「だから、花子さんが僕を呼び出した時点で、その目的も大体察しがついてたんです。景の怒り感情を底上げするために、僕を利用したいんだろうなって」

光さんはこちらを見つめたまま淡々と口にする。

一切ブレることのない仮面が、内面を微塵も悟らせようとしらない。

そのため、光さんが今どんな感情を持って話しているのか見当もつかなかった。

笑っているのに何も感じない。

ここまでくると、もはやそれが不気味にも思えてくる。

「きれいごととは言いません。これは間違いなく景さんを追い詰めることに繋がります。ですが、舞台をより良いものにするためには絶対に必要なことなんです。どうか引き受けてもらえませんか？」

正直に言うと、景さんを心の底から怒らせるだけならば、そのきっかけが光さんである必要はない。

きつと私でも景さんの感情を底上げする爆弾になれる。

ただ、私がそうなるよりも、光さんが爆弾となる方が、景さんの心

身はより羅刹女へと近づく。

それこそ、舞台が無事に終わる保証ができなくなるほどに。

それは想像ではなく確信。

私が言うべきことは言った。

後は光さんの返事を待つ。

「……………」

光さんは視線を私から外し、うつむくようにして止まった。

そこから三十秒ほど固まった後、ようやく口を開く。

「最近、自分の意識が遠くに感じる感じがよくあるんです」

それは返事ではなかった。

独白のようなそれは、まるで罪の告白のようにも聞こえる。

「僕が笑って、僕が歩いて、僕が話して……なのに、それをまるで遠くから見ているような。僕はそこにいないような……だから、これは想像でしかないんですけど、僕は消えるんだと思います」

その瞬間、光さんをまとう空気が変わったのを、私は肌で感じた。人畜無害だったはずの目の前の少年が、こちらを捕食する肉食動物に変化する——そんな絵が頭の中で浮かぶ。

王賀美さんが人を飲み込むような荘厳な景色だとするならば、目の前の少年は全てを焼き尽くす炎だ。

それこそまさに、私が描いてしまう炎そのもの。

近づけば火傷では済まないのが分かっているけど、どうしようもなく目が離せない。

私はこのとき初めて理解する。

これが本物の園山光なのだ。

「花子さんの話、受けますよ。いずれ消えるであろう僕が生まれたのは、きつとその時のためだから」

仮面を脱ぎ捨てた光さんの見せる笑顔は、最初に見せた笑顔とは似ても似つかないもの。

体が身震いするほどのそれを正面から受けながら、それでも私は光さんから目を逸らせない。

きつと一度でも彼と関わってしまった人間は、灰になるまで離れる

ことはできないのだろう。それが自分自身であつても。

「私が言えたことではないのかもかもしれませんが……あなたも、関わる人間すべてを傷つけながら生きることしか、できないのかもしれないね」

「ええ、それは僕が一番よくわかつてます。間違はなく、誰よりも……。そう言えば昔、花子さんに言われたことがありますね。僕と景の関係は、どちらかが不幸になることでしか成立しないって。でも、それは違った」

話しながら、いつの間にか仮面を被り直していた光さんは、どこか悲し気に笑いながらつぶやいた。

「どっちも不幸になって終わる——それが、僕と景の結末ですから」

宝石のように綺麗な顔をしていながら、腹の中に禍々しい炎を宿す景<sup>彼女</sup>さんと千世子<sup>たち</sup>さん。

それに負けない禍々しい炎を宿す一人の少年。

不謹慎なのは分かっているけど、面白いと、そう思ってしまう私<sup>が</sup>いた。

役者の純粹な意地と意地がぶつかり合う舞台『羅刹女』。

人として外れた道を選ぼうとも、舞台をより良いものに仕上げようとする演出家。

恩人の残した劇団を守るために演じる役者。

好みの役者のステップアップを企てるプロデューサー。

10年という長い年月の付き合いに、終止符を打とうとする一人の

少年。

様々な人間の、様々な思いが混じり合い、舞台はついに上演をむかえる――

## 本来の形

舞台『羅刹女』、公演日初日

天才美少女として話題沸騰中の少女が主演、言わずと知れた世界的大スターが助演の「サイド甲」は当然のように満席。

敏腕プロデューサーの策略により、舞台の規模とは思えないほど世間の注目度も高い。

舞台に関わるものだけでなく、多くの業界関係者もこの舞台を見ようと上演開始を待つ。

そんなサイド甲の上演が始まるまで、あと数分に迫ったころ――

次の日が上演初日であるサイド乙の出演者も控室に集まり、舞台の始まりを待っていた。

そしてそこには、終に預けられた夜風景の弟妹、ルイとレイの姿も。

「おねーちゃん、昔に戻ったみたいなの」

「昔？」

不安そうな表情で告げるレイに、サイド乙の助演である明神阿良也が不思議そうに聞き返す。

「お母さんが死んじゃった時の感じ……笑っていても冷たい感じ」

「……………」

どこか抽象的なレイの言葉に、事情を深く知らないサイド乙の出演者は誰も言葉を返せない。

レイの説明した夜風の表情を、鮮明に思い描けるのは弟妹を除けば、幼なじみの少年くらいであろう。

これから始めるサイド甲の上演に対する不安要素だけが、サイド乙の出演者の中で詰みあがっていく。

「せっかく光くんと付き合うことになったのに、最近ぜんぜん会ってないもんね」

「ルイ！ それは秘密だって言ったのに！」



「あつ！」

家族内での秘密にしていた夜風景の交際関係を思わず暴露してしまいうルイ。

その暴露に真つ先に反応し、なおかつテンションが上がったのは柀だった。

「えっ!? けいちゃんと光くん付き合っただの!？」

『好きです』

『好きですよ、景のこと』

『いえ、異性としてです』

以前、光から景に対する好意を聞いていた柀としては、自分のことではないのに嬉しくなる。

客観的に見て、夜風からも好意の矢印が向いているのは明白だったため、なおさらその喜びは大きい。

「おい、なに興奮してんだ」

「あ、すいません……」

上司である黒山に咎められ、柀は落ち着きを取り戻す。

とはいえ、その心中は二人を祝福する気持ちであふれている。

しかしその祝福は、二人の関係を上辺うわべでしか知らない故ゆえのもの。

園山光と夜風景——二人の関係を、その歪みを知っている人物の心中は、とても祝福できるものではなかった。

光の気持ちは知っていた。直接その耳で、夜風に対する好意を聞いたのだから。

しかしその気持ちを景に打ち明けるつもりがないことも、話の過程で百城千世子は聞いていた。

気持ちを打ち明けるということは、思い人を傷つけることと同義だから——と。

「ねえ、最近の光くんの様子、どんな感じだったかわかる？」

千世子からの唐突の疑問に、ルイとレイは戸惑いを見せる。

ちなみに周りの人物——特に柀は、千世子が光のことを慣れたよう

に下の名で呼んだことに驚きを隠せない。

「えつと……別にいつも通りだったと思う」

「うん……あ、でも今日の朝に会った時は、ちよつと寂しそうだったかも」

レイの言う寂しそうという言葉に、千世子は心当たりがあった。

光が関係を断ち切るために千世子のマンションを訪れたあの日、その時も寂しそうな表情をしていたのだから。

なにかが起こる——漠然としたサイド乙の不安はさらに大きくなり、解消されることなく開演を迎える。

#### 一方同時刻、サイド甲の控室

開演が間近に迫った控室は緊張感が増している。

それでも、出演する役者たちの姿には落ち着きがあった。

舞台衣装に身を包み、山野上花子の前に並ぶ夜風を含めた出演者たち。

山野上の頭の中だけにあった羅刹女の登場人物たちが、実際に目の前に存在している。

そのことに山野上は涙を浮かべるほどの感動を覚えた。

「私の羅刹女と悟空たちがここに……」

「おいおい泣くなよ花子さん。演出家は舐められたら終わりだぜ」

「はい、すみません。私たちの仕事はこれからですもんね」

「……?」

山野上の言葉に疑問を持ったのは王賀美だけでなく、出演者全員が同じように疑問を感じていた。

舞台が始まるまであと10分もないなか、今さらできることなど知れている。

この状態で演出家にできることなど、ありはしないはずなのだから。

さらに疑問なのは、私たちと山野上が言ったこと。

山野上の言葉の真意を誰もが理解できないでいる中、山野上はそのまま言葉を続ける。

「私は創作に生かされてきました。だからこの世界では誰にも負けたくない」

「……？」

「何の話だよ」

誰も山野上の話についていけず、王賀美が口を挟むも、山野上は話を止めない。

「たとえ相手が著名な映画監督だろうと、トップ女優だろうと関係ない。負けたくないんです」

そこで山野上は一度言葉を止め、スイッチが入り高い集中力を維持している夜凧に顔を向ける。

「それはあなたも同じですよね景さん」

「……………」

急に話を振られたことに疑問を思いつつも、夜凧は頷いて肯定の意を示す。

「だから、あなたには辛い思いをしてもらうことになります。入ってきてください」

その言葉は出演者の誰かに向けたものではなく、控室の扉に向かって投げかけられた。

そして間を置くことなく、ガチャリと音がしてその扉が開かれる。

山野上に呼ばれ、先ほどから扉の前で待機していた少年は控室の中へと足を踏み入れる。

「……………光？」

さも当たり前のような顔で、山野上の隣まで歩いてきたのは、夜凧の幼なじみであり、最近付き合いだした光だった。

このことに夜風は疑問を浮かべると共に、山野上に対する怒りが生まれる。

なぜ山野上が光を呼んだのかわからない。

もしかしたら、激励のつもりで呼んだのかもしれない。

だとしたらそれは、夜風にとって余計な行動でしかない。

ここ最近の夜風は、親しい人間との接触を必要最低限に抑えていた。

親しい人間と会うことで浮かれてしまい、父親への怒りが薄れ、羅刹女の気持ちから遠のくのを嫌ったからだ。

もちろん、その筆頭である光とも言わずもがな。

付き合いだての一番楽しい時期であるにも関わらず、芝居を第一に考えて距離をとることを決め、光もそれに理解を示していた。

夜風にとつて光との記憶は、いつでも自分を支えてくれた幸せの記憶だったから。

だからこそ、山野上が光を連れてきたことに夜風は怒りを覚える。

せつかくの役作りを壊すつもりなのかと。

しかしそんな夜風の怒りは杞憂であり、結果として、光の登場は夜風の羅刹女をさらに深いものへと昇華する。

「景……実はずっと、話したいことがあったんだ」

光は夜風へと近づき、目の前まで移動する。

優しく、いつも通りの笑顔で語り掛ける光に、夜風は羅刹女の怒りが溶けかけるのを感じる。

「光……ごめんさい、後じゃダメかしら？　舞台が終わった後に――」

「ごめん、どうしても今じゃなきやダメなんだ」

もはや開演まで5分もない。そろそろ夜風も移動しなければならぬ時間。

にも関わらず、光と夜風の二人が生み出す空間に、周りの者たちは口を挟めない。

ただ王賀美だけは声をかけようとするが、山野上がそれを手で制する。

これは舞台にとって必要なことだから、と。

「景、実は——」

少年は告げる。

誰よりも大切な幼なじみとの関係を、10年以上続くその関係を、完全に断ち切るために。

「実は——僕はずっと、景のお父さんと連絡を取り合ってたんだ」

「……………は？」

一瞬、夜風の頭が真っ白になる。

きつと激励の言葉をかけてくれるのだろうと考えていた夜風にとって、光の言葉は想像もできないものだった。

そんな夜風に対し、光はたたまみかけるように続ける。

「景のお父さんがいなくなったあの時も、実は別の女の人とずっと一緒に暮らしていた時も、景のお母さんの葬式の時も、僕はずっとあの人の居場所を把握していた」

「ちよっ……………！ 何言ってるの光、こんな時に冗談なんて——」

「冗談じゃないよ」

光の目は真つすぐ夜風を捉え、いつの間にかその表情から笑顔が消えていた。

「いつまで、目を逸らすつもり？」

光のその言葉は、まるで体内に毒が広がるように、なぜか夜風の奥深くに染みわたっていく。

「本当は気づいてるんでしょ？ 自分が、ずっと見えないフリをしてきたことに」

やめて——

「おかしいと思わなかった？　ずっと家に帰ってこなかったあの人が、都合よく葬式の日に現れたことを」

やめて、やめて、やめて——！

その言葉を聞いてしまえば、もう戻れなくなる。

それを理解してしまった夜風は、思わず耳を塞ぎたくなる衝動にかけられながら、なぜか動くことができない。

そんな夜風に対して、光は無慈悲に語り掛けた。

「景のお母さんが亡くなったことも、葬式のこと、全部僕があの人に伝えたんだ。映画を観ることで、感情を封じ込めようとする君の隣で」

光が言葉を言い切ると同時に、夜風の怒りが爆発した。

勢いよく夜風の右手が振り上がり、そのまま光の顔に向かって振り下ろされる。

しかし——

『僕は景の味方になって支える』

『好きだよ。景』

「ッ……!?!」

脳裏に浮かぶ光からかけられた優しい言葉の数々。

10年にもおよぶ光との関係。

それが夜風の右手を、光の左頬に当たる直前で止める。

——違う、光がそんなことをするはずがない。あの大好きな光が——

わずかに生まれた迷い。

だが光はそのわずかな迷いすらも断ち切りにいく。

「なんで止めたの？　もしかして、まだ僕のことを信じたいと思ってる？」

まるで拒絶するような冷たい声。

もうこうなっては止まらない。

なんとか繋がっていた最後の堰せきが切れたことで、どうしようもなく

怒りがあふれて暴走していく。

「フーッ、フーッ、フーッ……！」

夜風の呼吸は荒くなり、手は震え、顔からは嫌な汗が滴り落ちる。殺してやる——そう聞こえてくるほどの鋭い視線が、光に向けられていた。

それを受けた光は笑う。

しかしその笑顔は先ほどのような優し気なものではない。

ひどく獰猛な、本能のままに浮かべる歓喜の表情。

景が怒り、光が笑う。

偽り続けた二人の関係が、10年の時を経て、本来あるべき姿に戻った瞬間だった。

## 羅刹女 サイド甲①

お母さんがまだ生きていたころ、いつの日だったか、めったに怒りを見せることのない光が、声を荒げて怒っていたことがあった。

スマホに耳を当て、誰かと通話しながらイラついた表情を浮かべる光の姿があまりにも珍しくて、今でも鮮明に思い出せる。

「——はずつと帰ってくるのを待ってる！ あんたはいつになったら

——！」

「光？」

「っ!？」

私が話しかけたことで、あからさまに焦った表情を浮かべた光は、すぐさまスマホをポケットへとしまう。

「誰と話してたの？」

「友達だよ。遅刻癖のすごい友達でさ、つい大声出しちゃった」

そう言って笑う光は、すでにいつもの優しい光だった。

私は特に追及することもなく、光の説明に納得してしまう。

今思えば、あの時に目を逸らさずちゃんと話せていたら、結果は変わっていたのかもしれない。

その時だけじゃない。私は今まで何度も目を逸らしてきた。

初めて千世子ちゃんの映像を見た時、なぜか優し気に笑う光の姿と

重なった。

けど、私はそれを深く考えなかった。

何度か本当の表情を見た時、気のせいだと自分に思い込ませた。

幼いころと今の光の違いを、成長だと考えて向き合わなかった。

光が何かを隠していることは、心のどこかで気づいていた。

でも私はそれを指摘できなかった。

指摘してしまえば、光が私の隣からいなくなってしまうような気がしたから。



けれど、その考えが間違っていたからこそ、私と光の関係は決定的に変わってしまった。

変えたくても変えられない過去を後悔と呼ぶのなら、それらは間違いなく後悔の記憶——

『景さん、心中お察しします。でも勝ちたいんでしょう?』

花子さんに煽られるようにして私は楽屋を飛び出し、舞台へと足を進める。

私の心を占めるのは、抑えようのない幼なじみへの強い怒り。

今すぐにも戻って問い詰めてやりたい。

それでも、心の奥底にある千世子ちゃんに勝ちたいという思いが、私の足を前へと進ませる。

なんで、なんで、なんで、どうして——!

信じられない。信じたくない。あんなの光じゃない。

私は必死に光の言動を否定できる理由を探す。

そんな中で私はあることを思い出した。

それは、光を連れてきたのは花子さんだということ。

そうよ! きつと光は花子さんをお願いされて、私を怒らせるようなことを——

『いつまで、目を逸らすつもり?』

——違う。

『本当は気づいてるんでしょ? 自分が、ずっと見えないフリをしてきたことに』

違う違う違う!!!

光の言った言葉が、私の中で何度も繰り返される。  
怒りで思考がまとまらない。

落ち着け、夜風景。

光の言葉が事実かどうか、それは今どうでもいい。  
大切なのは一つだけ。

『おとーさんすぐ帰ってくるから！ だから大丈夫だよ！』

『…景、ごめんね』

ふと、病院のベッドで無理して笑顔をつくり、私に謝るお母さんの  
姿を思い出す。

『景のお母さんが亡くなったことも、葬式のこと、全部僕があの人に  
伝えただ』

「っ……………」

落ち着け。大切なのは一つだけ。

この「怒り」を羅刹女に使うこと。

飲まれるな。利用しろ。私は役者だ。

—————

『ああ、腹が立つ。腹が立つ』

それが現れたことで、観客は思わず息をのみ、目を合わせないように顔を背けた。

暗闇と静寂の中で、ライトアップされたその姿と、異様に響くその足音が、観客を恐怖で支配する。

まるで心臓を直接握られているような、生死がかかった生物の根源的な恐怖。

そしてその恐怖を生み出しているのは、飲み込まれそうになるほどの怒りを必死に抑えつけ、その怒りを利用することで羅刹女を演じる夜風景。

自分が神だと言わんばかりの芝居は、観客が役者から目を背ける異常事態を生み出していた。

『ああ、この怒りどうしてくれよう』

客席から始まったその歩みは舞台へと到達し、ついにその幕が上がる。

幕が上がると、そこには山野上によって描かれた燃え盛る炎の絵。暴力的なまでに荒々しく燃えるその炎は、まさに今の夜風の心情を表しているようだった。

そんな夜風を、舞台裏からモニターで見つめるサイド甲の関係者。

反応は様々だったが、ほとんどが不安と戸惑い。

しかしその中で、王賀美と光だけが嬉しそうに笑っている。

「見事だな。あの精神状態でよく演じられている」

抱く感情は違えど、王賀美のその言葉と思いはみな同じ。

怒りに飲み込まれそうなギリギリの精神状態で、なんとか芝居をコントロールする夜風を共演者たちは称賛する。

しかしこのままでは限界が近いことも当然理解している。

沙悟浄役である朝野市子は、夜風をそのような状態にした張本人たちを今すぐ糾弾してやりたい気分だった。

ところがその張本人たちは、まるで慌てることなく舞台の成り行きを見守っている。

「正直、意外でした」

己の怒りの体現する夜風を見て、山野上は隣にいる光へと語り掛ける。

「光さんに向ける景さんの信頼は相当なものでした。だからこそ、用意した爆弾が不発に終わるのではないかと考えていたんです。光さんの言葉を冗談だと考え、本気にしないのではないかと」と

山野上はずっと頭の中にあつた懸念を光に告げる。

「しかし景さんは疑うことなく光さんの言葉を信じた。今回の策を考えるとき、言葉だけでいい——そう言ったのは光さんです。光さんは、こうなるとわかつていたんですか？」

「ええ、まあ……」

目線はモニターに向けたまま、光は山野上の質問に答える。

「景は……ぬけてるところはありますけど、それほど鈍いわけじゃないんです。だからきつと……僕の欺瞞にも気づいていたんだと思います。無意識に気づかないフリをしていただけで」

光がそのことに気づいたのは、百城千世子のマンションを訪れ、その帰り道で告白したあの日。

お互いが歪んでしまっていることに気づいたあの日から、光は覚悟を決めていた。

大切な幼なじみと決別する覚悟を。

「おそらく今、景さんは父親への怒りと同時に、光さんへの怒りも強く持っているはずです。その怒りのほどは、正直私にも想像できません。ですが、私が用意した仕掛けで生じるはずだった怒りよりも、激しく燃え盛っているのは確かです」

モニター越しでもその怒りが伝わってくる夜風の姿を見て、山野上は冷や汗を流しながら告げる。

山野上のその言葉通り、夜風の怒りは本来得るはずだったそれよりも激しいものだった。

『愛する子をも奪われ…、それでも夫は帰って来ぬ…。ああ、腹が立つ。腹が立つ』

信じていた。

頼りにしていた。

好きだった。

積もりに積もった幼なじみへの好意が、嫌悪へとひっくり返って行く——10年分の記憶と共に。

ふとした表情が、かけられた言葉が、ささいな優しさが、その全てが怒りに繋がる。全てが怒りに導かれていく。

——あの時も、あの時も、あの時も!!!

ずっと笑顔で騙っていた。

ずっと隣で裏切っていた。

ずっとあざ笑っていた。

一度そう考えてしまえば、もう止まらない。

とめない怒りがあふれ出し、その心をドス黒く覆っていく。

怒りのその奥底で、涙を流しながら。

ほんの数十分前まで、この世でもっとも信頼していた愛しい人物は、この世でもっとも憎い存在へと変貌していた。

禍々しい目をした女が、舞台を楽しみにきた人々に、恐怖と不安を与える異常事態。

そんな夜風のホラーショーと化していた舞台は、王賀美の登場によつて転機を迎える。

『おい！ 俺だ！ 孫悟空だ！』

羅刹女が凍り付かせた空気を一変させるほどの存在感。

それが観客の恐怖をとばし、高揚をうえつける。

王賀美演じる孫悟空は、恐ろしい存在感を放つ羅刹女と渡り合つて

いた。

しかし羅刹女が動きを見せれば、またすぐに高揚から恐怖へと引き戻される。

例えるなら、夜凧と王賀美による観客の奪い合い。

作品を味方に付けて戦う夜凧と、観客を味方に付けて戦う王賀美。

休む間もない正の芝居と負の芝居は、まさに手に汗握る攻防。

天才二人による贅沢な舞台に、観客の心は完全に引き込まれる。

そんな観客を含めた舞台の動きを見て、プロデューサーの天知は感心するようにつぶやく。

「感慨深いものがあるんじゃないですか社長」

「……そうね」

その言葉に反応するのは、天知の隣で舞台を見つめるスターズ社長の星アリサ。

彼女は天知の言葉に同調しつつも、どこか悲し気で複雑な表情を見せていた。

「……夜風景。恐ろしいのはもはやあの芝居だけじゃない。迫真の芝居、強い存在感、そして驚くべきは我を保ち、芝居をコントロールしている強い精神力。少し前までの彼女なら考えられない。並の技術じゃないわ——」

そこで一度言葉を切り、わずかに声のトーンを落とした状態で続ける。

「このまま終幕まで演じられれば……だけど。今の状態は余りにも危険すぎる。一体何があればあそこまで……」

「……先ほど、部下から連絡がありました。サイド甲の控室に、とある少年が入っていった、と」

「……？」

会話の流れを無視したような天知の突然の言葉。

星アリサにはその言葉が、自身の口にした疑問の解答になっているとはとても思えなかった。その少年の名を聞くまでは――

「少年の名は園山光。夜凧さんの幼なじみです」

「……そう、あの子が来てるのね」

「おや、ご存知でしたか」

アリサの脳裏に思い浮かぶのは、全てを焼き尽くすようなオーラを持つ少年の姿。

少年のことは、千世子から軽く話を聞いただけ。

それでも、アリサの記憶には強く刻まれている。

「あの少年は劇薬です。私ですら使うのをためらうほどの」

「それを、山野上花子は使ったと」

「ええ、私の嫌いなアーティストは、ためらいなくその劇薬を使ってしまふ。その先で待ち受けるリスクなど考えもせず」

「……不安になる気持ちもわかるけど、こうして舞台が始まってしまった以上、私たちにできる事はその結末を見守ることだけよ」

「ですね」

アリサの言葉に、天知は笑顔のまま肯定し、舞台の行方を見守る。

最悪の状況――舞台が台無しになってしまうことも、視野に入れないがら。

## 羅刹女 サイド甲②

夢のような、時間だった。

夢にまでみた、時間だった。

ずっと望んでいた、瞬間だった。

景がその激情を僕だけに向ける。

抑えきれない怒りを宿し、僕と向き合う。

もはや何度頭の中で想像したかわからない妄想が、現実となって叶ったんだ。

本当なら、僕は申し訳なさそうな顔を作らないといけないのに、俺は笑ってしまふ。

本当なら、僕は罪悪感を持たなければいけないのに、俺は歓喜してしまふ。

——僕は？ ——俺は？

ああ、そんなのもうどうだっていい。

今はただ、この幸福な時間を余すことなく享受しよう。

きつとこの先の人生で、今日以上の喜びを感じることは絶対にならないのだから。

舞台は進んでいく。

今にも壊れてしまいそうな綱渡り状態ではあるが、素晴らしい舞台であることは確かだった。

怒りに燃え盛る景と、互角に渡り合う王賀美さん。

しかしそれは王賀美さん演じる孫悟空が、牛魔王に変身したことで

失速する——かと思いきや、自ら悪役を演じることで、羅刹女を主人公へと昇華させる。

景のその怒りを、悲しみを、観客が理解したところで舞台の前半が幕を閉じた。

本当に素晴らしい舞台だと思う。

それを舞台袖から見れる機会なんて、もう一生訪れることはないは



ずだ。

けど今は、そんなささいな幸せがどうでもいいと思えるほどの瞬間が、僕に訪れようとしている。

前半の幕が下りたことで、舞台袖へと下がってくる景と王賀美さん。

「夜風……！」

「夜風さん」

景の共演者の人たちが、心配そうに景へと声をかけるが、王賀美さんがそれを制する。

「大丈夫だよあいつは」

そう言って共演者たちに声をかけた後、王賀美さんの視線は僕に向いた。

「だがお前は外にいろ。あいつを刺激する。ギリギリのところまで演じているんだ、あいつは」

外にいろ？——ハハ、そんなもつたいないこと、できるわけがない。

動かない僕を見て、王賀美さんは力づくで外に出そうと近づいてくるも、花子さんが間に入ることでそれを阻止する。

「おい」

「ダメです。まだこの舞台に、彼は必要ですから」

王賀美さんと花子さんが言い争っている間に、景は僕の目の前まで近づいていた。

怒りの炎を宿したその瞳が、僕だけに向けられる。

さらに景は僕を目の前にしたことで、その怒りが加速度的に激しくなっていくのを感じる。

僕と景が向かい合ったことで、舞台袖は静まり返り、王賀美さんと花子さんも言い争いを辞め、僕たちに視線を向けていた。

景は僕を睨みつけながら、ゆっくりとその口を開く。

「ねえ、教えて光。どんなつもりで私に告白したの？」

ドクンと、心臓が跳ねるのを自覚する。

「どんなつもりで、私の味方だなんて口にしたの？」

景の一挙手一投足が、景の口から紡がれる一言一言が、そのままたきさえもが、僕の心を躍らせる。

「どんなつもりで、ずっと私の隣にいたの?」

かつてこっちに向けて欲しいと望んだ瞳が、たしかに僕に向いていることで、歓喜の感情に飲み込まれていく。

ダメだ、こんなもの、我慢できるわけがない。

僕は自身の欲を抑えきれず、花子さんとの打ち合わせになかった言葉の口にしてしまう。

「どんな答えだったら、景は満足するの? 景が望む言葉をかけてあげるよ。僕は景の味方だから」

満面の笑みでそう告げると、ギシリという歯ぎしりの音がハッキリと僕の耳に届く。

「フーッ、フーッ、フーッ……!」

息が荒くなり、握ったその拳は震えている。

「落ち着け景、心を乱すな。せつかくここまできたんだ」

王賀美さんは景に心を静めるよう促すが、景は僕から目を逸らさない。

大好きな、10年間思い続けた相手が、僕だけにあふれんばかりの感情をぶつけている。

殺してやると言わんばかりのその表情を見て、笑顔を隠しきれない。

好きだ。大好きだ。どうしようもなく愛してる。

異常だとか、歪んでいるとか、そんなことはどうだっていい。

これが僕だ。これが俺だ。それを偽る必要もない。

解放されるとは、きつとこういうことを言うのだろう。

自分にとっていい事をしてもらえたら、その喜びを伝えるのは当たり前のことだ。

だから僕も、このこらえきれない喜びを君に伝えよう。

それがきつと、人間らしいってことなのだから。

—————

正直なところ、共演者たちは詳しい状況を完全につかめてはいなかった。

猪八戒役の烏山武光もそうだ。

わかっているのは、突如現れた光という少年に対し、夜風が並々ならぬ怒りを抱いているということ。

その怒りを景が必死に、羅刹女に利用していること。

しかしそんな景の限界に近いこと。

そして最後に、近くにいるだけで震えるほどの圧を放っている夜風相手に、光という少年が正面から対峙していること。

これが王賀美なら武光も納得できただろう。

しかし光はただの一般人。そんな一般人が夜風と対等に向かい合っているという事実が、武光には信じられなかった。

その王賀美ですら、夜風を前にして限界ギリギリで演じているのだから。

そのため武光は、光を連れてきた張本人である山野上にその正体を尋ねる。

「花子さん、彼は一体……」

「そうですね。王賀美さんは、自分が自分であり続けながら、プライドを持って自分を愛している怪物です。一方で光さんはまさにその真逆。自分であることを押し殺し、誰よりも自分を嫌う怪物です。きっと、今の夜風さんと本当の意味で向き合うことができるのは、この世で光さんただ一人でしょう」

無名の、それも俳優ですらない少年を、王賀美と同列のように語る山野上。

それを聞いた武光は、光に対する疑問をさらに深めただけだった。

—————

『どうして我慢するの?』

あの日の私が、私に語り掛ける。

人生で一番悲しくて、人生で一番怒りを抱いた日の私。

忘れたくて忘れていた、お母さんの葬式に出ていた時の私。

『あいつが、あの男とその男が、お母さんを悲しませたのよ』

私は振り返って、かつての私を見つめる。

いや、これはかつての私なんかじゃない。

今も確かに、私の中にいる私だ。

『何もかも壊したい。そう思ったから私を呼んだんでしよう。せつかく忘れていた私を』

「……違うよ」

私の言葉を、私はハッキリと否定する。

「私はもう役者だから、お芝居のためにあなたを呼んだの。激情に身を任せるためじゃない」

『……でもきつと思ってるよ、お母さんも。腹が立つ、腹が立つ——つて』

怒りに染まったその眼は、真つすぐ私を捉えている。

言い訳などさせるものかと、私を見据えている。

『こんな舞台どうでもいいじゃない。全部投げ出して、あんな男滅茶苦茶にすればいい。私の悲しみを誰よりも知っているくせに、今もヘラヘラ笑ってるんだよ?』

「つ……」

『ほら、我慢できないんでしょ? 許せないんでしょ? それとも、この期に及んでまだ信じるつもりなの? まだ味方だと思ってるの?』

まだ、愛する気持ちが残ってるの?』

かつての私の言葉に、私は言い返すことができない。

憎くて仕方がないはずなのに、まだ私の心の奥底には、光が好きだ

という気持ちが残っていたから。

そんな未練がましい自分にすらも、嫌というほど腹が立つ。

『衝動に身を任せればいい。激情に身を委ねて、全部壊してしまえばいい』

「私は役者なの！ 言うこときいて！」

『知らないよそんなの!!!』

—————

夜風は光との距離を詰め、その胸ぐらを掴み上げる。

「夜風……!! やめ……!」

手を出すと考えた武光は止めようとするも、その声は途中で途切れる。

夜風は掴み上げただけで、手を出そうとはしなかったからだ。

掴み上げた手は震え、いまにも暴走しそうな怒りを役者というプライドで抑えつける夜風。

顔を合わせれば嫌でも思い出してしまう二人の記憶も、今はただ利用するだけ。

二人の顔が触れ合いそうになるほど近づき、その状態で夜風は光に対しハッキリと宣言する。

「引っ込んでいて。あなたが何を考えていようと関係ない。私は最後まで演じるだけだから」

そう言い切ると夜風は手を離し、光の隣を通り過ぎていく。

共演者たちのいる位置からは、二人の表情は見えない。

しかしこの夜風の行動が、共演者たちの心を一つにした。

怒りに抗い、演技を止めない夜風の強さに全員で報いようと――

そして舞台は、全てのキャストが登場する後半を迎える。

## 羅刹女 サイド甲③

『俺たちは皆、腹の中に炎を宿している!! これは外に出さねえとやべえもんだ! さあ始めようか!! 殺し合いだ!!』

羅刹女が、孫悟空が、猪八戒が、沙悟浄が。

その全員が役にのめりこみ、戦いの中に喜びを感じている。

敵も味方も一步も引かない勝負。それが観客の心を惹きつけていた。

景や王賀美さん、ベテランの白石さんは言うまでもない。

最初は芝居の小さかった武光さんや朝野さんまで、人が変わったかのような演技を見せている。

舞台袖にいた僕には、それが景の影響を受けたものだとかわかっていなかった。

「やっぱりするいな、景は」

つい先ほど、正面で向かい合っていた景が遠くに感じる。

舞台の終わりが、僕と景の関係の終わり。

それは決意とか義務とかそういういたものではなく、確信めいた予感だった。

どちらかが望む望まないにかかわらず、自然とそうなるのだろうと。

舞台のこの後の展開は、羅刹女が死闘の末、すべてを許し自ら火焰山の炎を鎮めるというもの。

『許し』とも『諦念』とも取れる感情の変化が求められるシーン。

狂気に身を委ねた今の景が演じるのは、簡単なことではないと僕でも理解できる。

でも、きつと景なら大丈夫だ。

怒りの炎に呪われようとも、景ならその先に行けると確信しているからこそ、花子さんの話を受け入れたのだから。

そう考えていた僕は、この時あることに気づく。

「……ああ、そうか。この羅刹女は、花子さんなんだ」

僕のその言葉に、花子さんは目を見開いて驚くが、すぐに納得するような表情を浮かべる。

「そうですね。私の事情を全て知っている光さんなら、それにたどり着いてもおかしくはない」

「あの日の——いや、あの日からの続きを、景にたくしたんですか？」  
「……ええ、まったくその通りです。羅刹女を演じるということは、私を演じるということだから」

花子さんは目を細め、舞台上で戦いに身を委ねる景を鋭く見つめる。  
「私には描けなかった景色を、もう一度羅刹女の手によって。たとえ何を犠牲にしても、もう一度」

花子さんのその発言は、舞台を私物化しているともとれる発言だが、僕にそれをどうこう言う権利はない。

僕だってその私物化に一枚かんだ共犯者なのだから。

『私は恐ろしかったのだ!! この怒りを失えば一体、私に何が残るのかと』

そのセリフを告げる羅刹女景の姿が、花子さんと重なる。

怒り続けることで自意識を保ち、もはやそれが自身の自己同一性アイデンティティになっっている。

きっと花子さんほど極端じゃなくても、そんな人間はどこにでもいる。

そんな平凡な人間が、羅刹女であり花子さんなんだ。

だからこそ、怒りを失うことを無意識に恐れる。

自分がなくなってしまうかもしれないと、そう思っているから。

景が今日まで花子さんのようにならなかつたのは、ただ目を逸らしていたからにすぎない。

今この日この時、初めて景は自身の怒りと向き合い、乗り越えようとしている。

がんばれ——なんて言う資格は僕にはない。

だから、せめて心の中だけで願うのを許してほしい。

君が前に進めることを。そして、僕と決別することを。

「……………」

『許せるものなら、許してごらんよ』

孫悟空たちとの戦闘を終え、舞台袖から出てきた三蔵法師を私は睨む。

その三蔵法師の先には、舞台袖に立つ光の姿があった。

許す……こいつを、何のために？

裏切られて、嘘をつかれて、笑われて。

それでも許すのは、お芝居のため？

ああ……

「……………」

その瞬間、私の頭から羅刹女や舞台のことが全て消えた。

理性が衝動的な怒りに飲み込まれ、持っていた芭蕉扇ばしやうせんを光へと投げつける。

さらにそのまま舞台袖へと走り出し、光の胸ぐらを掴んでそのまま押し倒す。

かつての日のように、倒れた光の上にまたがるが、今度は止めない。まるであの日の続きをするように、私は光を——

——今、何をしようとした私。

私の手には芭蕉扇がある。

立ってる場所も舞台袖ではなく、ちゃんと舞台の中央に立ったまま。

私はどのくらいの間、あんな事を考えていた？



急げ、立て直せ、今すぐ、私は羅刹女だ。

——そうやって、みんなが望むまま動くの？ 人形みたいに——

『私を許せるのか！』

許さないといけない。

——許せるわけがない——

『私を許してみろ！』

許す必要がある。

——許すわけがない——

『私を許すと言ってみろ!!』

言わなきゃいけない。

——言うわけがない——

光と過ごした10年間の全てが、憎しみと怒りであふれかえっている。

それをどうして許せるなどと言えるのか。

許さない、許さない、許さない。

皆が私の芝居を楽しんでいる。私がどんな想いをしているかも知らずに。

私は役者である前に、夜風景なのに。

誰かがずっと怒っていてあげないと、お母さんが報われない！

絶対に私は——！

『あなたを、許します』

怒りに顔をゆがめた三蔵法師が、私を許すと告げる。

この時の私は、演技などではなく、本気でその言葉と表情に動揺していた。

『立ちなさい3人共。倒されたふりをし、彼女を殺めるつもりでしたね…。それは許しません』

その言葉に倒れていた孫悟空たちが立ち上がる。  
終演まであとわずか。それでも私は、心の底から許せるとは到底思えない。

『火焰山の炎を鎮めてくれ、後生だ』

語り掛けるように観客を惹きつけ、孫悟空が言う。

『オイラはまだ負けてねえぞ！ かかって来い羅刹女!!』

床を踏みしめ、舞台袖の光の姿を遮るように、猪八戒が言う。

『さあ羅刹女』

孫悟空が私の肩を掴み、目を合わせて必死に懇願する。

孫悟空だけじゃない。三蔵法師が、猪八戒が、沙悟浄が、私を本気で見つめている。

そして、今日この日のために集まった観客が――

ああ、そうか。これは私一人の舞台じゃない。

皆、私を待っている。

私が光を許すことを。

まだ、許し方はわからない。

許せるとも思えない。たとえそれが口先だけであったとしても。

だから、私は羅刹女<sup>私</sup>を捨てる。

嘘偽りの自分を演じることでしか、この舞台は終幕へとたどり着けない。

私は舞台の中央へと、その終わりに向かって足を進める。

皆、繋ぎ止めようとしてくれている。

所定の位置に着き、私は顔を上げて観客を見渡す。

この時の私には、いつも以上に観客の顔がはつきりと見えた。

そして持っていた芭蕉扇を天に掲げ、最後のセリフを口にする。

『分かったわ』

—————

『分かったわ』

そうやって芭蕉扇を掲げる景は、完全に芝居が解けていた。きつとそれは、僕でなくともわかるほど。

心ない嘘偽りの芝居で景は乗り切ろうとしている。

そんな景を見て、僕はつい考えてしまう。

もし僕が役者として生きていたら、芭蕉扇を振り下ろすあの手を止めていたのだろうか。

おかしな話だ。そもそも僕が役者の道を選んでいたら、こんな状況にすらなっていないのだから。

それでも僕は、思わずにはいられない。

景がオーデイションを受けたあの日、スカウトの言葉にうなずいていたら。

銀河鉄道の舞台を見たとき、アリサさんに俳優になると伝えていたら。

僕たちの運命は変わっていたのだろうか。

それよりももっと早く、何か別の行動を起こしていれば、景に真実を打ち明けることができているら、もっとまじな結末を迎えることができたのだろうか。

例えば、普通の学生として何も気負うことなく、同級生として笑いあったりだとか。

例えば、二人でトップ俳優を目指しながら、同じ作品で共演したりだとか。

そんなあったかもしれない未来を想像して——僕は考えることをやめた。

そうはならなかったからこそ、今の僕と景があつて、こうして道を

違えたんだから。

それ以外の未来を想像するなんて、今の僕には現実逃避でしかない。

そんな現実逃避をしてしまうほど、芝居の解けた景の姿を僕は見たくなかったんだろう。

もしこのまま芭蕉扇を振り下ろしてしまえば、もう二度とさっきまでの芝居ができなくなることは明白だったから。

でも、大丈夫だよ景。

きつとそうはならない。

君の演技は多くの人から愛されて、多くの人から守られている。

もう君は、あの日のようにひとりぼっちでテレビを見ていた君じゃない。

ほら――

まさに振り下ろされようとする景の手を、王賀美さんがその手で止める。

看過できない台本無視。直前のアイコンタクトからすれば、王賀美さんの独断ではなく、共演者たち全員での判断だったに違いない。

彼らは舞台を捨てたんだ。舞台を捨ててまで、君の芝居を守ったんだ。

おそらく景は、そのことに気づいたのだろう。

その場で泣き崩れるように、芭蕉扇を手離して膝をつく。

君は役者の夜風景だ。

君は昔の君じゃないし、ましてや花子さんの描いた羅刹女でもない。

だって君は今、多くの人に囲まれて、そんなにも幸せだから。

怒りも悲しみも、もう過去のことだから。

そこに僕の好きになった、かわいそうな景は存在しない。

君という物語の主人公に、僕は必要なんてなかった。

僕が味方になる必要なんかなくて、ましてやそんな僕に依存する必

要なんてあるわけがない。

きつと僕は、君の一ファンとして応援しているくらいが、自然な形だったんだ。

学校で友達と君が出ていたドラマの話をして、大きい作品にキャスティングされたことを喜んで、熱愛報道が流れると勝手にシヨツクを受けて。

幼なじみでもなんでもない。君は、液晶の奥にいる遠い人。

それが、それこそが、正しい道であるべきなんだ。だから――

今なら、演じられるよね？

うん――

聞こえないはずの声が聞こえたかと思うと、景は涙をぬぐいながら立ち上がる。

そしてもちろん、その手には芭蕉扇が握られており、その場で半回転するようにして芭蕉扇をあおぐ。

それによつて必然的に景の視線が、舞台袖にいた僕を捉え、僕と景の目が合う。

時間にして1秒にも満たないその瞬間は、永遠にも感じられるほど、ゆっくりと流れていく。

さよなら、光――

景は口を開かなかつた。

けれど今度は間違はなく、僕にはハッキリとそう聞こえた。

僕は景のいる舞台に背を向けて、そのまま歩き出す。

景はきつと、これからも前に進んでいく。

過去の怒りと悲しみに囚われたことで、今持つてるものの豊かさに気づいた君に、くべる薪はもうない。

たとえ嫌悪の感情であっても、君は僕にそれを向けることはないだろう。

これで終わったんだ。僕と景の全てが。

「さよなら、景」

さよなら、僕の初恋。

間違っていたかもしれない。

歪んでいたかもしれない。

それでも僕は、君の激情に恋をして——幸せだった。

## 悩める二人の羅刹女

side 夜風景

サイド甲初日の上演は無事には言えないものの、なんとか終わりを迎えることができた。

しかし主演である夜風に晴れ晴れとした様子はなく、共演者たちに対し、申し訳ないといった表情を浮かべている。

「皆…私——」

「良い芝居だったよ、景」

謝罪しようとした夜風を遮るようにして、王賀美が夜風の演技を褒める。

他の共演者の三人にも、夜風を責める様子はない。

「でも、王賀美さんにあんなことをさせてしまった、舞台も——」

「あれは俺たち皆の選択で、俺たち皆の全力だった」

再度王賀美は夜風の言葉を遮り、そしてその視線を舞台袖へと向ける。

「無論あんたもいれてな、花子さん」

王賀美の言葉に誘導されるようにして、全員が舞台袖にいる山野上へと目を向ける。

しかしそこには、先ほどまでいたはずの少年の姿はない。

夜風は山野上へと近づき、その行方を問いかける。

「花子さん…光は？」

「……」

「花子さん？」

「……わかりません。いつの間にかいなくなっていましたから」

この時、夜風には山野上の表情が今にも泣きだしそうなほど悲し気に見えた。

「花子さん、私…色々聞きたいことがあるの。光のことで…花子さんが知ってることを教えて欲しい」

「わかりました。私も、景さんに話さないといけないことがありますから」

山野上は夜風の提案を了承し、周囲の心配はあったものの、二人きりで話す約束を取り付ける。

そしてその日の夕方――

夜風の自宅にて、夜風と山野上はテーブルをはさみ、向かい合うようにして座っていた。

しかし向かい合ってから数分、二人の間に会話はない。

「……」

「……」

思っていた以上の気まずさに、夜風は自分から話を聞きたいと言ったものの、なにから聞けばいいかわからないというのもあり、なかなか話を切り出せないでいた。

それを察してか、先に山野上が口を開く。

「……光さんからは全てが終わった後、もし景さんが話を聞きたいと言ってきたら、私が光さんについて知っていることを全て話してほしいと言われています」

「っ！ じゃあ――」

幼なじみの名が出たことで動揺しつつも、当然聞くつもりで夜風は思わず身を乗り出すが、山野上はそれに待ったをかける。

「ただ、光さんの話をするとなると、必然的に私の秘密を話すことになります。そしてそれは、既に傷ついている景さんをさらに傷つけることになる。それでも、聞きますか？」

「聞くわ」

ためらうことなく、力強く発せられた返答の言葉。

その迷いのない夜風の表情を見て、山野上は自分が惨めになるのを



感じていた。

「わかりました。では告白させてください」

「？」

「私はあなたのお父さんとお付き合っていました」

「――」

それは不倫の告白だった。

それを聞いた夜凧は思わず立ち上がり、再び羅刹女の怒りが再燃する。

勢いよく振り上げた手を山野上へと伸ばしたその時、自分を送り出してくれた共演者の顔が夜凧の頭に浮かんだ。

すると冷静に――とまではいかないが、わずかに理性を取り戻せた夜凧は、全身を震わせながらもまた腰を下ろす。

怒りに飲み込まれる夜凧の姿は、そこにはなかった。

「……意外でした。てっきり叩かれるものだとばかり」

「……………今は、話が聞きたい。続きを聞かせて、花子さん」

握った拳からは血が流れながらも、夜凧は続きを促す。

その覚悟受けて山野上も、自身の過去を語る。

自分がどういふ人間なのか。

どういふふうにな夜凧の父親と出会ったのか。

さらに夜凧の父親としばらく一緒に暮らしていたこと。

そして最後には裏切られたこと。

山野上が自身の全てを語り、そしてようやく園山光の名がその口から語られる。

「――私がまだ彼と暮らしていた時、その住んでいた部屋を訪れた人間が一人だけいます」

「それって…………」

「はい、お察しの通り光さんです。とても容姿の整った少年だったので、他人に興味のなかった私でも記憶に残ったほどです。私が見たのは、光さんが彼と玄関先で話をしているところでした」

「……じゃあ、光があいつと連絡を取り合ってたのは本当なのね」  
どこかでまだ幼なじみを信じたいと思っていた気持ちが、完全に崩れていくのを夜風は自覚する。

この時の夜風は、怒りよりも悲しみの感情に心が支配されていた。「そうですね。ただ記憶にある限りだと、光さんと彼の仲はとても円満と思えるようなものではありませんでした。会話をしている時は、いつも光さんが怒りを見せているといった印象だったので。今思えば、あれは彼を景さんのもとへ戻るよう説得していたのではないかと思います」

「っ！ ならどうして光は私にそのことを教えてくれなかったの!?  
そもそもどうしてあいつは光にだけ自分の居場所を——！」

「光さんがそのことを話さなかった理由は私にもわかりません。しかしもう一つの疑問——彼が光さんにだけ自分の居場所を教えた理由はなんとなくわかります」

山野上のその言葉に息をのみ、今まで以上に耳を傾ける夜風だが、次に飛んできた言葉は予想外のものだった。

「景さんは光さんのどこを好きになったんですか？」

「……………え？」

夜風は意味が分からなかった。

話の続きはどうしたのか。

なぜ今そんなことを聞くのか。

「ごめんなさい花子さん、それって光の話と関係あるの？」

「ええ、あります」

そう告げる山野上の表情はどこまでも真剣だったため、理解できないながらも夜風は質問に答えていく。

優しくしてくれたこと。

隣にいてくれたこと。

味方でいてくれたこと。

一緒にいるだけで幸せな気持ちになれること。

優しい笑顔で見つめてくれたこと。

上げればいくらでも思い浮かぶ幼なじみへの想い。

もはや言い訳のしようもなく、自分は光のことが好きだったのだと自覚する夜風。

関係が完全に変わりきったことで、少女はようやくその気持ちに気づくことができた。

気づいたことで泣きそうになる夜風だったが、必死に涙をこらえながら山野上を見つめる。

「でもやっぱり一番は、辛かった時期に傍で励ましてくれたことだと思おう。今となっては、光がどういう気持ちでそうしたのかわからないけど……」

「優しくしてくれたから——それは、人を好きになる理由としてとても正しいことだと思います。他にも、顔や性格がいいから、一緒にいて楽しいから、趣味が合うから。人を好きになる一般的な理由はこういったところでしょう。しかし、そうでない人間もいる」

「……………どういうこと？」

「怒り、嫌悪、恐怖、嫉妬、軽蔑、不安——それらは本来、人が本能的に忌避する感情です。しかし世の中にはそんな負の感情を好み、それがきつかけで誰かを好きになる人間も存在します」

「……………それが光だつて言うの？」

「その通りです。彼が光さんとだけ連絡をとっていたのも、光さんの人間性に興味を持ったからでしょう」

「そんなわけないじゃない！」

夜風は思わず声を荒げて立ち上がる。

それは怒りというよりも、驚きの感情が大きいゆえの行動だった。

「光は一度だつてそんな様子見せたことないのに——！」

「本当にそうですか？」

夜風の言葉を遮った山野上は、夜風の目を真っすぐ見つめて問いかける。

「忘れようとはしていませんか？ 目を逸らそうとはしていませんか？ 自分を騙そうとしていませんか？ 光さんは言っていましたよ。」

景さんは気づかないフリをしているだけだ、と」

「……あ」

山野上の言葉を受けて夜風がまず一番最初に思い出したのは、幼なじみと初めてケンカをした幼き日の記憶。

『もう知らない！ 光なんて大っ嫌い!!』

そう叫びながら本気で怒るかつての自分に対し、申し訳なさそうにするどころか、どこか嬉しそうな笑顔を浮かべる幼なじみ。

さらに怒れば怒るほど、その笑みも深まっていく。

もはやケンカの理由も覚えていないが、その幼なじみの表情だけは鮮明に思い出すことができた。

いつも浮かべるような優しい笑みではなく、本能のままに浮かべる  
寧猛な笑み。

それは数時間前に見た幼なじみの笑みと同種のものだった。

そんなかつての記憶を思い出した時、夜風の中で何かが腑に落ちる。

「ああ……、そうだったのね」

短くそうつぶやいた夜風は、少しうつむいてそれ以降口を開かない。

その姿が怒りを抱いているように見えた山野上は、弁明するように  
補足する。

「誤解のないよう言っておきますが、負の感情を好むからといって、光さんはあなたを傷つけようとしてあなたの傍にいたわけではありません。むしろ——」

「大丈夫よ花子さん。光が何を考えて、どんな思いで私の傍にいてくれたのか、多分だけどなんとなくわかるから」

見えないフリをしていたものが明らかにになり、ついに幼なじみの秘密を理解した夜風。

それによって今まで積み重ねてきた幼なじみとの記憶も、必然的に見え方が変わる。

不幸を望むのなら、いくらでもその機会があった。

しかし結果的に、光は私利私欲のために夜風を傷つけることはなかった。

ついその思いがこぼれだしてしまうことはあっても、最後の一線だけは絶対に越えなかった。

わかりあっているつもりだった。

同じ時を過ごして、一緒に笑って、悲しみも共有して。

しかしそれは自分だけの一方通行な想い。

その優しさの裏に、どれだけの葛藤があったのだろうか。

その笑顔の裏に、どれだけの辛さがあったのだろうか。

自分の存在が光を不幸にしていたのかもしれない——そう考えたとき、夜風の心は悲しみで覆われ、その目には涙がたまる。

「……いつかこんな日が来ることは想像できたはずなのに、私は覚悟すらできないで、舞台も最後まで演じ切れなかった」

どうにもならない後悔を口にした夜風は、顔を上げて山野上にも後悔と謝罪の言葉を口にする。

「ごめんなさい」

「……どうしてあなたが謝るんですか。普通……逆でしょう」

「あいつは……お母さんが生きていた頃から滅多にうちには帰ってこなくて、だから花子さんみたいな人が現れる日が、いつか来るとは思っていたの」

「……………」

夜風から謝罪の言葉とその理由を投げかけられた山野上は、さらに自分が惨めになるのを実感していた。

本来なら真つ先に謝らなければいけないはずの立場にありながら、傷つけた相手に逆に謝られ、自身は未だ何を謝ればいいのかすら分かっていなかったからだ。

「ごめんなさい。花子さんたちが一人きりだったこと気づけなくて」

さらに追加で告げられた謝罪に、山野上の惨めに思う気持ちはさらに強くなっていく。

焚きつけ、放棄し、期待し、取り残され、理解され、泣かせて、一

体何をしているんだと自身に問いかけるも、その答えは見つからない。

「謝らないといけないことだらけなの。光に、花子さんに、皆に。次からの舞台：私、自信ない。私にはもう羅刹女の怒りが、光に向けるべき感情が、分からなくなってしまったから」

少女は少年の秘密を知った。

知ってしまったからこそ、その感情はぐちゃぐちゃになり、着地点を見つけることができない。

そこには自分の過ちもあって、それでも裏切られていたのは確かだ。

いつそ心の底から嫌えてしまえば楽だったのだろう。

しかし少女の心から、少年を想う気持ちは消えない。

光への振り切れた怒りで羅刹女を演じた夜風にとって、それは致命的だった。

舞台は初日の公演が終わったばかり。

まだ先は長いにもかかわらず、演出家と主演女優には、二日目以降の展望を全くと言っていいほど見据えることができないでいた。

—————

side 百城千世子

サイド甲 初日公演終了直後——

「配信動画には初日のものが使われるときいている。つまり僕たちの勝ちが決まったようなもんだ」

舞台が幕を閉じ、サイド乙の出演者が集まる控室では、そんな発言

が飛び出る。

しかしその言葉とは裏腹に、部屋の中を流れる空気はどこか重苦しい。

その中でも特に重々しい空気と、険しい表情を浮かべていたのは、サイド乙の主演である百城千世子だった。

そんな千世子は急に立ち上がったかと思うと、走るようにして突然控室を飛び出す。

「えー！ ちよつ、千世子ちゃん!?!」

柊が驚いて声を上げるも、千世子は止まらない。

千世子が控室を飛び出した理由は、とある人物に会うため。

その人物が来ていることを、千世子が知るよしもない。

それでも、夜風の演技を見た千世子は心のどこかで確信していた。

絶対に彼が来ているのだと。

そして予感がしていた。今、彼に会わないと取り返しのつかないことになるのではないかと。

控室を出て、関係者通路を半ば走るように移動していると、目の前からその彼が姿を現す。

「光くん」

うつむき気味に歩くその少年——園山光に声をかけるも、光は何の反応も示さない。

「あつ——」

触れ合えるほどの距離まで近づいて、千世子は気づく。

少しずつ、少しずつ心の距離を縮めてきたその少年との距離が、初めて会った時よりも遠いことに。

それは明確に感じる拒絶の意志。

少年は千世子を一瞥いちべつもすることなく、その隣を通り過ぎていく。

以前会った時、やっと見えたと思ったその顔は、また見えなかった。

## その日の夜

千世子は公園のブランコで、何をするわけでもなく、ただ一人座っている。

そんな千世子の心を埋め尽くすのは、夜風に対する敗北感。

勝てない――

認めたくない。それでも認めるしかない。

千世子から見た夜風の演技は、その感情を抱かせるには十分なものだった。

そしてそれと同時に抱く、光へ向けられた複雑な感情。

自分の芝居では、夜風には勝てない。

自分の芝居では、光は見えてくれない。

千世子は悔しくてたまらなかった。

自分が負けを認めてしまっていること。

夜風が自分のことを想いながら演じてくれなかったこと。

光が夜風の演技中に一度も自分のことを思い出してくれなかったこと。

勝ちたいと思った相手は、勝てる姿が想像できないほど遠くに行ってしまった。

ファンにしてみせると宣言した相手は、一瞥すらしてくれなかった。

明日のサイド乙の講演まで、既に20時間を切っている。

その短い時間で夜風を超えられるとは、今の千世子には到底思えない。

そんな自信を失った千世子を、車のライトが照らす。

「おう」

車から出てきたのは、サイド乙の演出家である黒山墨字だった。



「……稽古はないんじゃないやなかったの？」

「ああ、でも気が変わった。ついて来い」

黒山はそう告げるが、千世子はその言葉に対して素直にうなずけない。

「どういうつもりか知らないけど、遅すぎたんだよ。造花は生花には勝てない。本物の良さを知っている人は、偽物に目を向けたりしない」

「ごちやごちや言ってねえで、とりあえず車に乗れ。俺はこう見えてケンカに負けんのが大嫌いなんだよ。誰が見ても文句なしの圧倒的な芝居にしてやる」

「……………」

勝たせてやる——そんな力強い言葉も、千世子には届かない。

めんどくさくなった黒山は、もう無理やり連れて行くかと考えたその時、ある人物の名を口にする。

「そういえばさつき、お前が気にした光くんに会ってきたぞ」

光の名前が出た瞬間、千世子の体がピクリと揺れる。

「ちよつと話してみてわかったが、あの年であそこまで拗らせたやつはそういない。夜凧やお前らが振り回されるのも無理はねえ」

「……………」

「とりあえず、明日の舞台は絶対見に来るよう伝えてある。来る気が無いなら、終に無理やりにも連れてこさせる」

「……意味ないよ。どうせ、光くんの目に私は映らない」

半ば拗ねるような状態でつぶやく千世子。

そんな千世子を、黒山は肩に抱える形で背負い、無理やり車へと運ぶ。

「ちよつと」

「いいから大人しくついて来い。何が造花は生花に勝てねえだよ、くだらねえ。お前にはしばらく夜凧の一步先を歩いてもらわなきゃならねえんだ。公演までまだ19時間もある。他のキャスト含め必要な人間は全員集めた。文句なしの圧勝の舞台にするには、十分な時間と面子だ」

車に乗り込んだ黒山は、不安など微塵も感じさせない言葉で告げる。

そしてその言葉通り、黒山の手によって、千世子の羅刹女は大きな変化をとげることになる。

そんな変化をとげた千世子には、迷いや不安といった感情は無くなっていた。

彼女は演じる。

ライバルに勝つために。

思い人を振り向かせるために。

## 百城千世子

初めて会ったのは、本当に偶然だった。

『一人だけ綺麗でいる演技が、僕には違和感を感じたけどね』

それは主演として出演したとある映画作品の公開初日。

その映画を見た人たちの生の声を聞きたくて、プライベートで映画館に寄った後、近くをぶらついていたら時に聞こえてきた言葉。

別に批判意見なら慣れている。

多くの人から愛されることはできても、全ての人から愛されることはできない。

そういった意見は一理あるなら参考にして、的外れなら無視すればいい。

わざわざ重く受け止める必要もなければ、ましてや絡みに行く必要もない。

だというのに――

『いや、いいですか?』

ちょうど一人になった彼の目の前の席に座り、あからさまに警戒する彼に向かって笑いかける。

思えば、この時からどこか惹かれていたのかもしれない。

それは自分と同じ仮面ものに興味を持ったからなのか、もしくは自分がないオーラもを感じ取ったからなのか。

どこか私に似ていて、私の演技生き方を肯定してくれて、でも私にはない何かを持っていて、気づいたら連絡先を交換していた。

その後もちよつかいをかけ続けた理由として、夜風さんに対する対抗心の他に、光くん本人への興味があつたことは今になってはつきりとわかる。

若手トップ女優が隣にいるのに、そこにいない夜風さんにしか目を向けない光くん。

それがとにかく悔しくて、なんとしてでも自分の方に振り向かせて

たい——なんて子供みたいな思惑を、私は次第に持つようになった。なのに、会うたびに惹かれていったのは私の方だった。

会うたびに光くんの本性に触れ、素っ気なくされると悲しくなつて、優しくされると嬉しくなつて、夜風さんの家のお風呂から出てきた時は自分でもびつくりするくらいイラついて。

少しずつ距離が縮まるのを楽しんでいた自分がいることに気づくまで、そう長い時間はかからなかった。

そんな私が彼に向ける感情の名前を、きつと知識としては理解している。

初めて抱いたその感情は、私の知らなかった私を教えてくれた。

もつと、あなたのことが知りたい。もつと、あなたの傍にいたい。

そうすることで、私は新しい自分を見つけ、感じたことのなかった喜びや怒りに気づいていく。

この感情は、きつとまだ発展途上だから。

私は知りたい、この感情の正体を——

—————

サイド乙 公演初日——

「あはは……、ほんとごめんね光くん。無理やり連れてきたみたいになっちゃって」

そう言つて雪さんは、無理やり作つた笑顔で僕に告げる。

公演開始まであと1時間と迫る中、僕は雪さんに半ば無理やり連れられるような形で、会場の入り口前に来ていた。

開演間近とあって、入り口前には舞台を見に来た多くの人であふれかえっている。

本当は、今日の舞台を見に来るつもりはなかった。にもかかわらず僕がここにいるのは、黒山さんから言われた言葉が引つかかっているからだ。

『どうせもう一度と、夜風や百城には近づかねえとか思ってたんだろ。けどそんなもんは、どこまで言っても誤魔化しでしかねえんだよ。明日の舞台は絶対に見に來い。お前に本当に必要なものを見せてやる』突然僕の家を訪れた黒山さんは、一方的にそれだけ言うとすぐに出ていった。

その言葉を見無視するのは簡単だったが、それができずに今僕はここにいる。

昨日の景との決別で、僕は全ての決着を付けたつもりだった。

だというのに、僕の感情はぐちゃぐちゃに壊れたままで、寝ても覚めても景の羅刹女が頭に浮かんでしまう。

いい加減にしろよと、僕は俺に言い聞かせる。

お前の望みは叶えたはずだろう。お前の欲望は満たしたはずだろう。ちゃんと終わらせたはずだろう。

なのにどうして、俺は消えない。どうして、僕は消えない。

この感情は未練なのか。

だとしたら時間が経てば消えてくれるものなのか。

結局その答えは自分で出すことができなかった。

それが今、僕がここにいる理由なのだろう。

「えつと……、関係者の私が言うのもなんだけど、すごくいい舞台に仕上がっていると思うから、きつと光くんも気に入ると思うよ」

「は……」

いつもの僕なら、柘さんの言葉に愛想よく返すところなのだが、今の僕にはそれをする余裕が無かった。

昨日のことを引きずっているのもあって、表情が上手く作れない。そんな僕に、柘さんもわかりやすく動揺してしまっている。

「あ、あー！ じゃあ私は関係者の人に話を通してくるから！

ちよつとだけここで待ってて！」

そう言つて柊さんは入り口の方へと向かつていく。

慌てていたのは、気まずい状態から抜け出したかつたという理由も少なからずあるはずだ。

柊さんが離れていったことで当然僕は一人になる。

彼女が戻ってくるまでの間どうしようかと考えていたその時、僕の背中に誰かがぶつかつた。

「あ、すいません」

僕は咄嗟に謝つて離れようとするが、ぶつかつた人は背中にもたれかかるように力をかけ、一向に離れる気配を見せない。

「……………」

そんな不自然な行動を疑問に思い、僕は首をひねつてなんとか背中  
の状況を確認する。

するとそこには、その小柄な体系からおそらく女性だと思われる人  
物が、僕の背中に頭を押し付けるようにしてもたれかかつていた。

おそらくというのは、その人物がフードを被っているため、顔が確  
認できないからだ。

「あの……………」

「……………」

僕から女性に問いかけてみるも、女性は反応を示さない。

どうしたものかと考えたその時、なぜか無意識に、僕の頭の中に一  
人の少女の名前が思い浮かんだ。

「……………百城さん？」

「正解」

僕の問いかけに答えた声は、間違いなく百城さんものだった。

しかし百城さんは僕の背中から離れようとしなない。

「顔がバレるとまずいからこのままでもいいせて」

僕は離れようとしていた力を抜くことで、百城さんをお願いを受け  
入れる。

「いいの？ もう入場受付が始まつてるのに、こんな所にいて」

「お客さんの顔を見ておきたかったの。そしたら光くんを見つけたから、ついもたれかかっちゃった」

そう話す百城さんの声は、どこか上機嫌だった。

「昨日無視されたこと、けっこうショックだったんだよ？」

「……………」

「謝ってくれないんだ」

「謝る資格もないから」

いや、謝る資格どころか、こうやって関わる資格すら僕にはない。

百城さんたちのような、日の当たる場所にいる人たちは、僕のような人間と関わってはいけないんだ。

昨日、僕はそれを心の底から実感したのだから。

「やつと近づけたと思ったのに、また遠くなっちゃった。そうやって毎回私をやきもきさせて、光くんってほんと駆け引き上手だよね」

「……………そんなつもりはないよ」

「ふーん、まあそれはいいや」

そう言つて百城さんは一度話を区切る。

それと同時に、とてつもなく嫌な予感が僕を襲った。

「私ね、光くんと会ったら、聞きたいと思つたことがあるんだけど——」

百城さんの声のトーンが、一段階下がったのを僕は感じ取る。

「——夜風さんと付き合つたってほんと？」

僕は嫌な予感が当たったことを察した。

「まあその、一応……。といつても、昨日までの話だけど」

「光くんから告白したの？」

「うん……………」

「いつ？」

矢継ぎ早に繰り返される百城さんの質問に、僕は尋問されている気分になつてくる。

「……………えっと、それは——」

言い淀んだのがいけなかったらしい。

「いっ？」

声のトーンが一段階、さらに下がる。

「その……………、百城さんのマンションに行った帰り道……………」

「そっか。じゃあ光くんは、私が光くんに気持ちを伝えたすぐ後に、別の相手に告白したんだ」

「……………」

もちろん自覚している部分はあった。

ただ実際に口に出して言われると、自分のどうしようもなさを心の底から実感してしまう。

だから僕は、何を言われても受け入れる気でいたし、罵られても、手を出されても仕方ないと思っていた。

しかし百城さんは怒るところか、小さく笑い声をあげ、声のトーンも元の上機嫌なものに戻る。

「ごめんごめん、冗談だよ。黒山さんから色々話を聞いた今なら、光くんがどんなつもりで告白したのか、なんとなく理解できるから」

百城さんがそう言い切ると、背中にかかっていた力が無くなるのを感じる。

「あの日、光くんに言ったこと、改めて言うね」

いつの間にか目の前に移動していた百城さんは、いつ見ても見惚れるような綺麗な笑顔を僕に見せる。

まさに天使という言葉がふさわしい笑顔。しかし――

「最高の演技で、夜風さんに勝ってみせるから」

そう告げた百城さんの表情には、その仮面の裏に隠す悪魔が、確かに顔を覗かせていた。

天使から悪魔へと変貌した彼女の表情に、僕は目を離すことができない。

また後でねと言いながら去っていく彼女の姿を、僕はずっと目で追っていた。



## 羅刹女 サイド乙

嫌いで仕方がなかった。

憎くて仕方がなかった。

いつも殺してしまいかった。

だから偽った。

心優しい自分を。

大人しい自分を。

迷惑をかけない自分を。

理想の姿を想像し、そうなりたいと願い、そうあるように努めた。すると、みんなが認めてくれた。

君は本当に優しい子だねと。

君は本当に優秀な子だねと。

君は本当に欠点がない子だねと。

一番近くにいた幼なじみですら、あなたにはいつも助けられていると、そう言ってくれる。

なのに、自分の中にいる怪物が消えることはなかった。

消えてしまえと叫んでも、死んでくれと願っても、目を逸らして見えないフリをしても、怪物は胎はらの中に居座り続ける。

怪物はふとした拍子に顔を出し、感情の全てを支配するように、偽った自分を塗りつぶしていく。

それが怖くて仕方なかった。

まるで、自分が自分じゃなくなるみたいで。

まるで、自分が別人へと置き換えられていくようで。

優しい笑顔を浮かべながら、いつも何かに怯えながら生きる自分。人が傷つくのを平気ですとする、本能に忠実な自分。

誰が見ても好ましい理想の姿は偽物で。

誰が見てもおぞましい醜悪な姿が本物で。

そんな自分が、世界中の誰よりも嫌いだ。

頭の中では、いつだって囁きささや続けている。  
ああ、腹が立つ、腹が立つ——と。

—————

「光くん連れてきましたよ」

柊さんに連れられ、僕がたどり着いたのは、見るからに関係者以外立ち入りが禁止されているような部屋。

設備的な面もそうなのだが、なにより舞台が一番いい位置で見られる場所にあり、ここからガラス越しに鑑賞するだけで、満足度が上がるのは容易に想像できる。

そしてその部屋には、黒山さんが僕を待っていたかのように一人で佇んでいた。

「じゃ、じゃあ私はカメラ席の方に行くんで〜」

そう言つて柊さんは出ていき、部屋には僕と黒山さんの二人きり。気まずいというほどではないが、何とも言えない空気が部屋の中に流れている。

そんな空気の中、先に口を開いたのは黒山さんだった。

「あー……、そっぴやお前の名字つてなんだっけ？ 夜風も百城も柊も下の名前でしか読ばねえから、なんなら聞いたことなかったわ」

黒山さんのその質問に、僕は思わず肩の力が抜ける。

何を言われるかと思えば、想像以上にマヌケな問いかけだったからだ。

「園山です」

「そうか。じゃあ園山、お前役者やる気ないか？」

「……え？」

文面で見れば何も難しいことではないのだが、その意味を理解する

のに僕はかなりの時間を要した。

「まんまの意味だよ。事務所に所属して役者やらねえかって話だ。なんならうちで面倒見てやる。もっと大手の事務所がいいってんなら、俺からスターズに紹介してやってもいい」

それはこちらの意志を最大限尊重する、役者を目指すものなら信じられないくらい破格の提案。

もちろん黒山さんに冗談を言っているような雰囲気はない。

「まあ今すぐ決めろとは言わねえよ。お前自身がやる気になったらでいい」

そう言つて黒山さんは僕から顔を背け、舞台の方へとその視線を向ける。

その視線の先では、まさに舞台の幕が上がろうとしていた。

「とりあえず今は舞台を見ていけ。昨日も言ったが、お前に本当に必要なものをこの舞台で見せてやる。覚悟しとけよ。ふっきれた女はマジで怖えぞ」

ふっきれた女——それが誰のことを指しているか、僕はすぐに思い至ることができた。

そして、まるで停電したかのように、会場内全ての照明が消える。

『ああ、腹が立つ。腹が立つ』

静寂の中で透き通るように響く百城さんの声。

それが舞台の始まりを告げる合図となり、サイド乙の羅刹女は幕を開ける。

結論から言うと、百城さんの演技は圧巻だった。

遠くて近く、近くて遠い。

誰もが見惚れる天使のような美しい表情。

誰もがおののく悪魔のような恐ろしい表情。

その二つの表情を延々と繰り返す百城さんの表情から、僕は目を離すことができない。

「すごい」

そんな言葉が、僕の口から無意識に漏れる。

好みだとか、技術だとか、そういうものを越えて出た言葉だった。もちろん百城さん以外の役者も素晴らしく、共演者が景色として強くなることで、さらに百城さんに目が行き、その存在感が際立っている。

『最高の演技で、夜凧さんに勝ってみせるから』——そんな百城さんの言葉に偽りはなく、完成度という点では圧倒的に上だと、素人の僕でも理解できた。

そしてサイド乙の舞台は高い完成度を保ったまま、ついに終盤へと差し掛かる。

羅刹女が孫悟空たちとの殺し合いに身を委ねる場面。

激しい動きがメインとなる派手なシーンなのだが、そのせいか百城さんの姿が一瞬ブレたように見えた。

「あれ——？」

いや、あれはブレたというよりも、羅刹女の姿が別の誰かと重なったような——

「羅刹女は牛魔王を愛している。どんなにひどい扱いを受けようと、別の女のところに行こうと、恨むことができない。恨み切れないでいるんだ」

ちやうど僕が戸惑いを感じたその瞬間に、隣にいる黒山さんが補足するように説明する。

「……………その想いを、殺し合いに身を委ねることで忘れようとしている——そういうことですか」

「ああ、そういうことだ。なあ園山、百城の羅刹女——お前にはどう見える？」

そうか……。そういうことか……………。

僕は黒山さんの言葉を受け、二つのことを理解した。

一つは、昨日のサイド甲と比べ、サイド乙の方がより羅刹女と向き合い、話の筋が通っているということ。

そして二つ目は、先ほど羅刹女とかぶって見えた人物の正体。そうだ。あれは――

「僕だ」

何かから目を背けるように、狂気を前面に出して殺し合う羅刹女の姿。

それが僕の姿と重なっていた。

どこへも向けることのできない怒り。

どこへも吐き出すことのできない苛立ち。

それこそが、僕と羅刹女の持つ同じ思い。

そこに至るまでの過程はまったく違えども、たどり着いた場所が同じだからこそ、こんなにも羅刹女にシンパシーを感じているのだろう。

思えば、花子さんと一時期よく会っていたのも、彼女にシンパシーを感じていたのが原因だったのかもしれない。

羅刹女の怒りは、花子さんの怒りだから。

でも、羅刹女は救われる。

『なあ羅刹女よ、火焰山の炎を鎮めてくれ、後生だ』

『分かったわ』

最後のセリフが告げられ、百城さんの手に持った芭蕉扇が高々と掲げられる。

殺し合いに溺れることで、羅刹女は救いを覚えた。

最後に火焰山の炎を鎮めて、舞台は終幕する。

なら――殺し合いでも救いを見いだせなかった僕はどうすればいい？

我慢してもダメだった。

思いを爆発させてもダメだった。

どうあがいても醜い魂が消えないのなら、それが源泉である僕の怒りは消えるはずがない。

救いなんてあるわけがないんだ。

僕と羅刹女は違う。

百城さんの掲げた芭蕉扇はゆつくりと振り下ろされ――

「え――？」

振り下ろされかけた芭蕉扇。

それは孫悟空――いや、牛魔王によって阻止される。

予定外の動きだったサイド甲と、まるで同じように。

「あれって、脚本になかったはずじゃ……」

「園山、お前ならもう気づいてるはずだ。10年以上自分の怒りと向き合い続けたお前なら、惚れた相手への想いが、殺し合いなんかで忘れられるわけねえってな」

「……………」

舞台に目を向けながら言葉を紡ぐ黒山さん。

サイド甲と同じように泣き崩れる百城さん。

それにより、トラブルではなく演出であることを理解する。

「園山、お前が向き合うべきだったのは、もう一人の自分とやらでもなく、惚れた相手との決別でもねえんだよ」

「……………」

「お前が本当に必要だったのは、どうしてもそれを愛してしまう――  
――そういう自分を許すことだろ」

「あ――」

僕の目の前には、もう一人の俺がいた。

嫌いで仕方がなかった。

憎くて仕方がなかった。

いつも殺してしまいかった。

だからずっと思っていた。

どちらかが消えるしかないんだと。

でも、違った。

消せるわけないんだ。

嫌いでも、憎くても、殺したくても、その存在を認めないことなんてできないんだ。

僕は俺で、俺は僕なんだから。

そんな簡単なことに、どうして気づけなかったんだろうか。  
いや、そんなの分かりきっている。

ずっと目を逸らしていたからだ。

幸せになることを否定していたのは、他の誰でもなく、僕自身でし  
かなかった。

「もつと早く、ちゃんと向き合っていればよかった」

つい漏れたのは後悔の言葉。

僕は俺に向かって手を伸ばす。

俺も僕に向かって手を伸ばす。

その手が重なり合った時、もう一人の自分は消えていた。

僕と俺の境目は、もうわからない。

「『羅刹女』は『怒り』の物語じゃねえ。手前てめえの気持ちを認められな  
いやつらが、孫悟空に背中を押される——そういう『救い』の物語  
だ」

黒山さんのその言葉と同時に、舞台では羅刹女により芭蕉扇が振り  
下ろされる。

遠く離れた客席、それもガラス越しだったにもかかわらず、僕は確  
かに風を感じた。

「どうだった？」

「もう一度……、もう一度みたいです」

「そうか」

僕はその感想に満足したのか、黒山さんは舞台に背を向け、部屋か  
ら出ていこうと歩き出す。

「まだ舞台は初日だ。明日以降もつと完成度を上げていく。だからま  
た見に来い」

「……はい」

僕は舞台に目を向けたまま、力なく肯定の言葉を告げた。

舞台は既に幕を下ろしている。

客席からもチラホラと立ち上がる姿が見られ、惜しめない拍手の音  
も既にやんだ。

それでも、僕はまだ目を逸らしたくなくて、脳裏に焼き付いた役者

たちの姿を映しながら、ずっと舞台を見つめ続けている。

ああ、腹が立つ、腹が立つ——その囁きは、もう聞こえない。



それでも彼らはすれ違う

サイド乙の羅刹女によって一人の少年が救われた一方、一人の演出家と一人の主演女優も怒りという名の呪いから解放されていた。

「本当の羅刹女を演出して、花子さん」

サイド甲のために用意された稽古場に、山野上と夜風を始めとした出演者全員が集まる。

怒りから解放された山野上と夜風に残ったのは、負けたくないという純粹な悔しさのみ。

その悔しさだけを武器に、明日からの舞台を勝ちにいくための話し合いが行われていた。

「羅刹女は怒ってるんじゃない。彼を愛してしまう自分を許せなかったんです。わかりますか、景さん」

サイド乙の舞台を通して得た、新たな羅刹女の解釈を夜風に伝える山野上。

とはいえ、それはあくまで山野上自身の経験から来る解釈であるため、若い夜風がそれを理解するには時間がかかると考えていた。

しかし――

「うん、わかるわ」

山野上の予想に反し、力強く頼もしい言葉を返す夜風。

その表情に一切の迷いはない。

「でも一応、花子さんの話も聞いておきたい。あいつにどんな風に恋をしていたの？」

さらに夜風は臆することなく、自身の父親の不倫について詳しい話を聞こうとする。

たったの昨日今日で大きく変化した夜風の強さに、共演者たちは驚き、感心するといった様々な反応を見せた。

一方で尋ねられた山野上はというと――

「……………どんな風に」

「何を赤くなってんだよ」

「す、すみません」

これでもかというほど顔を赤らめて汗を流し、それを王賀美に突っ込まれていた。

「……………絵や小説なら、こんな恥ずかしい思いもせずに済んだんですけど」

山野上がそう話すのは、一人で絵を描き続けるしかなかった、孤独だったころの自分。

しかし今は違う。

彼女を舞台を、関わり合うことを選んでしまった。

「いちから立て直します」

「うん」

もう彼女は一人ではない。

燃え盛る炎の絵も、もう描けない。

「そういうえば花子さん、もう一つ聞きたいことがあるのだけど」

「何ですか？」

「昔、よく光と二人で会ってたのよね？」

「……………ええ、まあ」

「後でその話、詳しく聞かせてね」

「……………」

この時のことを、後に山野上は次のように語っている。

一切表情を変えることなく山野上を見つめる夜風は、今まで見たどの姿よりも恐ろしかった、と。

—————

週末に行われた羅刹女の両サイド初日公演が終わり、訪れる月曜平日の朝。

学生である僕は、当然のように学校へと向かっている。

そんな登校の最中、校門前で偶然知り合いの姿を見つけ、挨拶ついでに声をかけた。

「おはよう朝陽」

「ん？ あ、園山おはよう。 ってそういえば、あんた夜風の舞台どこで見えたの!？」

こちらを振り返り、僕の姿を認識した朝陽は勢いよく僕に問いかける。

どちらかというところ、問い詰めるという言葉の方が正しいかもしれない。

「詳しくは言えないけど、特等席みたいところで見てたよ」

「はあ？ なにそれフツーに意味わかんない。 それより園山なら分かったでしょ！ 舞台中の夜風、なんかフツーに変だったというか、その、上手く言葉にできないんだけど、終わったあと会おうとしたけど会えなくて、それで——」

「ちよつと落ち着きなよ朝陽」

声を荒げて狼狽する朝陽の様子に、登校中の生徒達の視線が集まる。

それに気づき恥ずかしくなったのか、朝陽は少し冷静さを取り戻す。

「園山は夜風と会ってないの？」

「……うん、会ってない。 でも大丈夫だよ。 景はきつと今も、今日の公演に向けてがんばってるはずだから」

「……………まあ、園山が言うならフツーに大丈夫か」

僕の言葉に安心した朝陽は、すっかりいつもの調子に戻っていた。

「てか、そういえばさあ！」

そう言いながら朝陽が浮かべるのは、私怒ってますよと言いたげな表情。

あ、これ愚痴聞かされるやつだ。

そこそこの付き合いからそれを察した僕は、長丁場になることを覚悟する。

「舞台終わった後、遼馬と二人で遊びに行きたかったのに、フツーに吉岡もついてきたんですけど！ ありえなくない!? フツー空気読んで二人つきりにするでしょ！ 遼馬も遼馬でその辺の乙女心をちゃんと察するべきというか——！」

止まらないなあ。

「というか、どうせ園山行くだろうと思って吉岡も一緒だったのに、こんなことなら吉岡パージして遼馬と二人つきりで行けばよかった！」  
「ハハ、そんな寂しいこと言わないであげてよ。吉岡も僕たちと同じ停学仲間なんだから」

同じクラスメイト、同じ映研であるはずの吉岡の扱いのひどさに、僕は思わず笑ってしまう。

ただ吉岡本人は鈍い所があるから、きつと朝陽の不満にほとんど気づいてないだろうけど。

「……」

「朝陽？」

「園山……あんたなんか変わった？」

不思議そうな表情で僕を見つめる朝陽。

やはり鋭いなと思いつつ、朝陽の質問に僕は自信を持って答えた。

「いや、僕は昔からこんなだよ」

そうだ。僕は昔から変わってない。変わらないし、変われない。

変わったことがあるとするなら、そんな変わらない自分を、昔より少し嫌いじゃなくなったということだけ。

ただそれだけで、どこか晴れ晴れとした気分になることができた。

「まあ別にいいけど。それよりさつきから園山のスマホ鳴ってない？」

「あ、ほんとだ」

僕はカバンからスマホを取り出し、通知画面を確認する。

そこに表示されていたのは『夜風景』の名前。

「誰？　もしかして夜風？」

「いや、ただのクーポンのお知らせだった」

そうやって僕はスマホの電源をオフにし、再びカバンの中へしま  
う。

花子さんの案に乗った形とはいえ、僕がやったのは景をひどく傷つ  
ける行為だ。

それに、そこに自身の欲望が一切なかったといえは嘘になる。

景の演技のためという建前を使って、僕は自分の欲望を満たそうと  
した。

そういった欲望に対して割り切れるようになったとはいえ、やった  
ことが消えるわけではない。

もともと僕は、景を傷つける策を実行した場合、もう二度と景と関  
わらないと心に決めていた。

それが僕の罰であり罪。そう考えての決意。

しかし今となっては、それが逃げの選択肢になっているのかもしれ  
ない。

僕自身、景と会いたくないという気持ちも、確かに存在しているの  
だから。

「ままならないな……」

「なんか言った？」

「いや、なにも」

「そう、というかさっきの続きだけとき、その後も遼馬が——！」  
愚痴はまだ、終わりそうにない。

余談にはなるが、なぜかこの日以降、告白されるペースが急激に上  
がった。

――

時は流れ、舞台羅刹女、サイド甲の千秋楽当日。

舞台を直前に控えた夜凧は、控室に百城を呼び出していた。

しかし夜凧は何をするでもなく、目をつむりながら椅子に座っている。

「ねえ夜凧さん」

「何？」

「何って、あなたが私を呼んだんでしょ？　もうすぐ本番なのに、一体何の用？」

「ああ、ごめんなさい」

夜凧は目を開くと、優しく微笑みながら百城に告げる。

「そこにいてくれるだけでいいの」

「ああ……、いつかのお返しか」

百城が思い出すのは、夜凧を自分たちの稽古場に呼び出し、自身の役作りのために利用したあの日のこと。

「お返しというか……やれることは全部やりたくて」

「うん、仕方ないな。許してあげる」

ダブルキャストとして争いあっている二人。

しかし二人の間には、どこか穏やかな空気も流れている。

演技でぶつかり合い、合同稽古で役を共有し合ったからこそ、絆のようなものも芽生えていた。

「そういえば、あの時は光くんもいたね」

「……………」

百城の言葉に、笑顔だった夜風のその表情は、わかりやすく不満げなもの変わる。

「まだ連絡取れてないんだ」

「電話は絶対出ないし、メッセージも既読すらつかないわ」

「ブロックされてるんじゃない？」

「おかしいでしょ！ あんな事があつた後で、私がするならまだしも、光が私を拒絶するなんて!!」

役に没頭しようとしていた夜風だが、それを忘れて感情を爆発させる。

「それに私、光の彼女なのよ！ 彼女からのメッセージを無視するとかありえないって、ひなも言つてたもの！」

「あれ、でも光くんは別れたみたいなこと言つてたけど」

「言つてないわ！ だって私からも光からも、別れようなんて言葉出てないんだから！」

世の中には自然消滅というものもあるんだよ——百城はそう言おうとして、やめた。

明らかにめんどくさいことになりそうだったからだ。

「じゃあもしかして、夜風さんのこと嫌いになっちゃったとか？」

「それはないわ」

夜風はピシヤリと言い放つ。

その声は驚くほど低く、それまでの怒りとは比べ物にならない。

「黒山さんは光くんのこと拗らせてるって言つてたけど、夜風さんも大概だよな」

「私は拗らせてないわ……あつ、役作りのこと完全に忘れてた」

夜風は思い出したようにまた目を閉じ、役に没頭していく。

百城もまた、そんな夜風を穏やかな表情で見つめる。

「……負ければすべてあなたに奪われて、勝てば一生女優を続けられる。そう信じていたの。バカみたいだよな。そんな単純な話じゃないのよ」

百城の言葉に少し考えこんだ後、夜風はまた目を開き、その視線が百城と重なる。

「忘れていたんだよ。舞台が終わっても、勝負は毎日続くんだって。どうせ私たちは、しわしわのおばあちゃんになっても役者だから」

まだ若いながらも、生涯役者として生きていくことを決めた二人の少女。

お互いがお互い、これからも共に高め合い、成長していく未来を想像して、自然と笑みがこぼれた。

「あ、でも光くんはそういうわけにもいかないよね。欲しければ奪うしかない……、ねえ夜風さん」

「何？」

「光くん、私がもらっていい？」

それは自身の想い人を奪い取ろうという発言。

そんな言葉を笑顔で発した百城に対し、夜風も最高の笑顔で返す。

誰もが見惚れるような、とてもキレイな表情で。

「絶対に渡さない」

できることはやっておきたい——その気持ちで百城を呼んだ夜風。

その効果のほどは定かではないが、少なくとも夜風の心は燃えていた。



## 君の激情に恋をして

いつもより少し遅くなってしまった学校からの帰り道。

日もすっかり沈んでしまった中で、まだ寒さを感じながら歩いていたその時――

僕は拉致された。

急に白のバンが隣に停車したかと思うと、扉が開いて中に引きずり込まれるという、お手本のような拉致をされたというわけだ。

いや拉致のお手本ってなんだ。

どうやらまだ少し動揺しているらしい。

しかし逆に言えば、この程度の動揺ですんでいるとも言える。

理由としては、車の中にいた人たちが僕の知っている顔だったからだ。

「さすがにこれはやばいでしょ、黒山さん」

運転席に座る首謀者の可能性が高い人物に対して、僕は不満の声をぶつける。

「しゃあねえだろ。看板役者にへそ曲げられちゃ困るからな。多少のわがままは聞いてやらねえと」

後部座席で身柄を拘束されているため、運転席にいる黒山さんの顔は見えないが、その声はどこか楽し気だった。

「じゃあ……この人たちも、そのわがままの巻き添えってことですか」  
そう言っ僕は後部座席にいる人たちを改めて確認する。

まず僕を車の中へと引っ張り込んだ張本人であり、現在も片腕で僕の体を拘束している王賀美さん。

さらに烏山武光さん、白石宗さん、朝野市子さんと、サイド甲の役者が景を除いて勢ぞろいしていた。

いやほんと何してんのこの人たち。

「はっ、ちげえよ。俺たちはお前への借りを返しに来ただけだ」

王賀美さんは好戦的な笑みを浮かべたままそう告げる。

それを見て僕は、お礼参りをされるのだと考えた。

「劇をグチャグチャにした僕への報復ってことですか」

「いえ、それも違います。僕たちはあなたに感謝しているんですよ」  
僕の勘違いに対し、白石さんが穏やかな笑顔で僕の考えを否定する。

正直言つて、僕は白石さんのその言葉の意味を理解できなかった。  
実際に僕がやったことは、景の怒りを焚きつけるという、彼らに迷惑がかかるようなことだ。

恨まれこそすれ、感謝されるいわれはない。

「園山くん、君がどんな考えを持っていたとしても、あの日の劇がより良いものになったのは確かだ」

「そうですよ。私だって最初は腹が立ちましたけど、彼女は私に同情されるほど弱くなかった。それにその後、私もしっかり殻を破れたので今は感謝しかありません」

鳥山さんも朝野さんも、白石さんの言葉に同調するようにして、僕の目を真つすぐとらえる。

どうやら全員の共通認識であることは確からしい。

「これは俺たちからのお礼だよ。景と会ってないのは知ってるぜ。初日の公演以降、ずっとそのことで怒ってたからな。どうせ合わせる顔がねえとでも思ってたんだろ」

「……」

王賀美さんの言葉は凶星だった。

だからこそ僕は何も言い返すことができない。

「そういうわけで、こうして言い訳できねえよう無理やり連れて行ってやってんだ。感謝しろよ」

お礼なのにな？

どちらかというと、仇で返されてる気がするんだけど。

「大丈夫です。きつと悪いようにはなりませんから」

その声は後部座席にいた誰のものでもなく、助手席から聞こえてきたものだった。

そして僕は、この声をよく知っている。

「花子さん……」

「はい、お久しぶりです。光さん」

今まで座席シート影の影になって隠れていた花子さんが、振り返るようにして僕と顔を合わせる。

「初日の公演が終わった後、私も景さんに全て話しました。私が光さんに協力を申し出たことも、私がかもとと仕組んでいたことも、そして……私がかつてあの男とお付き合いしていたことも」

そうか……、花子さんはすべて打ち明けたのか。

自身の後悔と罪の記憶、そして怒りの源となった過去を景に話すと告げる花子さん。

それで僕は理解した。花子さんも僕と同様に、自分の怒りに折り合いをつけることができたのだと。

「それを聞いたときの景は……、どんな様子でした？」

「やはり動揺していました。もちろん怒りもありました。ただ、すぐに彼女は悲し気な顔を浮かべて、逆に謝罪したんです。『ごめんなさい。花子さんたちが一人きりだったことに気づけなくて』と」

花子さんの話す景の姿は、僕の想像通りのものだった。

改めて僕は景の心の強さを実感する。

「景さんは、主犯者である私を責めようとはしませんでした。ですから、共犯者でしかない光さんが責められる道理はありません」

それはいくら何でも暴論だ。

だって僕の裏切りは、花子さんの裏切りと違って、10年にも及ぶ積み重ねからのものなんだから。

許されるはずがないし、なにより僕自身が許されたいと思っていない。

罪には罰を——僕はこの罪悪感を、手放すつもりは微塵もない。

「なんなら不倫のことよりも、むしろ昔に光さんと会っていたことの方が、厳しく問い詰められたくらいです。景さんと会ったら伝えておいてくださいね。私と光さんは何もなかったと」

それは知らないです。

「おい、ごちやごちや考えてねえで、とりあえず景と会ってこい。男が追ってくる女から逃げんじやねえ」

王賀美さんがそう言うと同時に走っていた車が止まり、ドアが開いて僕は車外に放り出される。

乱暴すぎる扱いに文句を言っただろうと王賀美さんを睨みつけると、王賀美さんは笑いながら僕に告げた。

「早くこっち側へこい。お前とも楽しく遊べそうだ」  
「……………」

最近やたら勧誘されることが多いなと考えていると、車はそのまま走り去ってしまう。

改めて辺りを確認してみると、目の前に公園があった。

そしてその公園は、僕にとって思い出深いものであり、絶対に忘れられない場所。

「懐かしいな……………」

僕は公園内に足を踏み入れる。

ここは小さいころよく遊んでいた公園で、大切な幼なじみと初めて大喧嘩をした場所。

それと同時に、初めて誰かを好きになった場所だ。

喧嘩の理由は、もう覚えていない。

それでも、喧嘩をした相手の表情は忘れたことがない。

公園内のどこで喧嘩をしたのかも、はつきりと覚えている。

それなりに広さのある公園で、僕は確信を持ってその場所へと向かう。

きっと彼女も、そこにいると信じて。

案の定、彼女はそこに立っていた。

彼女は僕の姿を認識するが、声をかけてくることはない。

まるで僕が所定の位置に立つのを、彼女は待っているようだった。そのため僕は、彼女が求めているであろう場所に立つ。

あの日あの時と同じ場所で、僕と景は向かいあった。

すると、景は僕の目を真つすぐとらえ、ゆっくりその口を開く。

『もう知らない。光なんて大っ嫌い』

僕に向かってそう告げる景の姿が、かつての姿と重なった。

まだ小さかったあのころ、僕たちはこうして向かい合い、喧嘩していたんだ。

10年の月日が経ったことでお互い成長し、その在り方も大きく変わっている。

ただの近所の知り合いだったころから、関係性も大きく変化した。

だからこそ、景は僕をここに呼び出したんだ。

間違いなくここが、僕と景の原点だから。

「……花子さんから光のことを聞くまで、すっかり忘れていたわ。ここが、初めて光に対して怒りを持った場所だったってこと」

花子さんから話を聞いたという景の言葉に、僕はそれほど驚かない。

花子さんにはあらかじめ、初日の舞台が終わって景から色々聞かれたら、隠さずにすべて話してほしいとお願いしていたからだ。

だからおそらく、僕のずっと隠してきた感情のことも含め、今の景は全てを知っている。

その上で、景は僕に会いに来たということだ。

「光のこと、全部聞かせて欲しい」

「花子さんから聞いたんでしょ」

「うん。でも、私は光の口から聞きたい」

「……わかった」

ここまでできたら、さすがの僕も逃げようとは思わない。

僕は全てを、景に打ち明ける覚悟を決める。

「長い話になるから、移動しようか」

といっても、移動した場所は同じ公園内で、ブランコに二人とも腰を掛けただけ。

「じゃあ最初から話すよ。僕はあの日、この公園で、君に恋をした――」

そうして、僕は話し始める。

ずっと隠してきた事実を、ずっと秘めていた感情を。

時折、景からの疑問にも答えつつ、全てを打ち明けていく。

「あの男が出ていく前日、何故か僕にだけ連絡先を渡してきたんだ。最初は意味が分からなかったけど、僕に自覚させるためだったんだと、後になって気づいた」

「どうして、そのことを伝えてくれなかったの？」

「連絡先を渡された時に言われたんだ。もし景たちにこのことを話したら、連絡先を変えて、今度こそ誰も知らない場所に行ってしまうて」

今となっては、色々やりようがあったように思う。

でも当時の僕には、全てを上手く解決させる方法が思いつかなかった。

いや、考えなかっただけかもしれない。

あの男の思惑通り、僕は確かに、悲しみに暮れる景の表情を楽しんでいたから。

「僕があつた男と連絡が取れなくなったのは、花子さんがあの男に捨てられたのと同じタイミングだったんだ。その時に花子さんとは知り合った」

その後も、あの時なにを考えていたのか、あの時なにを感じていたのか、そういった細かい感情まで詳細に伝え続けた。

そんな僕の懺悔にも近い告白を、景は感情を荒げることなく聞き続ける。

時間にしてどのくらい経っただろうか。

「――それで、景との関係を絶つために、僕は花子さんの話に乗った。

後は景も知っている通りだ」

僕は言いたかったこと、隠していたことの全てを話し終える。

景に話すことなんて一生ないと思っていた話を、包み隠さず全て打ち明けた。

それが僕には、なんだか信じられない気分だった。

「今でも、光は私との関係を絶ちたいと思ってるの？」

「……うん」

「どうして？」

「だって、僕のこの想いは、景の不幸を望むものなんだ。このまま僕と一緒にいても、景は不幸になるだけ——」

「ふぎけないで!!!」

景は急に大声を上げたかと思うと、勢いよく立ち上がり、僕の方へと詰め寄る。

僕の目の前まできた景は、座っている僕を見下ろすようにして、怒りの表情を見せていた。

その表情は、初めて喧嘩をしたあの日のものとそっくりで、僕はただ見惚れてしまう。

「なんでそうやって不幸になるだなんて決めつけるの!？」

「……でも、僕は実際に舞台で——」

「確かにその時は私も傷ついたけど、結局は私の演技のため、私のための行動だったじゃない!」

「ちがっ——」

「違うない!!!」

景は僕の言葉を遮るようにして叫び、さらに僕の胸ぐらを掴むようにして顔を近づける。

「光はずっと私に優しくしてくれた! いつも味方になってくれた!

落ち込んでるときは励ましてくれた! いつだって隣にいてくれた! よく野菜もお裾分けしてくれたし、ルイとレイの面倒も見てくれたし、杉北祭では停学になってまで映画の上映を手伝ってくれた!」

僕の反論など許さないとばかりに、景はまくしたてる。

そんな自分の気持ち正面から感情のままぶつけてくるその姿は、羅刹女の時など比べ物にならないくらい、今までで一番きれいに思えた。

そして景は、僕に決定的な言葉を告げる。

「私は光に好きになつてもらえて幸せだった!!! この気持ちは光にだつて否定させないんだから!!!」

「――」  
信じられない気持ちだつた。

その言葉は、僕が絶対に言われるはずないと思つていた。でも確かに、景はその言葉を口にした。

幸せだつた――と。

ずっと不幸にしていると思つていた。

僕は景の疫病神で、不幸にするしかできない存在なんだと。

僕だけじゃない。周りの人間だつてそう思つていた。

『夜風のこと大切なら、君は夜風から離れた方がいいよ。君の抱えるそれは、いつか夜風を不幸にする』

『君は劇薬です。私ですら使うのをためらうほどの。その存在はどうあがいても毒にしかなり得ない』

『光さんと景さんの関係は、どちらかが不幸になることでしか成立しない』

僕の正体を知った人間は、みんな決まつてそう言つた。

そのたびに、僕が一番わかっていると心の中で吐き出したのを覚えてる。

それを景は否定した。

僕じゃない、他の誰でもない、景自身が否定したんだ。

その上、景は幸せだつたとまで言つてくれた。

こんなに――こんなにも幸せなことが、あつていいのだろうか。好きになつた相手が、その好意を肯定してくれる。

誰もが否定する中で、景だけが認めてくれる。

歪んだ僕には、絶対に訪れないと思つていた未来が、今ここにある。僕の頬には、いつの間にか涙が流れていた。



今なら言える。

強がりでもなく、虚勢を張るわけでもなく、心の底から。

間違っていたかもしれない。

歪んでいたかもしれない。

それでも僕は、君の激情に恋をして——本当に幸せだった。

## エピローグ ①

「落ち着いた？」

「うん、大丈夫。ごめん、急に泣き出したりして」

感情が高ぶったことで、涙まで流してしまった僕。

人前で泣いたのなんてこれが初めてかもしれない。

それも景の前で泣いてしまったという事実には、かなりの恥ずかしさを覚えていた。

「それにしても、光が泣いとるとこなんて初めて見たわ」

「お願い、恥ずかしいからそれ以上突っ込まないで」

「ふふっ」

楽しそうに笑う景を見て、僕はさらに恥ずかしくなる。

勘弁してほしい。

「あつ、そういえば、もう一つ光に聞きたいことがあったんだけど」

「…………？」

一体なんだろうか。僕が話すべきことは全て話したつもりだ。

隠し事ももうない。だから僕が答えられることなんて――

「私たちって、まだ付き合ってるわよね？」

…………おっと。

「千世子ちゃんがね、変なこと言うのよ。光が私と別れたみたいなのと言ってたって」

ああ、うん、あー…………。

「でも光に別れようなんて言われてないし、私も言っていないから、私たち別れてないわよね？」

…………そうか、景にとっては別れてないっていう認識なのか。

あんな事があった後だから、自然と関係も消滅したものだ…………

「その…………すごく言いにくいんだけど、あれだけ酷い事した後だし、景も心の底から僕のことを憎んでたし、おのずと別れたってことになる

かなって——」

「ひなたちだって、しよつちゅうケンカくらいしてるわ」

いや、あの二人多分まだ付き合ってるし、ほとんど朝陽さんの片思いというか……

それよりも、あれだけの事があつたのに、それをケンカなんて言葉で済ませるの？

僕は本気で景との関係を絶つ覚悟でやった事なんだけど。

「えっと、それにもとを正せば、あの時の告白は純粹な気持ちでしたものじゃなくて、よこしまな考えが混じった上でのものだから、今の僕はあれを告白したことにカウントしたくないんだ」

「じゃあ光は、もう私のこと好きじゃなくなったの？」

「いや、そういうわけじゃなくて——」

「じゃあ今もう一回告白して」

……………え、今？

「そしたら今度は、私もハッキリと自信を持って光の言葉に答えるから」

景は僕の日を真つすぐと見つめて離さない。

さあこいと言わんばかりに。

「でもさ、こういうのって雰囲気とかもあるし、いきなりしろって言われても……」

「前の告白の時は、千世子ちゃん迫られたすぐ後だったの？」

……………」

まずい、せつかく自分のことを許せかけていたのに、過去の自分の行動を思うとまた嫌いになりそうだ。

というか百城さん、そんなことまで景に話したのか。

正直な話、そこだけは百城さんのプライバシーに関わってくるから、それとなくぼかしたのに。

「私のこと好きなら何も問題ないでしょ。ほら早く」  
……………」

もう覚悟を決めるしかないのか？

そりやもちろん、景に気持ち伝えられることは嬉しい。

ただつい数分前まで、僕は二度と景とは関わらないつもりでいたんだ。

それがいきなり告白を強要されるようなことになって、気持ちの整理がまったくついていない。

かといって、この場をなあなあで済ますことを許してくれそうもない。

景はあの日の羅刹女のような雰囲気で、僕が口を開くのを待っている。

やはり、覚悟を決めるしか――

「ダメだよ。告白を強要させるようなことしたら」

それは僕と景に割り込む第三者の声。

まるで天からの救いのような言葉に、僕は勢いよくその声の主の方に顔を向ける。

そこには、二人目の羅刹女がいた。

「百城、さん……」

「こんばんは、光くん、夜風さん」

百城さんは笑顔で浮かべ、当たり前のように僕たちへ挨拶の言葉をかける。

一方で、真剣な表情で僕に迫っていた景も、その表情をとびつきりの笑顔に変えて、百城さんの方へと顔を向ける。

「こんばんは、千世子ちゃん。どうして千世子ちゃんがここにいるのかしら？」

「黒山さんから聞いたんだ。二人がここにいてるって」

「……あのヒゲ」

笑顔のまま、ボソリとつぶやかれた景の低く冷たい言葉を、僕は聞き逃さなかった。

きつと今ごろ、面白がって笑っているであろう黒山さんの姿が目に見え浮かぶ。

そしてこの後、景とケンカするところまで想像できた。

「ちよつと待っててもらえないかしら。今は私と光で大切な話をしているの」

「光くんのことなら、私も関係あるんじゃない？」

「ないわ」

「あるよ。私だって、光くんに告白して、今は返事待ちだから」

あれ、そうだったっけ？

もしかしてファンにしてみせるみたいな話のこと？

「千世子ちゃんには悪いけど、光は私のことが好きだから」

「でも光くんの秘密を教えてもらったのは私の方が先だし、羅刹女の勝負も私の勝ちだったんだから、今はもう心変わりしてるかも」

「視聴者投票では負けただけど、光の好きな演技は私の方のはずよ。だってそのために、わざわざ光自身が協力してくれたもの」

「でも私の演技を見て、もう一度見たいって言ったらしいよ。実際に何度も見に来てくれたし」

景と百城さん、二人の圧はどんどん強くなっていく。

静かに怒りをつのらせる二人の言い争いを見て、喜んでいる自分がいるが、話がややこしくなるので心の隅に置いておく。

今はとにかく、この場を治める方法を――

「光」「光くん」

そう考えていると、二人から同時に名前を呼ばれる。

もう嫌な予感しかしない。

「二どっちの演技の方がよかった？」

誰か助けて。

この後、僕は二人の演技のよかったところを事細かに伝え、どちらも良かったという逃げの解答で、なんとか窮地を脱した。

殺されるかと思うほど二人からは睨まれたけど。

公園での出来事から数日後――

「やっと光くんも、こっち側にくるって決めたんだ」

「うん、なんだか散々遠回りした気がするけど、百城さんも含めていろんな人に背中を押されたから」

僕はとある建物を訪れ、百城さんに案内される形で、ある人物に会いに来ていた。

大きさでも何でもなく、今後の人生を左右する決断を伝えるために。

「ほんとごめん、わざわざ百城さんに案内させるようなこととして」

「いいよ、私が好きでやってることだから。それより――」

百城さんはその場で振り返るようにして僕の顔を凝視する。

目を逸らすことは許さない。そんな強い意思の込められた表情。

その表情を向けられた僕は、『あ、これ絶対マズいやつだ』と、これまでの経験から察することができた。

ただまあ、察することができたからといって、対策できるかどうかは別の話なんだけど。

「光くんはいつになったら、私のことを名前で呼んでくれるの?」

ほらね?」

「そういうのはほら、人それぞれだし……」

「私は光くんって名前で呼んでるし、光くんも夜風さんのことは名前で呼んでるのに」

「いや、百城さんは初対面の時から僕のこと名前で呼んでたじゃん」

まああの時は多少打算的な考えもあったんだろうけど。

「それとも、私のことを名前で呼べない理由でもあるの?」  
どこか抑揄うような声と表情で僕に問いかける百城さん。  
それを受けて僕は改めて考えてみる。

しかし考えれば考えるほど、名前呼びを断る理由が見つからない。  
なによりも名前呼びをする相手が、それを望んでいるのだから。  
そうだ。百城さんはそれを望んでいる。

だからこそ僕は、今まで通りの呼び方で百城さんに告げる。

「そうだね……、名前呼びはちよつと恥ずかしいかな。景とは小さい  
ころから一緒だから、自然とお互い名前で呼び合えるけど」  
「……」

僕の言葉を聞いた百城さんは、その表情に一切の変化を見せない。  
不自然なほど変化のないその表情は、百城さんが内心苛立ちを覚え  
ていることの証。

「ふふ、そこで夜凧さんの名前を出すんだ」

「別に深い意味はないよ、百城さん」

僕は百城さんと笑いあう。

お互いとびつきの笑顔を浮かべて。

それはいつまでもこうしていたいと思うほど甘美な時間だった。

しかしその時間は、目的の場所へとたどり着いたことで終わりを迎  
える。

「じゃあ私はここまでだけど、ほんとに一緒じゃなくていいの?」

「うん、ここからは僕一人で行くべきだから」

「そっか」

僕はここまで案内してもらった感謝を伝えると、百城さんは僕から  
離れて歩き出す。

それと同時に、僕のスマホの通知音が鳴った。

画面を見ると、そこに表示されていたのは『百城千世子』の名前。  
送られてきたメッセージの内容は——『私はまだ諦めてないよ。い  
つか光くんを、私に夢中にさせてみせるから』——というもの。

顔を上げると、『ばいばい』と口にして手を振りながら、女優『百城  
千世子』はその場を去っていった。

まるで、初めて会ったあの日のように。

「……ハハッ」

初めて見た日から変わることのないキレイな表情。しかし変わらないはその仮面だけ。

仮面の奥に隠しているものも、僕と百城さんの関係も、あの日から大きく変わった。

全てが過去となった今では、本当に夢のような日々だったと思う。そして残念だけど、百城さんの言ういつかがくることは絶対になり。なぜなら僕は――

「千世子の羅刹女を見たあの日から、既に君の演技に夢中なんだから」本人には恥ずかしくて絶対に言えない言葉。

それは誰にも聞かれることなく、僕自身が噛み締めるだけで終わる。

きっと彼女との縁は、今後もしばらく切れることはないのだろうと、心のどこかで確信していた。

そうして一人になり、改めて僕は『社長室』と書かれた扉と向かい合う。

それは間違いなく、開けば人生が変わる扉。

少し鼓動が早くなるのを感じながら、その扉をノックする。

『どろどろ』

部屋の中から聞こえてきた返事を聞き、一度大きく深呼吸をして僕は扉を開いた。

「失礼します。先日お電話させていただいた園山光です」

部屋の中へと足を踏み入れ、ハキハキとした声を意識しながら挨拶の言葉を投げかける。

スターズ芸能事務所社長、星アリサさんに向かって。

用件はもちろん、役者になるという意思を伝えるためだ。

といっても、電話で既にアリサさんから了承をもらっているため、あくまで今日は正式に契約を結ぶだけ――



「それで、何しに来たの？」

あれー？

「何しにつて、電話で話した通りなんですけど……。それに以前直接会った時もスカウトしてくださったじゃないですか」

「してないわ」

ええ……。

「少なくとも、あなたみたいにくっついた表情を浮かべる子をスカウトした覚えはないわ」

……この人、本当に鋭いなあ。

スカウトされた時も僕の本性を見透かしてたみたいだし。

「まあいいわ。あなたは容姿が整ってるから雇ってあげる」

「……」

顔を褒められたにもかかわらず、僕の気持ちはどこか複雑だった。

いやまあ、役者になれるなら別にいいんだけど。

「そういえば、あなた黒山からも勧誘を受けてたのよね」

「はい、一応」

「そつちの事務所に入ろうとは思わなかったの？ そうすればあの娘と一緒にいられる時間も増えるでしょうに」

「ああ、それは……」

もちろん、それは僕も考えた。

景と同じ事務所で、一緒に切磋琢磨し合えたら楽しいだろうなど。

当然今まで以上に会うことも増えるだろうし、景の活躍を近くで見ていることができる。

それはなんて幸せな時間なのだろうと。

でもそれと同時に、こうも思ってしまったんだ。

景とは敵同士でいたいと。

結局のところ僕はある日、羅刹女の舞台上で景と向き合った日のことが忘れられないでいる。

僕に向けられたあの怒りと憎しみを、思い出したただけで胸が高鳴ってしまう。

そんな僕の歪んだ根っこはどこまでも変わらない。

だからこそ、好きな子とは隣で手を握るのではなく、正面から睨み合いたいとなるのは必然だった。

それを正直にアリサさんに伝えたと、普通にドン引きされた。ですよね。

「まあ、それであなたが幸せになれるのならそれでいいわ。問題さえ起こさないでくれれば」

そう言っただけでアリサさんは契約書等が入った書類を僕に差し出す。

「ようこそ、誰もが演じる世界へ」

「……はいー」

誰もが自分以外の誰かを演じる、それが当たり前の世界。

書類を受け取った僕は、それだけで気分が高揚したのを実感する。

これから始まるんだ。僕の役者としての人生が。

そんなまだ見ぬ未来を想像する僕に対し、アリサさんは椅子から立ち上がりながら告げる。

「じゃあ早速だけど、ちょうどこれから撮影があるからそれに参加しなさい」

……………え、今から？

## エピローグ ②

光がスターズの事務所を訪れていたのとほぼ同時刻――

スタジオ『大黒天』の事務所では、事務所の看板役者がうつ伏せ状態でソファ―に倒れていた。

しかもただ倒れているだけではなく、看板役者からは近寄りがたいほどの負のオーラがにじみ出ている。

仕事をしながらどうしても視界に入るそれを、黒山墨字はうつとしそうな表情で見つめていた。

「おい柎、何だあれ。うつとうしいからやめさせろ」

「光くんが役者になるって聞いて最初は喜んでたんですけど、うちじゃなくてスターズに入るって知って一気に落ち込んだみたいで」

不機嫌まる出しの声で尋ねられた柎は、なんとか取り繕った笑顔で答える。

「ったく……。おい夜風、前から言ってたろ。あいつの性格からすれば、役者になってもうちにはこねえって」

「おかしいじゃない!!」

黒山の言葉を受けた看板役者の夜風は、勢いよく起き上がり、抗議するように大声を上げた。

「好きな人とは一緒に居たいって思うのが普通でしょ！　なのに黒山さんの話が本当だとすれば、光は私のことを好きになればなるほど離れていく！　そんなのどうしようもないじゃない！」

「んなもん俺が知るかよ！　じゃあとつと諦めて百城にでもやりやあいいだろ！」

「それは絶対にイヤ!!」

ギャアギャアと子供のように大声で喧嘩する二人を見て、めんどくさいとばかりに柎はため息をつく。

二人の喧嘩だけでなく、理解し難い夜風たちの恋愛関係も含めて。

光と夜風の恋愛を初々しい少女漫画のようなものだと考えていた柊だが、百城も加えた昼ドラ並みの愛憎劇だったと知り、微笑ましく感じていた気持ちは既に消えている。

今の柊には、どこか自分の知らない所でやってくれという突き放すような思いしかなかった。

そんな柊をよそに、相変わらず喧嘩を続ける夜風と黒山。

しかし黒山は急に落ち着きを取り戻したかと思うと、ぼそりと小さくある言葉を告げる。

「——まあ、方法がないとは言わねえけどよ」

「なに?」

その言葉を聞いた夜風はすぐに立ち上がり、黒山のデスクに乗り出して近づく。

今すぐその方法を教えろとばかりに。

「あいつの性格は確かに筋金入りだ。といっても、結局は好みの話ではない。激情を受ければ好きになるって話じゃなく、好ましいと感じるものでしかないんだよ」

「どういうこと?」

「好みだとかタイプだとか、そういうのを越えて人を好きになることもあるって話だ。ほらいるだろ。たくさん食べる女が好きとか言っときながら、まったく食わねえモデル体型の女と付き合うやつ」

その例えはどうなんだと口にした柊だが、巻き込まれたくなかったため心の中だけにとどめた。

「つまり激情とか関係なく、私の隣にいたいと思わせればいいってこと?」

「そういうことだ。ま、さつきもいったがあいつは筋金入りだ。生きることと演じることが同義だったんだからな。役者として向き合うとなりや、今のお前だって下手すりゃ食われる可能性も——」  
「やってやるわ」

黒山の言葉を遮るようにして宣言する夜風。

その表情と声には強い決意が込められている。

「だって、光に気持ちを自覚させたのは10年前の私だもの。今の私

が負けるわけにはいかないから」

「……そうだな」

徐々に役者としてのプライドを持ち始め、羅刹女の舞台を経てより強くなった夜風に、黒山は満足げな表情を浮かべる。

とある一本の映画を撮る——そんな自身の目的が、すぐそこまで近づいている証拠だったからだ。

「……激しい愛情も、立派な激情には違いねえか」

「……？ 何か言った黒山さん？」

「何も言ってねえよ」

小さくつぶやかれた言葉は、誰にも聞こえることなく消えていく。「待ってて、光。絶対にあなたの隣に立ってみせるから」

目の前に立ちたい光と、隣に立ちたい夜風。

全てを知った後でも、相変わらず彼らはすれ違い続ける。

ただ今までと違うのは、彼らが確かにお互いを見て、そのすれ違いを理解しているということ。

理解したうえで、彼らはその恋を自らの望む形に落ち着かせようとしている。

恋は戦い——それはまさに、光と景の現在を表す言葉だった。

—————

「うちの社のHPにのせる簡単な宣伝映像、いわゆるPV撮影ね。あなたと同世代の若手俳優たちを紹介する内容よ」

そんなふうにはアリサさんから説明を受けながらたどり着いたのは、まさに今撮影が行われているスタジオだった。

パツと見たところ、僕と同世代の少年少女が数多く集まっている。当然ながら全員容姿は整っており、ちらほらとオーラを発している人も見受けられる。

さすがに景や王賀美さんレベルの人はいないけど。

そんな若手俳優たちに加え、撮影スタツフを含めたスタジオ内の全員が一斉に僕の方を向く。

正確に言えば、僕の隣にいるアリサさんに。

「え、なんで社長が？」

「お前聞いてたか？」

「いえ、そんな予定は……」

「とうるか隣のやつ誰だよ」

予定外の社長の登場ということで、スタジオ内に生まれた戸惑いがわかりやすく伝わってくる。

中でも若手俳優たちのほとんどは見るからに委縮していた。

「ごめんなさい。急で申し訳ないけど、この子も撮影に加えてくれな  
いかしら」

そんな困惑した空気を切り裂くように、アリサさんが撮影ディレクターらしき人に頼み込む。

「えつと、メインとして彼を加えるってことですか？」

「いいえ、個別で紹介する子は変えずに、最後の全員が映るシーンに入れるだけでいいの」

「それならぜんぜん大丈夫です。はい」

しばらくアリサさんとディレクターらしき人が二人つきりで話を進め、その話がまとまるとアリサさんはまた僕の方へと戻ってくる。

「さあ、行つてきなさい」

「……………え？」

いや行つてきなさいと言われましても。

「このまま行くんですか？ その、衣装とかメイクとかそういうのは……………」

「そんなものなくていいわよ」

「ええ……………」

なんだか適當過ぎない？

そりや景みたいに独創的な服装をしてるわけじゃないけどさ。

納得できない部分もあったが、アリサさんの指示通り僕は撮影に加わる。

急に社長に連れてこられた得体のしれない奴ということ、悪目立ちして非常にやりづらい。

好意的な視線も少しは存在するが、そのほとんどが探るような視線。

記念すべき初仕事だというのに、すでに帰りたくなってきた。景に会いたい。

そうこう考えているうちに撮影が始まる。

といつても、僕の役割はひな壇の上に立ってカメラに目線を向ける。その他大勢のうちの一人。

しかも中段あたりの一番端という全く目立たない位置。

ひな壇の前では、おそらくこのPV撮影の主役らしき人が一人だけ前に出て、カメラに向かってスターズの宣伝らしき文言を述べている。

対して僕は一言もしゃべらず、その場に突っ立っているだけ。

……まあ、最初から目立つ役やポジションを与えられるなんて考えてなかったし、こうして仕事をもらえるだけでもありがたいことだ。というのは理解している。

ただこんないてもいなくても変わらない役のために、アリサさんがわざわざ僕を撮影に加えたことには疑問が残った。

後でアリサさんに直接聞いてみようと考えたところで、主役の人物がセリフを全て言い終える。

これで撮影も終わり——かと思いきや、スタッフさんたちが集まって何やら深刻そうに話し合いを始めた。

「え、なに？ 終わりじゃないの？」

「まだ動いたらダメ？」

「なんか変なところあったか？」

その様子を見て周りの若手俳優たちもザワザワとし始める。

そんな中で僕は強烈に嫌な予感を感じていた。

なぜなら集まって話しているスタッフさんたちが、チラチラと僕の方に視線を向けているからだ。

最初は勘違いかとも思ったが、やはり間違いない僕の方を見て何かを話している。

そんなおかしなことをしたつもりはないんだけど。

撮影が止まったまま進まないことに僕は不安を感じていると、女性スタッフの一人が僕の方へと駆け寄り声をかける。

「ごめん、君ちよつと移動してもらってもいいかな？」

「えっと、すいません。僕なにかおかしなことしてしまいましたか？」

「ああ、そういうわけじゃないの。君がなにか悪いとかじゃなくて、ほら、君は容姿がすごく整ってて目立つから、もう少し目立たないように移動してもらおうと思って」

「……わかりました」

正直納得できない理由ではあったが、僕は素直にスタッフの指示に従って移動する。

移動した場所は前の人の頭とほとんどかぶっており、カメラには僕の顔が半分も映らないような位置だった。

目立たないようにといっても限度があるでしょ。

本当に僕のいる意味がなくなってきたな。

そんな僕の顔がほとんど映らない状態で、撮影が再開しようとしていたその時、アリサさんが待ったをかけた。

アリサさんは少し時間をくれというふうに変にディレクターと話すと、僕を手招きして呼び寄せる。

その手招きに応じ、近づいた僕がアリサさんからかけられた言葉は苦言だった。

「何してるのあなた」

「むしろ何もしてないんですけど」

アリサさんの理不尽な言葉に、僕はつい反射的に言葉を返してしま

う。

「この撮影の主演はあなたじゃない。なのにあなたが一番目立ってど



うするの」

「いや、それはどうしようもないじゃないですか。顔を変えるなんてできないですし」

そもそも目立っていた自覚すら僕にはない。

ただその場に立っていただけなんだから。

「何も難しいことじゃないわよ。今まであなたがやってきたことをやればいいんだから」

「……？」

「そうやって生きてきたんでしょ。自分を隠して、あの娘の隣にいるために」

「あ……、そっか」

アリサさんのその言葉は、僕の中にストンと落ちた気がした。

そうして撮影が再開する。

ひな壇のものと場所へと戻った僕が想像するのはかつての自分。

大人しく、迷惑をかけず、悪目立ちしないことで、景の傍に居続けたあの日々を思い出す。

本当に簡単なことだった。ずっと付けていた仮面を、かぶり直せばよかつただけのことなんだから。

すると撮影は何事もなく終了する。

先ほどまでごちゃごちゃしていたのが嘘のように。

後から聞いた話だが、この時スタッフ全員がひどく驚いていたらしい。

どうしても主役より目の行ってしまふ少年の姿が、突然消えてしまったように思えた。

撮影を終えた僕はアリサさんのもとへと戻る。

「あなたはスターとしての素質を生まれながらにして持っているわ。それこそ、あの娘や陸に負けないほどの素質を」

アリサさんは僕の目を真っすぐとらえ、静かな声で告げる。

その目は僕を誰かと重ねているようにも見えた。

「事務所で推したりしなくとも、きっとあなたは世間に見つかる。そしてトントン拍子でこの世界のトップにたどり着くはずよ。でもだ

からこそ、あなたにはしばらくの間、いろんな経験を積むことを重視して欲しい」

「今日みたいにも、ですか？」

「ええ、いろんな現場、いろんな撮影、いろんな役を見て聞いて学んで、あなたには役者として生きることの楽しさを知ってもらおう。だからあなたにはしばらく大きな役は与えないし、オーディションも受けさせない。少なくとも高校を卒業するまでは仕事をこつちで制限させてもらうわ」

この時の僕は、アリサさんが何を懸念していたのかわかっていなかった。

これも後になってなんとなく理解できたことだが、おそらくアリサさんは僕が役者を辞めてしまうことを懸念していたんだと思う。

役者への憧れとか、役者として生きる覚悟なんてものはなく、僕の中にあったのは景や百城さんと共演したいという願望のみ。

だからこそ、アリサさんは役者として生きることそのものの楽しさを教えたかったのだろう。

先ほども言ったが、この時の僕はアリサさんの考えを全く理解できていない。

アリサさんが僕を誰と重ねているかもわからない。

それでも、アリサさんのその方針に逆らおうという気は起きなかった。

アリサさんが真剣に僕のことを考えて言っていることは、嫌でも伝わっていたから。

「わかりました」

了承の意を伝えると、アリサさんはかなりわかりにくいけどどこか安堵したような表情を浮かべる。

きっとこの人にも、これまで後悔するようなことが何度もあったんだろうなど、勝手に想像してしまう。

「この世界で太く長く生きていくために、役者として幸せになりなさい。わたしも、あなたたちから逃げないと決めたから」

その言葉に、僕は力強く返事をする。

僕の役者としての人生は、間違いなくこの時から始まった。

数ヶ月後――

多くの人が行きかう東京の街中で、僕は撮影現場に向かうため歩いていった。

撮影といっても、僕が演じるのはセリフもないエキストラ。

しかし初めての時代劇ものの撮影現場ということもあって、少しワクワクしながら現場へと向かっていた。

そんな中、少し先の道で歩く人全員が一樣に同じ方を向きながら歩いている場所を見つける。

性別も年齢も関係なく、歩きながら顔を正面ではなく見上げるようにして上に向けている。

中には立ち止まり、スマホで写真を撮っている人までいた。

僕もその場所まで移動し、皆が向いている方に顔を向けると、その注目の理由を理解する。

それはビルの屋上の看板。その看板には、大手企業の広告塔となった女優の顔がどアップで映し出されていた。

その女優とはもちろん、今や日本でその名を知らぬ者はいないほど

の有名女優となった夜風景。

僕は景の看板に向かって手を伸ばす。

当然のようにその距離が縮まることはない。

あつという間に、手の届かない所に行ってしまった幼なじみ。

本当に、おかしな話だと思う。

僕はずっとこうなることを望んでいた。

景が女優になると聞いたとき、僕は嬉しかったんだ。

女優として成功することを微塵も疑っていなかったからこそ、これ

で景と離れることができる。

二人の道は別れ、そのまま疎遠になっていくのだろうと。

景を不幸にしないためにも、こうするのが一番なのだと。

それが実際に遠くへと行ってしまった今、僕も役者として生きるこ

とを決め、景に必死に追い付こうとしている。

この濃密で僕の人生を大きく変えた1年ほどを思い出し、改めてお

かしな話だと思う。

何度も迷って、何度も間違えて、何度も考え続けて、結局僕は何も

変わらなかった。

それでも、もう僕の心に迷いはない。

景と正面から向き合うために、この道を進み続けると決めたから。

僕は伸ばした手をぎゅつと握り、力強く宣言する。

「追い付いてみせるよ、景。絶対に君の前に立ってみせるから」

この数年後、とある幼なじみが主演とヒロインとして初めての共演を果たすのだが、それはまた別の話。

君の激情に恋をして　く完く